

而盡、月小則餘二莢、厭而不落、名爲遺莢とある。【六】夏圖 洛書なり。夏禹の水を治むる時、龜あり文を負ふ。禹因つて之を第して九疇を成す。【七】三朝 敬宗・文宗・武宗。棣萼は兄弟をいふ。敬宗・文宗・武宗は皆穆宗の子にして兄弟なり。

【詩意】 文宗皇帝が崩御になり、大葬の儀仗が長安の都を出た。文宗の靈が青天に歸したので、今上皇帝が玉座を下つて文宗を葬るのである。文宗は堯と其徳を同じうし、今上は夏禹と其功を同じうする。三朝の天子が兄弟相禪つたといふことは古來未だ嘗てない所である。

【三】

嚴恭七月禮。哀慟萬人心。

嚴恭なり七月の禮、哀慟す萬人の心。

地感勝秋氣。天愁結夕陰。

地感して秋氣に勝り、天愁へて夕陰を結ぶ。

鼎湖龍漸遠。濛汜日初沈。

鼎湖龍漸く遠く、濛汜日初めて沈む。

唯有雲韶樂。長留治世音。

唯雲韶の樂のみ有り、長く治世の音を留む。

【字解】 【一】七月禮 左傳に天子七月而葬、同軌畢至とある。【二】鼎湖 黃帝の天に升起し處。龍は天子に喩ふ。【三】濛汜 太陽の没する處。【四】雲韶 舜の樂。文宗の音樂に喩ふ。

【詩意】 七月に恭しく大葬の禮が行はれて、萬人の心を哀慟せしめ、天地も爲に愁へて夕陰を結ぶこと秋氣に勝る程であつた。今や文宗崩じて此世に在さず、ただ治世の音たる雲韶の樂を留むるのみである。

【四】

化成同軌表清平。

化成同軌清平を表し、

恩結連枝感聖明。

恩結連枝に結んで聖明を感せしむ。

帝與九齡雖吉夢。

帝九齡を與ふるは吉夢なりと雖も、

山呼萬歲是虛聲。

山萬歲を呼ぶは是れ虛聲。

月低儀仗辭蘭路。

月は儀仗に低れて蘭路を辭す、

風引箛簫入栢城。

風は箛簫を引きて栢城に入る。

老病龍髯攀不及。

老病龍髯攀づれども及ばず、

東周退傅最傷情。

東周の退傅最も情を傷ましむ。

【字解】 【一】化成 易經に聖人久於其道、而天下化成とある。同軌は車輶の廣狹同じきなり、四夷の國に別つたり。天下といふが如し。【二】連枝 兄弟を謂ふ。蘇武の詩に、況我連枝樹、與子同一身とある。【三】帝 天帝。九齡は九歳。禮記に武王曰、夢帝與我九齡とある。【四】山呼萬歲 漢書武帝紀に、元封元年親登崇高、御史官屬在廟旁、咸聞呼萬歲者三とある。【五】箛簫 喪式の樂器。栢城は墓なり。【六】龍髯 黃帝龍に騎つて天に上る。小臣上るを得ず、悉く龍髯を持す。【七】東周 洛陽をいふ。退傅は引退した太子少傅。

【詩意】 文宗は能く天下を化成して太平を致し、恩は兄弟に及んで聖明を感せしめた。昔天帝が武王に九歳の壽を與へたといふのは唯夢に過ぎず、漢の武帝の時に、どこからともなく萬歲を唱へる聲が聞えたといふが、それは虚言であらう。今や月が大葬の儀仗を照して蘭路を去り、風が箛簫の聲を引いて陵墓に入つた。我は老病の身であるから、文宗の後を慕つて呼返さうと思ふが、それも出來ず、

ただ獨り心を傷ましむるのみである。

時熱少見客。因詠所懷

時熱く客を見ること少し、因つて所懷を詠す

冠櫛心多懶。逢迎興漸微。

冠櫛心多く懶く、逢迎興漸く微なり。

況當時熱甚。幸遇客來稀。

況んや時の熱甚だしきに當り、幸に客の來る稀なるに遇ふ。

濕灑池邊地。涼開竹下扉。

濕は池邊の地に灑ぎ、涼は竹下の扉を開く。

露牀青篔簹。風架白蕉衣。

露牀青篔簹の簾、風架白蕉の衣。

院靜留僧宿。樓空放妓歸。

院靜にして僧を留めて宿せしめ、樓空しくして妓を放ち

衰殘強歡宴。此事久知非。

衰殘強ひて歡宴せんとするも、此事久しく非なるを知る。

【字解】

〔一〕露牀 露天にある寢臺。青篔簹は青竹のかたむしろ。〔二〕風架 風のよく當るやぐら。白蕉衣は白い芭蕉布の著物。〔三〕衰殘 衰廢なり。

【題義】

炎熱の時節に來客が少いので、感懷を述べた詩である。

【詩意】

髪を櫛り冠を戴くに懶く、人を招待する興味も薄くなつた。況んや今や盛夏の時節なので、幸に來り訪ふ客も少い。因つて池邊の地に水を灑ぎ、竹林の下の扉を開き、露天の寢臺に青竹の簾を敷いて其上に臥し、風のよく透る架の上に白蕉の著物を著て坐しなどした。書院が靜なので

僧を留めて宿せしめ、妓を解放して歸したので樓ががらあきになつた。老衰して強ひて歡宴しようとしても、最早當年の感興は湧かない。

宣州崔大夫閣老忽以近詩數十首見示。吟諷之下。竊有所喜。因以長句寄題郡齋

宣州の崔大夫閣老忽ち近詩數十首を以て示さる。吟諷の下竊に喜ぶ所あり。因つて長句を以て郡齋に寄題す

謝玄暉歿吟聲寢。

謝玄暉歿して吟聲寢み、

郡閣寥寥筆硯閒。

郡閣寥寥たり筆硯閒なり。

無復新詩題壁上。

復た新詩の壁上に題する無く、

虛教遠岫列窓間。

虚しく遠岫をして窓間に列せしむ。

謝宣城郡内詩云。意中列遠岫。

忽驚歌雪今朝至。

忽ち驚く歌雪今朝至るを、

必恐文星昨夜還。

必ず恐る文星の昨夜還るを。

再喜宣城章句動。

再び宣城章句の動くを喜び、

律詩 時熱少見客因詠所懷 宣州崔大夫閣老忽以近詩數十首見示

【字解】

〔一〕閣老 唐書に、故

事、舍人年久者爲閣老とある。

〔二〕郡齋 刺史の役所。寄題は遠方

から郵寄して題すること。〔三〕謝玄暉 謝朓、字は玄暉、南齊の詩人。

嘗て宣城太守となる。世に謝宣城と稱す。〔四〕郡閣 郡齋に同じ。

〔五〕歌雪 陽春白雪なり。よき歌をいふ。〔六〕文星 文章を司る星。

崔大夫に喩ふ。〔七〕敬亭山 山の名。安徽省宣城縣の北に在る。

飛觴遙賀敬亭山 觴を飛ばして遙に賀す敬亭山。

謝又有題敬亭山詩。並見下文選。

【題義】宣州刺史崔氏（前に病中辱崔宣城長句見寄云云と題する詩あり）が突然近作の詩數十首を寄せた。之を吟詠して竊に喜ぶ所あり。因つて此詩を賦して宣州郡齋に寄せたといふのである。

【詩意】謝朓が死んでからは詩の名人も出ないで、郡齋は寂寞として聲なく、新詩を壁上に題する者もなく、昔ながらに遠岫の窓間に列るのみであつた。突然結構な詩を寄せられたのに驚き、謝朓の如き文星が再び還つて来たことを知つた。因つて宣城の章句が再び活躍するであらうことを喜び、觴を飛ばして遙に敬亭山に祝意を表する。

足疾

足疾

足疾無加亦不瘳。

足疾加はる無きも亦た瘳えず、

綿春歷夏復經秋。

春を綿り夏を歴て復た秋を經。

開顏且酌樽中酒。

顏を開き且酌む樽中の酒、

代歩多乘池上舟。

歩に代へて多く乗る池上の舟。

幸有眼前衣食在。

幸に眼前に衣食の在る有り、

兼無身後子孫憂。

兼ねて身後に子孫の憂ふる無し。

應須學取陶彭澤。

應に須らく陶彭澤を學び取るべし、

但委心形任去留。

但心形を委して去留に任す。

【題義】中風に罹つて足の不自由なことを述べた詩である。

【詩意】足の疾はわるくもならないが又よくもならない。春から夏にかけて復た秋に及んだ。笑を含んで樽中の酒を酌み、歩行する代りに多くは舟に乗る。幸に眼前に衣食があるから凍餒の患もなく、又死後に子孫の憂ふることもない。ただ陶淵明に倣つて身心を去留に任せ天命を樂むべきである。

晚池汎舟遇景成詠贈呂處士

晚池に舟を汎べ、景に遇うて詠を成し、呂處士に贈る

岸淺橋平池面寬。

岸淺く橋平かにして池面寬し、

飄然輕棹汎澄瀾。

飄然として輕棹澄瀾に汎ぶ。

風宜扇引開懷入。

風は宜し扇の引きて懷を開きて入るに、

樹愛舟行仰臥看。

樹は愛す舟の行くとき仰臥して看るを。

【字解】(一) 別境 俗塵を離れた處。

(二) 能詩 詩に巧なこと。

(三) 呂叟 呂處士を指す。

(四) 磻溪 太公望呂尙の釣せし處。

律詩 足疾 晚池汎舟遇景成詠贈呂處士

別境客稀知不易。

別境客稀にして知ること易からず、

能詩人少詠應難。

能詩人少にして詠すること應に難かるべし。

唯憐呂叟時相伴。

唯憐む呂叟時に相伴ひ、

同把磻溪舊釣竿。

同じく磻溪の舊釣竿を把らんことを。

【題義】

夕方池に舟を汎べ好景に遇うて此詩を作り呂處士に贈つたのである。

【詩意】

岸淺く橋平かに池面が廣い。澄んだ水の上を飄然と舟を汎べて漕ぎまはれば、風が涼しくて扇の引き入るるに宜しく、岸の樹木は行舟の上に臥して看るに宜しい。俗塵を離れた佳境であるが來る人が稀だから誰も知らず、詩を善くする人が少いから此景を賦するに難い。呂叟の我に伴つて俱に釣せんことを希望する。

夢微之。

微之を夢む

夜來攜手夢同遊。

夜來手を攜へて同遊を夢る、

晨起盈巾淚莫收。

晨に起き巾に盈ちて淚收まる莫し。

漳浦老身三度病。

漳浦の老身三度病み、

【字解】

〔一〕漳浦老身 樂天自ら謂ふ。漳浦は漳河なり。

咸陽宿草八回秋。

咸陽の宿草八回の秋。

君埋泉下泥銷骨。

君は泉下に埋もれて泥骨を銷す、

我寄人間雪滿頭。

我は人間に寄せて雪頭に滿つ。

阿衛韓郎相次去。

阿衛韓郎相次ぎて去る、

夜臺茫昧得知不。

夜臺茫昧知るを得るや不や。

阿衛。微之小男。韓郎。微之愛婿。

【題義】元稹（字は微之）を夢みた詩である。

【詩意】昨夜から君と手を攜へて俱に遊んだ夢を見たので、朝起きても涙が手巾に盈ちて抑へんやうもない。我は三年の間漳河のほとりに老病の身を寄せ、君は咸陽に葬られてから已に八年になる。

君は黄泉の下に埋められて泥が骨を銷し、我は人間界に生存して頭髮雪の如くである。阿衛や韓郎も相次いで世を去つたが、墓穴の中は眞暗だから君は一向御存じあるまい。

感秋詠意

秋に感じて意を詠す

炎涼遷次速如飛。

炎涼遷り次ぎて速なること飛ぶが如し、

【字解】

〔一〕生衣 かたびらの

律詩 夢微之 感秋詠意

又脫生衣著熟衣。
 又生衣を脱して熟衣を着る。
 遠壁暗蛩無限思。
 壁を遶る暗蛩限り無き思。
 戀巢寒燕未能歸。
 巢を戀うて寒燕未だ歸る能はず。
 須知流輩年年失。
 須らく知るべし流輩の年年失するを。
 莫歎衰容日日非。
 歎ずる莫れ衰容の日日非なるを。
 舊語相傳聊自慰。
 舊語相傳へて聊か自ら慰む。
 世間七十老人稀。
 世間七十老人稀なり。

類、夏の著物なり。熟衣は綿入の類。寒衣なり。生熟は練ると練らぬとの別であらう。
 (一) 舊語 昔から傳ふる言葉。杜詩の人生七十古來稀を指す。

【題義】 秋に感じて作つた詩である。

【詩意】 炎涼の相遷ることは飛ぶやうに速い。又夏著を脱いで冬著を着るやうになつた。四方の壁の外には處定めず、蛩が鳴いて無限の愁思を催し、燕は南國に移り去らんとするが古巢を慕つて去りにしてゐる。同輩の友人の年年死んで行くのを見れば、吾が容貌の日増に衰へ行くのは、今更歎くには當らない。ただ人生七十古來稀といふ古人の言葉を引いて聊か自ら慰めてゐる。

老病幽獨偶吟所懷

老病幽獨、偶吟所懷を吟す

眼漸昏昏耳漸聾。
 滿頭霜雪半身風。
 已將心出浮雲外。

眼漸く昏昏として耳漸く聾す、
 滿頭の霜雪半身の風。
 すでに心を將て浮雲の外に出で、

猶寄形於逆旅中。

猶ほ形を逆旅の中に寄す。

觴詠罷來賓閣閉。

觴詠罷み來りて賓閣閉ぢ、

笙歌散後妓房空。

笙歌散じて後妓房空し。

世緣俗念消除盡。

世緣俗念消除し盡く、

別是人間清淨翁。

別に是れ人間清淨の翁。

【題義】 老病の爲に獨居幽棲し、感懷を詠じた詩である。

【詩意】 目は段段見えなくなり耳は聞えなくなつて、白髪は頭に滿ち半身は不隨になつた。已に心は形骸の外に超然としてゐるが、猶ほ身を天地の間に寓してゐる。此頃は來り訪ふ客もないから觴詠することもなく、妓を解放してしまつたから笙歌もしない。世俗の因縁は全く絶えて、一個の清淨翁となり了つた。

維摩經云。是身如浮雲也。

【字解】 (一) 昏昏 暗き貌。

(二) 霜雪 白髪に喩ふ。風は中風といふ病氣。樂天の中風に罹つてゐたことは前に屢々見ゆ。

(三) 浮雲 自在にある如く、身に喩ふ。

(四) 逆旅 宿屋。李白の春夜宴三桃李園序に、夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客とあるを用ふ。

(五) 賓閣 賓客を入るる閣。

(六) 妓房 妓を置く部屋。樂天は病に罹つて妓を解放した。前の別三柳枝を見よ。

(七) 人間 世間。

和楊尙書罷相後夏日遊永安水亭兼招本曹楊侍郎同行

楊尙書が相を罷めて後、夏日永安の水亭に遊び、兼ねて本曹の楊侍郎を招きて同じく行くに和す

道行無喜退無憂。道行はるるも喜ぶ無く退くも憂ふる無し、【字解】 道行 世に用ひられること。 退行 進退といふ

舒卷如雲得自由。舒卷雲の如く自由を得たり。 【三】 舒卷 賢明なる大臣。王維の詩に、謀猷歸哲匠とある。

良冶動時爲哲匠。良冶動く時哲匠と爲り、 【四】 巨川 大川なり。書經の説命に、若濟巨川一用汝作舟楫とある。君主の大臣の力を借るをいふ。

巨川濟了作虛舟。巨川濟り了りて虚舟と作る。 虚舟は虚心無欲なるに喩ふ。易疏に以忠信濟難、若乘虚舟以涉川也とある。 【五】 水檻 水亭の欄干。

竹亭陰合偏宜夏。竹亭陰合うて偏に夏に宜し、

水檻風涼不待秋。水檻風涼しくして秋を待たず。

遙愛翩翩雙紫鳳。遙に愛す翩翩たる雙紫鳳、

入同官署出同遊。入りては官署を同じうし出でては遊を同じうするを。

【六】 翩翩 往來輕疾の貌。雙紫鳳は楊尙書と楊侍郎とに喩ふ。

【題義】 楊尙書（戸部尙書楊嗣復）は開成三年に同平章事となつた。即ち宰相の任である。が會昌元年宰相を罷めてから同曹の楊侍郎を招いて俱に夏日永安里の水亭に遊んだ詩に和したのである。

【詩意】 楊尙書は避んで宰相となつても罷めて退いても喜びもしなければ憂へもせず、出處進退の自由なことは無心の雲のやうである。社會に活動しては賢宰相となり、功成れば退いて虚心無欲になつてゐる。尙書の竹亭は陰深くして夏に宜しく、水に臨める欄干は秋にならなくとも風が涼しい。楊尙書と楊侍郎とが入つては役所を同じうし出でては遊を同じうして、この水亭に遊ぶのを遙に喜んでゐる。

在家出家

家に在りて出家す

衣食支分婚嫁畢。衣食分を支へて婚嫁畢る、

從今家事不相仍。今より家事相仍らず。

夜眠身是投林鳥。夜眠りては身は是れ投林の鳥、

朝飯心同乞食僧。朝に飯しては心は乞食の僧に同じ。

清唳數聲松下鶴。清唳數聲松下の鶴、

寒光一點竹間燈。寒光一點竹間の燈。

中宵入定跏趺坐。中宵定に入りて跏趺して坐す、

女喚妻呼都不應。女喚び妻呼べども都て應へず。

【字解】 一 清唳 清らかに鶴の鳴くこと。 二 入定 禪定に入る。跏趺は佛教の坐法。所謂結跏趺坐是なり。

【題義】 在家の僧となつたことを述べた詩である。

【詩意】 衣食は分相應に暮すに足り、子女の婚嫁も濟んだから、今後は家事の累ひは全くなくなる。夜は林に投じて棲む鳥の如く安かに眠り、朝は托鉢の僧のやうな氣輕な心持で飯を食ふ。聞く所は松下の鶴の清らかな聲、見る所は竹間の燈の寒光のみである。夜は坐禪を組んで入定し、女が喚ばうが妻が呼ばうが返事もしない。

夜涼

夜涼

露白風清庭戸涼

露白く風清くして庭戸涼し、

老人先著夾衣裳

老人先づ著る夾衣裳。

舞腰歌袖拋何處

舞腰歌袖何の處にか拋つ、

唯對無絃琴一張

唯對す無絃琴一張。

見よ。【四】無絃琴。絃の切れてない琴。陶淵明は好んで無絃琴を弾いたといふ。

【題義】 秋夜の景狀を述べた詩である。

【詩意】 露白く風清くあたりが涼しく、老人には寒さを感じるので夾衣裳を纏つた。こんな時は歌舞して樂むのによいが、已に妓を放遣してしまつたから、獨り淋しく一挺の無絃琴に對するのみである。

繼之尙書自余病來寄遺非一。又蒙覽醉吟先生傳。題詩以美之。今以此篇用伸酬謝。

繼之尙書余の病んでより來寄遺すること一に非ず。又醉吟先生傳を覽られ、詩を題して以て之を美す。今此篇を以て用て酬謝を伸ぶ

衰殘與世日相疎

衰殘して世と日に相疎なり、

惠好唯君分有餘

惠好唯君のみ分餘有り。

茶藥贈多因病久

茶藥贈ること多きは病の久しきに因り、

衣裳寄早及寒初

衣裳寄すること早くして寒の初に及ぶ。

所寄贈之物皆及時。

交情鄭重金相似

交情鄭重金相似たり、

詩韻清鏘玉不如

詩韻清鏘玉も如かず。

醉傳狂言人盡笑

醉傳の狂言人盡く笑ふ、

獨知我者是尙書

獨り我を知る者は是れ尙書のみ。

【題義】 楊嗣復は樂天の病後種種の品物を贈つたことが一再でなく、又樂天自作の醉吟先生傳を讀ん

律詩 夜涼 繼之尙書自余病來寄遺非一又蒙覽醉吟先生傳題詩以美之

【字解】 一 繼之尙書 戶部尙書楊嗣復、字は繼之。

二 醉吟先生傳 樂天の自序傳。

三 衰殘 衰廢なり。

四 清鏘 聲韻のよいこと。

五 醉傳 樂天自ら謂ふ。時に樂天は太子少傅であつた。

で詩を題して稱美した。因つて樂天は此詩を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】 僕は老衰して世間と交渉を絶つてゐるが、ただあなただけは分外の好意を表してくれる。病後久しきを歴るので薬や茶を度度贈つてくれ、衣裳も寒さに間に合ふやうに早く届けてくれた。あなたの情義の堅いことは金の如く、詩韻の高いことは玉も及ばない。僕の狂言は世人の笑つて取合はない所であるが、あなただけは能く僕を理解してくれる。

五年秋病後獨宿香山寺三絕句

五年秋、病後獨り香山寺に宿す、三絕句

經年不到龍門寺、

【字解】 一 香山寺 洛陽の龍門山の東に在る寺の名。二 龍門寺 即ち香山寺なり。三 暢師

今夜何人知我情、

門山の東に在る寺の名。二 龍門寺 即ち香山寺なり。三 暢師

還向暢師房裏宿、

香山寺の長老の名。房裏は僧房の中。

新秋月色舊灘聲、

新秋の月色舊灘の聲。

【題義】 開成五年秋、病後に香山寺に宿した詩である。

【詩意】 久しぶりで香山寺に来て宿した我が今夜の情は、到底他人の付度を容れない所である。また暢師の僧房に在つて新秋の月色を望み、舊灘の聲を聴けば言ふに言はれぬ感興が湧く。

〔一〕

〔二〕

飲徒歌伴今何在、

【字解】 一 飲徒 酒飲仲間。歌伴は歌の相手。

雨散雲飛盡不廻、

雨のごとく散じ雲のごとく飛びて盡く廻らず。

從此香山風月夜、

此より香山風月の夜、

祇應長是一身來、

祇應に長く是れ一身來るべし。

【詩意】 以前の酒飲仲間や歌の相手は今何處へ往つたか、雨の如く散じ雲の如く去つて復た還らないのである。されば今後は常に我一人で香山の風月を來り賞する外はない。

〔三〕

〔二〕

石盆泉畔石樓頭、

石盆泉の畔石樓の頭、

十二年來晝夜遊、

十二年來晝夜遊ぶ。

更過今年年七十、

更に今年を過ぎなば年七十、

假如無病亦宜休、

假如病無きも亦宜しく休すべし。

【詩意】 石盆泉の畔や石樓の頭は余の殊に愛好して、十二年來晝も夜も能く來り遊んだ處である。更に今年を過ぐれば余も七十になるから、たとひ病なくとも當然官を退くべきである。

律詩 五年秋病後獨宿香山寺三絕句

五八五

題香山新經堂招僧

香山の新經堂に題し僧を招く

烟滿秋堂月滿庭。

烟は秋堂に滿ち月は庭に滿つ、

香花漠漠磬泠泠。

香花漠漠磬泠泠。

誰能來此尋眞諦。

誰か能く此に來りて眞諦を尋ねん、

白老新開一藏經。

白老新に開く一藏經。

【字解】(一) 漠漠 布列する貌。泠泠は音聲洋溢の貌。陸機の賦に、音泠泠而盈耳とある。(二) 眞諦 佛語。眞實無妄なり。(三) 白老 樂天自ら謂ふ。一藏經は一個の經堂。

【題義】

香山寺に新に建てた經堂に題して僧を招いた詩である。

【詩意】

烟は堂に滿ち月光は庭に滿ち、香花はあちこちに散在して、磬を打つ音が盛である。白老の新に開いた此經堂に來て、佛理の眞諦を研究する者はないであらうか。

偶題鄧公

公即給事中斑之子也。飢窮老病、退居此村。偶、鄧公に題す

偶因攜酒尋村客。

偶、酒を攜へて村客を尋ぬるに因り、

聊復廻車訪薜蘿。

聊か復た車を廻らして薜蘿を訪ふ。

且值雪寒相慰問。

且雪の寒きに値ひて相慰問す、

不妨春暖更經過。

妨げず春暖かにして更に經過するを。

公は即ち給事中斑の子なり、飢窮老病、此村に退居す。

【字解】

(一) 薜蘿 楚辭に、若

有レ人ニ兮山之阿、披薜蘿兮帶女蘿とある。因つて隱者の服を薜蘿といひ、轉じて隱者の意に用ふ。鄧公

を指して言ふ。

翁居山下年空老。

翁は山下に居りて年空しく老い、

我得人間事校多。

我は人間に事校多きを得たり。

一種共翁頭似雪。

一種翁と共に頭雪に似たり、

翁無衣食又如何。

翁は衣食無し又如何。

(二) 人間 世間。

【題義】

たまたま給事中(官名)鄧斑の子鄧公を訪うて作つた詩である。

【詩意】

酒を攜へて村客を訪ふ序に又車を廻らして鄧公を訪うた。丁度雪の降るに値うて相慰問し、春暖の候更に來り訪はんことを期した。公は山下に隱居して空しく老い、我は世間に於て俗務に逐はれてゐる。併し我は頭髮の雪の如く白いことは公と同じであるが、公の衣食にも窮してゐるのは氣の毒なことだ。

早入皇城贈王留守僕射

早に皇城に入り王留守僕射に贈る

津橋殘月曉沈沈。

津橋の殘月曉沈沈、

風露凄清禁署深。

風露凄清禁署深し。

城柳宮槐謾搖落。

城柳宮槐謾に搖落するも、

【字解】

(一) 津橋 天津橋。洛陽の橋の名。沈沈は茫茫といふが如

し。(二) 禁署 皇城なり。(三)

搖落 霜枯れなり。

悲愁不到貴人心。 悲愁は到らず貴人の心。

【題義】 朝早く宮城に入り、東都留守（官名）王僕射（僕射も官名）に贈つた詩である。

【詩意】 天津橋畔に残月が懸つて、曉の色が茫茫としてゐる。風露が寒くて宮城が深邃である。宮庭の柳も、槐も皆霜枯に遇うてゐるが、あなたのやうな貴人の心には悲愁の情は起らぬであらう。

寄題廬山舊草堂兼呈二林寺道侶

廬山の舊草堂に寄題し、兼ねて二林寺の道侶に呈す

三十年前草堂主。 三十年前の草堂の主、

而今雖在鬢如絲。 而今在りと雖も鬢絲の如し。

登山尋水應無力。 山に登り水を尋ぬるに應に力無かるべし、

不似江州司馬時。 江州司馬の時に似ず。

漸伏酒魔休放醉。 漸く酒魔を伏して醉を放にするを休む、

猶殘口業未拋詩。 猶ほ口業を残して未だ詩を抛たず。

君行過到鑪峰下。 君行きて鑪峰の下に過ぎ到らば、

【字解】 〔一〕寄題 遠方から寄せて題するなり。

〔二〕二林寺 廬山に東林寺と西林寺とある。道侶は修道の仲間。

〔三〕而今 今。

〔四〕口業 佛語。兩舌惡口妄言綺語をいふ。抛詩は詩を廢すといふが如し。

〔五〕君 自注にある錢知進を指す。

鑪峰は廬山の香鑪峰。

爲報東林長老知。

此詩憑錢知進侍御。 往題草堂中也。

爲に東林の長老に報じて知らしめよ。

【題義】 廬山の舊草堂に寄題し、併せて東林・西林二寺の僧侶に呈した詩で、自注にあるやうに錢知進侍御に託して題せしめたものである。

【詩意】 三十年前に廬山草堂の主人であつた僕は、今も存命ではあるが鬢は白絲のやうになつた。されば山に登り水を尋ぬる氣力もなく、江州司馬たりし時のやうではない。近來は酒魔を降伏して醉を放にすることは休めたが、まだ口業が残つてゐて詩を廢棄しない。君若し香鑪峰下に到らば、吾が爲に東林寺の長老に此事を知らせてくれ。

改業

業を改む

先生老去飲無興。

先生老い去りて飲めども興無く、

居士病來閒有餘。

居士病み來りて閒餘有り。

猶覺醉吟多放逸。

猶ほ覺ゆ醉吟多く放逸なるを、

不如禪定更清虛。

如かず禪定の更に清虛なるに。

【字解】 〔一〕先生 醉吟先生。

樂天自ら謂ふ。

〔二〕居士 在家の僧。前に在家出家と題する詩あり。

〔三〕柘枝紫袖 柘枝は舞の名。柘枝舞をなす妓をいふ。

〔四〕羯鼓蒼頭 羯鼓は樂器の名。蒼頭は僕隸。

予先有醉吟先生傳。今故云。

律詩 寄題廬山舊草堂兼呈二林寺道侶 改業

柘枝紫袖教丸藥。

柘枝の紫袖藥を丸めしめ、

羯鼓蒼頭遣種蔬。

羯鼓の蒼頭蔬を種るしむ。

却被山僧戲相問。

却つて山僧に戯れに相問はる、

一時改業意何如。

一時業を改む意何如と。

【題義】

日日の業を改めて禪僧のやうな生活をしてゐることを敍した詩である。

【詩意】

醉吟先生も近來は老い込んで飲んでも興が湧かないので、在家の僧に轉業してから大分閑暇が多くなつた。醉吟は放逸に過ぎ、禪定の清虚には劣るやうだ。因つて妓には柘枝を舞ふことをやめて丸藥を作らせ、奴僕には羯鼓を打つのをやめて野菜を作らせることにした。こんな生活ぶりをしてゐるので、「業を改めた御感想は如何で御坐る」などと、却つて山僧に冷かされる。

山下留別佛光和尙

山下にて佛光和尙に留別す

勞師送我下山行。

師を勞し我を送りて山を下りて行かしむ、【字解】

此別何人識此情。

此別何人か此情を識らん。

我已七旬師九十。

我は已に七旬師は九十、

尙知後會在他生。

尙ほ知る後會の他生に在らんことを。

【題義】

山の下で佛光和尙に別れる時贈つた詩である。

【詩意】

老師には御苦勞にも我を送つて山を下られた。別るるに臨んで予は他人の測り知ることの出來ないほど深い感情に驅られた。我は七十師は九十の老人だから、生前再び相會ふことは出來まいと思ふから。

山中五絶句

遊高陽。見五物各有感。感興不同。隨興而吟。因成五絶。

山中の五絶句

高陽に遊び、五物を見て各感ずる所有り、感興同じからず、興に隨つて吟す、因つて五絶を成す。

嶺上雲

嶺上の雲

嶺上白雲朝未散。

嶺上の白雲朝に未だ散せず、

田中青麥早將枯。

田中の青麥早して將に枯れんとす。

自生自滅成何事。

自ら生じ自ら滅し何事をか成す、

能逐東風作雨無。

能く東風を逐うて雨と作るや無や。

【題義】

嵩山に遊び物を觀て感起し五絶句を作つたので、第一首は嶺上の雲を見て作つたのである。

律詩 山下留別佛光和尙 山中五絶句・嶺上雲

【詩意】朝見れば山巔の白雲は未だ散せず居るが、今や畠の青麥は早の爲に將に枯れんとしてゐる。あの雲は自ら生滅して何になるであらう。東風を逐うて雨となつてくれればよいのに。

石上苔

石上の苔

漠漠斑斑石上苔。

漠漠斑斑たる石上の苔、

幽芳靜綠絶纖埃。

幽芳靜綠にして纖埃を絶つ。

路傍凡草榮遭遇。

路傍の凡草は遭遇榮え、

曾得七香車輾來。

曾て七香車の輾るを得來る。

【題義】石上の苔を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】點點と斑を成して石上に苔が生えてゐて、幽芳靜綠で少しの塵をも留めない。之に反して路傍の凡草は光榮に遇うて、七香車などに輾られてゐる。高士は貧にして俗人は榮えると同じである。

林下樗

林下の樗

香檀文桂苦雕鏹。

香檀文桂は雕鏹に苦む、

生理何曾得自全。

生理何を曾て自ら全きを得ん。

知我無材老樗否。

我は無材の老樗なるを知るや否や、

一枝不損盡天年。

一枝損せず天年を盡す。

【題義】林下の樗（莊子逍遙游篇に、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不レ中三繩墨、其小枝卷曲而不レ中三規矩、立三之塗、匠者不レ顧とある）を觀て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】紫檀や桂は美質を持つてゐるから彫刻などされて自然の生命を害される。この俺は何の取柄もない老樗のやうなものだから、一枝も傷けられずに天壽を全うすることが出来る。

澗中魚

澗中の魚

海水桑田欲變時。

海水桑田變せんと欲する時、

風濤翻覆沸天池。

風濤翻覆天池に沸く。

鯨呑蛟鬪波成血。

鯨呑み蛟鬪ひて波は血と成る、

深澗遊魚樂不知。

深澗の遊魚樂んで知らず。

【三】天池。大海なり。莊子逍遙游篇に、南冥天池也とある。

【題義】澗中の魚を觀て所感を述べた詩で、唐宋詩醇に暗指甘露之事とある。

律詩 山中五絶句・石上苔・林下樗・澗中魚

【字解】【一】海水桑田欲變時

海が變じて桑田となること、時勢の變遷をいふ。神仙傳に、麻姑謂王方平曰、自接待以來、見東海三變爲桑田、向到蓬萊、水乃淺於往昔者略半也、豈復爲陵乎とある。

【二】天年。天から與へられた壽命。

【字解】【二】香檀。香木の名。文桂は美木の名。雕鏹は彫刻なり。

【三】生理。自然の生命。

【詩意】 大海が變じて桑島となるといふやうな時には、風濤が沸き起つて天池も爲に覆へるやうである。その時には鯨や蛟は相呑み相鬪つて血を流すけれども、深い淵に潜んでゐる魚は何の苦もなく呑氣に楽しんでゐる。人も亦然り。顯榮の地位に居るものは世の變轉に遇うて四苦八苦するが、下寮に沈淪してゐるものは至つて吞氣である。

洞中蝙蝠

洞中の蝙蝠

千年鼠化白蝙蝠。

千年の鼠は化す白蝙蝠、

黑洞深藏避網羅。

黑洞に深く藏れて網羅を避く。

遠害全身誠得計。

害に遠かり身を全うして誠に計を得たるも、

一生幽闇又如何。

一生幽闇又如何。

【字解】 〔一〕 網羅 あみ。

【題義】 洞窟中の蝙蝠を觀て所感を述べた詩である。
【詩意】 千年を経た鼠は化して白い蝙蝠となり、洞窟の奥深く藏れて網に罹らないやうにしてゐる。なるほど害に遠かり身を全うするは結構のやうだけれども、一生暗闇の中で過すのはあまり結構でもない。

自戲三絕句

閒風獨吟。無三人酬和。聊假三章。

自ら戲る三絶句

閒風獨吟するも人の酬和するなし、聊か身心を假りて相戯れ、往復偶々三章を成す。

不戲身心問身

身心に問ふ

心問身云何泰然。

身心に問ひて云ふ何ぞ泰然たる、

嚴冬暖被日高眠。

嚴冬暖被日高けて眠る。

放君快活知恩否。

君に放して快活せしむること恩を知るや否や、

不早朝來十一年。

早に朝せざるより來十一年。

【字解】 〔一〕 暖被 暖な夜具。

〔二〕 君 身を指して言ふ。

【題義】 自ら戲れ三絶句を作る。其一は心が身に問ふ詩である。

【詩意】 心が身に問うた。「君は冬暖かに夜具にくるまつて、日の高く升るまで安々と眠つてゐる。君にこんな快適を得しめた吾が恩を知つてゐるかどうか。閒職に在つて朝早く參朝する必要がなくなつてから最早十一年になる」と。

身報心

身心に報ず

心是身王身是宮。

心は是れ身の王身は是れ宮、

【字解】 〔一〕 君 心を指して言

君今居在我宮中。君今居して我が宮中に在り。
是君家舍君須愛。是れ君が家舍をば君須らく愛すべし、
何事論恩自說功。何事ぞ恩を論じて自ら功を説く。

【題義】 身が心に答へた詩である。

【詩意】 心は一身の王で身は宮殿のやうなものだ。現に君は今吾が宮中に居るのだ。されば我は君の住む家だから須らく愛すべきである。何も恩に著せて己の功を説き立てるには及ぶまい。

心重答身

心重ねて身に答ふ

因我疎慵休罷早。我が疎慵なるに因つて休し罷むること早し、
遣君安樂歲時多。君を安樂ならしむること歳時多し。
世間老苦人何限。世間老いて苦む人何ぞ限らん、
不放君閒柰我何。君に放して閒ならしめざるも我を柰何せん。

【題義】 心が重ねて身に答へた詩である。

【詩意】 我が疎懶の性から早く隠退し、君をして久しく安樂ならしめた。世間には老いて苦む人が數

限りもなく多いのだ。君をして閒ならしめなかつた所が、俺に故障は言へまいではないか。されば俺の恩を謝すべきである。

會昌元年春五絶句

會昌元年春五絶句

病後喜過劉家。病後劉家を過ぎるを喜ぶ
忽憶前年初病後。忽ち憶ふ前年初めて病みし後、
此身甘分不銜杯。此身分に甘んじて杯を銜まず。
誰能料得今春事。誰か能く料り得ん今春の事、
又向劉家飲酒來。又劉家に向ひて酒を飲み來らんとは。

【題義】 會昌元年春に作つた五首の絶句で、第一首は病後に劉禹錫の家に過ぎりしことを喜んだ詩である。

【詩意】 憶へば前年初めて病を發してからは、己の分に甘んじて一切酒を飲まなかつた。所が今年の春は劉禹錫の家を訪うて、喜びのあまりつい酒を飲んでしまつた。

贈舉之僕射

今春與僕射。三
爲寒食之會。

舉之僕射に贈る

今春僕射と三たび
寒食の會を爲す。

律詩 自戲三絶句・心重答身

會昌元年春五絶句・病後喜過劉家・贈舉之僕射

雞毬餉粥屢開筵。雞毬餉粥屢開筵。

談笑謳吟閒管絃。談笑謳吟閒管絃。

一月三回寒食會。一月三回寒食會。

春光應不負今年。春光應不負今年。

【題義】王起に贈つた詩である。

【詩意】雞毬や餉粥を具へて屢筵を開き、談笑したり謳吟したり管絃を弄したりした。一個月の中に三回も寒食の會を催すなどは、聖天子即位の春に負かないと申すものだ。

盧尹賀夢得會中作 盧尹が夢得を賀する會中の作

病聞川守賀筵開。病みて聞く川守賀筵の開くを、

起伴尙書飲一杯。起きて尙書に伴ひて一杯を飲む。

任意少年長笑我。任意少年の長く我を笑ふを、

老人自覓老人來。老人は自ら老人を覓め來る。

【題義】河南尹盧眞の劉禹錫（字は夢得、會昌元年に檢校禮部尙書、太子賓客分司に任せられた）

の任官を賀する會上で作つた詩である。

【詩意】病中、河南尹盧氏が夢得の任官を賀する筵を開くと聞き、病を強めて起き夢得に伴つて祝杯を飲んだ。少年輩は長く我を笑ふであらうが、そんなことは敢て意に介するに足らない。老人は老人を覓めるのは當然だから。

題朗之槐亭 朗之の槐亭に題す

春風可惜無多日。春風惜む可し多日無きを、

家醞唯殘軟半瓶。家醞唯殘る軟半瓶。

猶望君歸同一醉。猶望む君歸りて同じく一醉せんことを、

籃舁早晚入槐亭。籃舁早晚槐亭に入らん。

【題義】皇甫朗之の槐亭に題した詩である。

【詩意】春も最早残り少くなり、家釀の酒も瓶に半分たらず残つてゐるばかりだ。僕は君と俱に一醉せんことを望んでゐる。いつ頃君は駕籠に乗つて槐亭に歸つて來るであらうか。

律詩 會昌元年春五絶句 盧尹賀夢得會中作 題朗之槐亭

【字解】一 家醞 自家釀造の

酒。軟半は半分たらず。小半なり。

二 籃舁 竹片を編んで作つた駕籠。早晚はいつか。

勸夢得酒

夢得に酒を勸む

誰人功畫麒麟閣

誰人か功ありて畫かるる麒麟閣、

何客新投魑魅鄉

何の客か新に投せらるる魑魅の郷

兩處榮枯君莫問

兩處の榮枯君問ふこと莫れ、

殘春更醉兩三場

殘春更に醉ふこと兩三場せん。

【字解】 麒麟閣 漢の宣帝

功臣十一人の像を麒麟閣に畫く。

【二】 魑魅郷 僻遠の地をいふ。

【三】 兩處 麒麟閣と魑魅郷と。

【四】 兩三場 二三回といふが如し。

【題義】 劉禹錫に酒を勸めた詩である。

【詩意】 功があつて其像を麒麟閣に畫かれる人もあれば、罪を蒙つて僻遠の地に流される人もある。かかる榮枯盛衰は敢て問ふを要しない。それよりも春を惜む宴を二三回も開かうではないか。

過裴令公宅二絶句

裴令公在日。常同聽楊柳枝歌。每遇雪天。無非招宴。二物如故。因成二感情。

裴令公の宅に過ぎる二絶句

裴令公在りし日、常に同じく楊柳枝の歌を聞き、雪天に遇ふ毎に、招宴に非ざるなし。二物故の如し、因つて感情を成す。

風吹楊柳出牆枝

風は吹く楊柳の牆を出づる枝、

憶得同歡共醉時

憶ひ得たり同じく歡して共に醉ひし時。

每到集賢坊北過

集賢坊北に到りて過ぐる毎に、

【字解】 裴令公 中書令裴度。

【二】 集賢坊 洛陽の里の名。裴度の宅の在る處。

不曾一度不低眉

曾て一度として眉を低れずんばあらず。

【題義】 裴度の死後其宅を訪うて作つた詩である。

【詩意】 風が牆から出てゐる柳の枝を吹くのを見て、共に歡酔した昔の事を憶ひ出した。洛陽の集賢坊北を通るたびに、一度として眉を低れて愁へないことはない。

梁王舊館雪濛濛

梁王の舊館雪濛濛、

愁殺鄒枚二老翁

愁殺す鄒枚二老翁。

假使明朝深一尺

假使明朝深さ一尺なるも、

亦無人到兔園中

亦人の兔園の中に到ること無からん。

梁王不悅、游於兔園、乃置旨酒、命賓友、召鄒生、延枚叟、とある。

【詩意】 裴令公の舊宅のあたりに雪が濛濛と降つて、嘗て恩顧を蒙つた我と夢得とを愁へしめる。若し公が生きて居られるならば、必ず我等を招いて雪見の宴を開くであらうが、今は此世の人でないから、明朝一尺も積つた所が、兔園の會を開くこともない。誠に残念なことである。

(一)

(二)

【字解】 梁王 漢の梁の孝王。當時の文士の保護者であつた。

借りて裴令公に比す。濛濛は雪の盛に降る貌。鄒枚 鄒陽と枚乘。梁王の保護を受けた文士。借りて樂天と劉夢得とに比す。兔園 梁王の苑の名。謝惠連の雪賦に

百日假滿少傅官停自喜言懷

百日假滿ち、少傅官停まる。自ら喜んで懷を言ふ

長告今朝滿十旬。

長告今朝十旬に滿つ、

從茲蕭灑便終身。

茲より蕭灑として便ち身を終へん。

老嫌手重拋牙笏。

老いて手の重きを嫌ひて牙笏を抛ち、

病喜頭輕換角巾。

病みて頭の輕きを喜びて角巾に換ふ。

疏傳不朝懸組綬。

疏傳は朝せずして組綬を懸け、

向平無累畢婚姻。

向平累無くして婚姻を畢る。

人言世事何時了。

人は言ふ世事何時か了らんと、

我是人間事了人。

我は是れ人間事の了れる人。

【題義】百日の休暇を賜はり、其期限が満ちても病氣がなほらなかつたので、太子少傅の官を罷める

【詩意】百日の休暇の期限が満ちて官を退くことになつた。今後はさつぱりと氣輕になつて身を終ることが出来る。老いては重いのを嫌つて象牙の笏を棄て、病の爲に頭の輕いのを喜んで角巾に換へた。

もう明日からは疏受と同じく印綬を懸けて隠退したのでから、參朝する必要もなく、向子平と同じく子女の婚嫁も畢つたから何の累ひもない。人は世間の俗事はいつまでも果つる時がないと言ふが、俺は立派に世事を濟し了つた。

早熱

早熱

畏景又加旱。火雲殊未收。

畏景又旱を加へ、火雲殊に未だ收まらず。

籬暄饑有雀。池涸渴無鷗。

籬暄かにして饑ゑ雀有り、池涸れて渴して鷗無し。

岸幘頭仍痛。裳汗亦流。

幘を岸くも頭仍は痛み、裳を褰ぐるも汗亦流る。

若爲當此日。遷客向炎州。

若爲ぞ此日に當り、遷客炎州に向ふ。

時楊李二相各貶潮韶。

【字解】

【一】畏景 夏の日をいふ。左傳に趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也とあり、注に冬日可畏、夏日可畏とある。【二】火雲 夏の雲をいふ。岑參の詩に三峯火雲蒸とある。【三】岸幘 かぶり物を脱ぎて額を露すこと。【四】遷客 貶流せらるる人。會昌元年三月、宰相楊嗣復は潮州刺史に、宰相李珣は韶州刺史に貶せられた。炎州は炎熱烈しき州。

【題義】

炎熱の時に先だつて到りしことを述べた詩である。

【詩意】

炎熱烈しき夏の日に早熱さへ加はり、焼けるやうな雲がいつまでも收まらない。籬のあたり

が熱くて雀が飢る、池の水が涸れて鷗がゐなくなつた。帽子を脱いでも頭が痛み、裳を褰げても汗が流れる。かかる極暑の折も折、楊・李二相の炎熱の地に貶謫されるのは氣の毒なことだ。

題崔少尹上林坊新居 崔少尹が上林坊の新居に題す

坊静居新深且幽。坊静に居新にして深く且幽なり、

忽疑縮地到滄洲。忽ち疑ふ縮地して滄洲に到るか。

宅東籬缺嵩峯出。宅東籬缺けて嵩峯出で、

堂後池開洛水流。堂後池開けて洛水流る。

高下三層盤野徑。高下三層野徑を盤り、

沿洄十里汎漁舟。沿洄十里漁舟を汎ぶ。

若能爲客烹雞黍。若し能く客の爲に雞黍を烹ば、

願伴田蘇日日遊。願はくは田蘇に伴ひて日日遊ばん。

【題義】河南少尹崔氏の上林坊(洛陽の坊の名)の新宅に題した詩である。

【詩意】上林坊は閑靜な處で、崔少尹の新宅は最も幽深な位置を占めてゐる。一たび其新宅を訪へば

縮地の術に由つて仙境に來たかと疑ふほどである。客の東の籬の缺けた所からは嵩峯が見え、堂の後には池があつて洛水が流れ込んでゐる。高低三層の地を上下して野徑を盤り、十里の流に沿つて漁舟を汎べて遊ぶことが出来る。崔少尹が若し能く客の爲に雞を烹たり、黍の飯をたいたりして御馳走してくれるならば、毎日少尹に伴つて遊びたいものだ。

新澗亭 新澗の亭

煙蘿初合澗新開。煙蘿初めて合ひて澗新に開く、

閒上西亭日幾回。閒に西亭に上ること日に幾回ぞ。

老病歸山應未得。老病山に歸ること應に未だ得ざるべし、

且移泉石就身來。且く泉石を移し身に就いて來る。

【題義】新澗の西に新亭を營んだことを述べた詩である。

【詩意】新に開いた澗には煙蘿が繁つて大分風情を増した。因つて幾回となく西亭に上つて遊賞する。老病の身ではあるがまだ隱遁することは出来ないから、且く泉石を移し我が身に就けて楽しんでゐるのだ。

【字解】 〔一〕煙蘿 煙霧のかかつた蔓草。

對酒有懷寄李十九郎中 酒に對して懷あり、李十九郎中に寄す

往年江外拋桃葉 往年は江外に桃葉を拋ち、

【字解】 〔一〕桃葉 妓の名。
〔二〕柳枝 樊素・小蠻の二妓。前の別柳枝を見よ。

去歲樓中別柳枝 去歲は樓中に柳枝に別る。

也。樊蠻也。

寂寞春來一杯酒 寂寞たり春來一杯の酒、

此情唯有李君知 此情唯李君の知る有り。

吟君舊句情難忘 君が舊句を吟じて情忘れ難し、

風月何時是盡時 風月何時か是れ盡くる時ぞ。

李君嘗有悼故妓詩云。直應人世上無風月。恰是心中忘却時。今故云。

【題義】 酒に對して感ずる所あり。李郎中（十九は輩行）に寄せた詩である。

【詩意】 先年は江南で桃葉といふ妓を解放し、去年は洛陽で樊素・小蠻の二妓を解放した。されば春になつて酒を飲んでも一向興が湧かない。此情を知る者は唯李君のみである。因つて君の舊詩を吟じ妓を思うて忘れることが出来ない。いつになつたら忘れられるであらう。

楊六尚書頻寄新詩。詩中多有思間相就之志。因書鄙意。而諭之。

楊六尚書頻に新詩を寄す。詩中多く間を思ひ相就かんとするの志あり。因つて鄙意を書し、報じて之を諭す。

君年殊未及懸車 君が年は殊に未だ懸車に及ばず、

未合將閒逐老夫 未だ合に閒を將て老夫を逐ふべからず。

身健正宜金印綬 身健にして正に金印綬に宜しく、

位高方稱白髭鬚 位高くして方に白髭鬚に稱ふ。

若論塵事何由了 若し塵事を論せば何に由りて了らん、

但問雲心自在無 但問ふ雲心自在なりや無や。

進退是非俱是夢 進退是非俱に是れ夢、

丘中闕下亦何殊 丘中と闕下と亦何ぞ殊ならん。

【題義】 楊汝士が屢々新作の詩を寄せた。その詩に官を退いて閒地に就きたいと述べてある。因つて鄙意を述べて諭したといふのである。

律詩 對酒有懷寄李十九郎中 楊六尚書頻寄新詩中多有思間相就之志

【字解】 〔一〕楊六尚書 楊汝士を指して言ふ。前に屢々見ゆ。〔二〕懸車 車を懸けて用ひざるを示すこと。致仕すること。年七十にして致仕する定めである。〔三〕老夫 樂天自ら謂ふ。〔四〕塵事 世間の俗事。〔五〕雲心 閑雲の如き心。〔六〕丘中 山中なり。

【詩意】君はまだ七十にはならないから、僕のやうに官を退いて閑地に就くことは出来ない。また體も達者で金印綬を佩ぶるに宜しく、位も高くて白髭に相應してゐる。若し世事を彼此言ふならば、何時になつても了ることはないのだから、要は心の閑雲の如く自在なりや否やが問題なのである。進退是非俱に一場の夢に過ぎないと悟りさへすれば、山中にゐても宮中にゐても格別の相違はないのだ。何も官を退くには及ぶまい。

偶吟自慰兼呈夢得

予與夢得一甲子 同。今俱七十。

偶吟して自ら慰め、兼ねて夢得に呈す 予夢得と甲子同じ、今俱に七十。

且喜同年滿七旬。

且喜ぶ同年七旬に滿つるを、

【字解】(一) 七旬。七十歳。

莫嫌衰病莫嫌貧。

衰病を嫌ふ莫れ貧を嫌ふ莫れ。

已爲海內有名客。

已に海內有名の客と爲り、

又占世間長命人。

又世間長命の人を占む。

耳裏聲聞新將相。

耳裏聲聞ゆ新將相、

眼前失盡故交親。

眼前失ひ盡す故交親。

尊榮富壽難兼得。

尊榮富壽は兼ね得難し、

閒坐思量最要身。

閒坐思量最要の身。

【四】思量 考へて見る。

【題義】偶吟して自ら慰め、兼ねて劉禹錫(字は夢得)に呈した詩である。

【詩意】君も僕も俱に七十の坂を越したのは喜ぶべきことで、衰病や貧困などは嫌ふ所ではない。已に天下の名士ともなり、又世間の長壽者ともなつたのだから。耳には壯者の新に將相に任せられた由を聞き、目には舊友の死亡し盡さるの見る。尊榮と長壽とは兼ねることの出来ないものだといふことは、お互に閒坐して考へて見る必要がある。

寄潮州楊繼之

潮州の楊繼之に寄す

相府潮陽俱夢中。

相府潮陽俱に夢中、

夢中何者是窮通。

夢中何者か是れ窮通あらん。

他時事過方應悟。

他時事過ぎて方に應に悟るべし、

不獨榮空辱亦空。

獨り榮の空しきのみならず辱も亦空しきを。

【字解】(一) 相府。宰相なり。潮陽は潮州刺史。(二) 窮通。榮辱といふが如し。(三) 他時。後日。

【題義】もと宰相であつた楊嗣復(字は繼之)が潮州刺史に貶せられたのに寄せた詩である。

律詩 偶吟自慰兼呈夢得 寄潮州楊繼之

【詩意】 宰相となるも潮州刺史に貶せらるるも、すべて浮世一場の夢である。夢だとすれば敢て榮辱を論ずる價值はない。事が過ぎ去つてから後、ただ榮の空しさのみならず、辱も亦空しいことがわかるであらう。

雪暮偶與夢得同致仕裴賓客王尙書飲

雪暮偶夢得、同じく致仕せる裴賓客、王尙書と飲む

黄昏慘慘雪霏霏、
黃昏慘慘雪霏霏、

白首相歡醉不歸、
白首相歡して酔へども歸らず。

四箇老人三百歲、
四箇の老人三百歲、

人間此會亦應稀、
人間此會亦應に稀なるべし。

人間此會亦應稀、
人間此會亦應に稀なるべし。

【題義】 雪の日の暮に劉禹錫（字は夢得）及び同時に官を退いた太子賓客裴洽（後集卷十四の春夜宴席上戲贈裴淄州及び三月三日祓禊洛濱）を見よ。吏部尙書王起と飲んだ時の詩である。

【詩意】 夕暮の空が愁を含んで雪のさらさらと降る時、白髮の老人が歡宴して酔つても退散しない。四人の年齢を合せると三百歳になる。こんな會は世間にも稀であらう。

雪朝乘興欲詣李司徒留守先以五韻戲之

雪の朝興に乗じて李司徒留守に詣らんと欲し、先づ五韻を以て之に戯る

夜寒生酒思、
夜寒酒思を生じ、

熱飲一兩盞、
熱飲一兩盞、

鋪花連地凍、
花を鋪きて地に凍り、

好拂烏巾出、
烏巾を拂つて出づるに

梁園應有興、
梁園應に興有るべし、

【字解】 〔一〕 烏巾、黒頭巾。〔二〕 鶴鬣、鳥羽を析いて作つた合羽。晉書に王恭清操過人、美姿儀、被鶴鬣裘、涉雪而行、孟昶

【題義】 雪の降つた朝、興に乗じて司徒東都留守李氏の宅に詣らんとして、先づ此五韻十句の詩を寄せて戯れたのである。

【詩意】 夜の寒さは飲酒を催し、曉の雪は詩情を引起す。因つて熱燗の酒を二杯傾け、三五聲微吟した。一面に凍つて花を敷きたるが如く、天が晴れて玉の消失するのを畏れる。頭巾の塵を拂ひ鶴鬣を著て出掛けるに宜しい。あなたも定めて此雪に興を發したであらうが、なせ僕をお召しにならな

いのであらう。

贈思黯

前以履道新小灘詩寄思黯。報章云。請向歸仁砌下看。思黯歸仁宅亦有小灘。

思黯に贈る

前に履道の新小灘の詩を以て思黯に寄す。報章に云く、請ふ歸仁砌下に向つて看よと。思黯歸仁の宅に亦小灘有り。

爲憐清淺愛潺湲

清淺を憐み潺湲を愛するが爲に、

【字解】 〔一〕潺湲 水の流るる聲。〔二〕歸仁 洛陽の里の名。牛僧孺の第在り。〔三〕主人 牛僧孺を指す。

一日三回到水邊

一日三回水邊に到る。

若道歸仁灘更好

若し歸仁灘更に好しと道はば、

主人何故別三年

主人何の故に別ること三年なるや。

【題義】 牛僧孺（字は思黯）に贈つた詩である。僧孺は東都留守として洛陽にゐたが、開成三年九月に徵されて左僕射となり洛陽を去つた。

【詩意】 吾が履道（洛陽の里の名）の邸中に在る小灘の、清淺にして潺湲として流れてゐるのを愛し、余は一日に三回も水邊に遊ぶのである。若し君の歸仁里の灘の方がもつと好いといふならば、なせ君は三年も別れてゐるのだ。

聽歌六絕句

歌を聽く、六絶句

聽都子歌

詞云。試問常娥更要無。

都子の歌を聽く

詞に云く、試みに問ふ常娥

都子新歌有性靈

都子の新歌性靈有り、

【字解】 〔一〕都子 妓の名であらう。〔二〕性靈 精神のこと。〔三〕格 格調。〔四〕

一聲格轉已堪聽

一聲格轉じて已に聽くに堪へたり。

更聽唱到常娥字

更に唱へて常娥の字に到るを聽けば、

猶有樊家舊典刑

猶ほ樊家の舊典刑有り。

常娥 嫦娥に同じ。古の仙人。搜神記に、羿請不死之藥於西王母、嫦娥竊之奔月とある。〔五〕樊家

樂天の歌妓樊素。樂天は開成四年に諸妓を解放した。舊典刑は、もとのかた。

【題義】 歌を聽いて作つた六首の絶句で、第一首は都子の歌を聽いた時の作である。

【詩意】 都子の歌には大に精神が籠つてゐて、一聲格調を轉すれば已に傾聽するに足るものがある。

更に常娥云云といふ處に唱へ到るのを聽くに、樊素の型が残つてゐる。

樂世六名

樂世一名六名

管急絃繁拍漸稠

管急に絃繁くして拍漸く稠し、

綠腰宛轉曲終頭

綠腰宛轉たり曲の終る頭。

誠知樂世聲聲樂

誠に知る樂世聲聲の樂、

律詩 贈思黯 聽歌六絶句 聽都子歌 樂世

【字解】 〔一〕拍 度曲なり。歌ふ者拍を按じて以て唱ふ。〔二〕綠腰 六么に同じ。宛轉は委曲隨和の貌。

老病人聽未免愁。老病の人聽けば未だ愁を免れざるを。

【題義】樂世、即ち六么の曲を歌ふのを聽いて作つた詩である。

【詩意】笛が急に絃の手がこんで拍も稠く、六么の曲の終りぎは宛轉として誠に宜しい。併し此曲の聲聲の樂みも老病の人が聽けば、矢張愁を免れない。

水調 第五偏乃五言 調韻最切。水調 第五偏乃五言調、調韻最も切なり。

五言一遍最殷勤。五言一遍最も殷勤なり、

調少情多似有因。調少く情多くして因有るに似たり。

不會當時翻曲意。會せず當時翻曲の意、

此聲腸斷爲何人。此聲腸は斷つ何人の爲ぞ。

【字解】(一)一遍 一疊といふに同じ。殷勤は情の深いこと。(二)翻曲 前集卷十二の二四六頁を見よ。

【題義】水調の曲を聽いて作つた詩である。此曲は凡て十一疊より成り、前五疊を歌となし、後六疊を入破となし、其歌の第五疊は五言で聲調最も怨切である。五言一遍最も殷勤とは是を謂つたのである。

【詩意】水調の曲の五言詩の部分は最も情味が深い。調が少くて情が多いのは大に因る所があるのであらう。隋の煬帝が汴河を開いて自ら水調を作つたと傳へられてゐるが、當時此曲を作つた眞意がわ

からない。此調が人の腸を斷たしめるのは他にあらう、煬帝其人の爲である。

想夫憐 王維右丞詞云。秦川一 想夫憐 王維右丞の詞に云く、秦川一 半夕陽開。此句尤佳。

玉管朱絃莫急催。玉管朱絃急に催す莫れ、

容聽歌送十分杯。歌を聽いて送る容し十分の杯。

長愛夫憐第二句。長く愛す夫憐第二の句、

請君重唱夕陽開。請ふ君重ねて唱へよ夕陽の開くを。

【題義】想夫憐の曲を聽いて作つた詩である。この曲の中で尙書右丞(官名)王維の詞の秦川一 半夕陽開くといふのが尤も佳い。

【詩意】笛や絃であまりにせき立てるな。先づ歌を聽いてから、なみなみとついだ杯を君に送るであらう。想夫憐の第二の句は、いつ聽いても實によい。願はくは君もう一度秦川一 半夕陽開くの處を歌つてくれ。

何滿子 開元中。滄州有歌者何滿子。臨刑進此曲以贖死。上竟不免。

何滿子 開元中、滄州に歌者何滿子なるもの有り、刑に臨み此の曲を進めて以て死を贖ふ、上竟に免さず。

律詩 聽歌六絶句・水調・想夫憐・何滿子

世傳滿子是人名。世に傳ふ滿子は是れ人名。

臨就刑時一曲始成。刑に就く時に臨みて曲始めて成ると。

一曲四調歌八疊。一曲四調歌八疊、

從頭便是斷腸聲。頭より便ち是れ斷腸の聲。

【題義】何滿子の曲を聽いて作つた詩である。

【詩意】何滿子といふのはもと人の名で、刑に就く時に此曲が始めて成つたと世に傳へられてゐる。一曲が四詞から成り、それを八回疊ねて歌ふのであるが、首から終まで人の腸を斷たしめる。

離別難

離別難

綠楊陌上送行人。

綠楊陌上行人を送る、

馬去車廻一望塵。

馬去り車廻りて一に塵を望む。

不覺別時紅淚盡。

覺えず別るる時紅淚盡き、

歸來無淚可霑巾。

歸來涙の巾を霑すべき無し。

【題義】離別難の曲を聽いて作つた詩である。

【詩意】青柳の絲の垂るる隙に行人を送り、馬車の去るのを見送つて熱心に車塵を望み、覺えず別るる時に涙が盡きて、歸つてからは巾を霑すべき涙も出ない。

閒樂

閒樂

坐安臥穩輿平肩。

坐すること安く臥すこと穩かにして輿は肩に平かなり、

倚杖披衫遠四邊。

杖に倚り衫を披て四邊を遠る。

空腹三盃卯後酒。

空腹三盃卯後の酒、

曲肱一覺醉中眠。

曲肱一覺醉中の眠。

更無忙苦吟閒樂。

更に忙苦無くして閒樂を吟ず、

恐是人間自在天。

恐らくは是れ人間の自在天。

【題義】閒中の樂を詠じた詩である。

【詩意】坐臥共に安穩で、駕籠に乗れば駕籠も動搖せず、杖に倚り衫を着て四邊を遊びまはる。空腹に朝酒を三杯も飲んで、肱を枕に醉眠し、やがて其夢が覺め、起きても此といふ仕事もなく、唯閒吟するのみである。是こそ人世の自由境とでも謂ふのであらう。

【字解】(一) 卯後酒 朝飲む酒。

卯は今の午前六時。(二) 曲肱 肱

を曲げて枕とする。(三) 人間 世

間。自在天は自由境といふが如し。

律詩 凡一百八首

春池閒汎

綠塘新水平。紅檻小舟輕。
解纜隨風去。開襟信意行。
淺憐清演漾。深愛綠澄泓。
白撲柳飛絮。紅浮桃落英。
古文科斗出。新葉剪刀生。
樹集鶯朋友。雲行鴈弟兄。
飛沈皆適性。酣飲自怡情。
花助銀杯氣。松添玉軫聲。
魚跳何事樂。鷗起復誰驚。

律詩 春池閒汎

春池閒汎

綠塘新水平 かに、紅檻小舟輕し。
解纜を解き風に随つて去り、襟を開き意に信せて行く。
淺くして清演漾を憐み、深くして綠澄泓を愛す。
白撲つて柳絮を飛ばし、紅浮んで桃英を落す。
古文科斗出で、新葉剪刀生ず。
樹は鶯の朋友を集め、雲は鴈の弟兄を行る。
飛沈皆性に適す、酣飲自ら情を怡ばす。
花は銀杯の氣を助け、松は玉軫の聲を添ふ。
魚跳りて何事をか樂む、鷗起つて復た誰にか驚く。

莫唱滄浪曲。無塵可濯纓。

唱ふる莫れ滄浪の曲、塵の纓を濯ふべきなし。

【字解】 〔一〕 紅檻。朱塗の欄干。〔二〕 滄浪。水の動搖すること。〔三〕 澄泓。澄んだ淵。〔四〕 古文。古代の文字。科斗は、おたまじやくし、古代の文字は頭が大きく尾が小さくて科斗に似たる故、科斗文字といふ。〔五〕 玉軫。琴をいふ。〔六〕 滄浪曲。ふなうた。楚辭漁父篇に漁父莞爾而笑、鼓枻而去、歌曰、滄浪之水清兮、可濯我纓、滄浪之水濁兮、可濯我足とある。〔七〕 纓。冠の紐。

【題義】 春池に舟を泛べて遊んだことを述べた詩である。

【詩意】 池には春水が湛へてゐる。朱塗の欄干のある小舟を泛べ、纒を解き風に随つて去り、襟を開き意に任せて行けば、淺瀬に小波の立つのも面白く、深淵の澄んでゐるのも好ましい。柳は白い絮を飛ばし、桃は紅の花を散じ、古代文字のやうな科斗が泳ぎ出したり、剪刀で切つたやうな若葉が生え出たりしてゐる。樹には鶯が類を以て集り、雲の上には兄弟翼を比ぶる鴈が飛び、魚鳥の皆その性を遂ぐるを見て、我も酣飲して心を怡ばせば、花は酒を勧めて杯を重ねしめ、松風は琴の音のやうである。魚は跳り鷗は飛び起ち、各風情を添へてゐる。吾が纓は塵一つだになく濯はんやうもないから、滄浪の曲などは歌ふに及ばない。

池上寓興二絶

池上の寓興二絶

濠梁莊惠謾相爭。

濠梁莊惠謾に相争ふ、

【字解】 〔一〕 濠梁。池に架けて

未必人情知物情。

未必必ずしも人情は物情を知らず。

獺捕魚來魚躍出。

獺魚を捕へ來れば魚躍り出づ、

此非魚樂是魚驚。

此れ魚の樂に非ず是れ魚の驚なり。

ある橋。莊子秋水篇に、莊子與子綰遊於濠梁之上、莊子曰、鱸魚出遊從容、是魚樂也、惠子曰、子非魚、安知魚之樂、云云とある。謾はみだりに、やたらにの意。

【題義】 池の上で見た所に即いて興を寄せた二首の絶句。

【詩意】 濠梁の上で莊子と惠子とは魚の樂について謾に言ひ争つたが、人は必ずしも物の道理をよく知る者ではない。獺が水中の魚を捕へんとするから、魚が躍り出すので、實は魚の樂ではなくて魚の驚である。

〔一〕

〔二〕

水淺魚稀白鷺飢。

水淺く魚稀にして白鷺飢う、

勞心瞪目待魚時。

心を勞し目を瞪りて魚を待つ時。

外容閒暇中心苦。

外容は閒暇にして中心は苦む、

似是而非誰得知。

是に似て非なるは誰か知るを得ん。

【詩意】 水が淺く魚が少なくて白鷺が飢ゑ、魚を待つて心を勞し目を瞪つてゐる時の態度は、いかにも從容閒暇のやうに外からは見えるが、中心は氣が氣でないのである。その是に似て實は非なることは

【字解】 〔一〕 外容。外から見た態度。

誰にもわかるまい。

宴後題府中水堂贈盧尹中丞昔余爲尹日。創造之。

宴後府中の水堂に題し、盧尹中丞に贈る。昔余尹たりし日、之を創造す。

水齋歲久漸荒蕪。水齋歲久しうして漸く荒蕪す、

自媿甘棠無一株。自ら媿づ甘棠一株なきを。

新酒客來方宴飲。新酒客來りて方に宴飲し、

舊堂主在重歡娛。舊堂主在りて重ねて歡娛す。

莫言楊柳枝空老。言ふ莫れ楊柳枝空しく老ゆと、

直致櫻桃樹已枯。

府西有櫻桃廳。因樹爲名。今樹亦枯也。

直に櫻桃樹の已に枯るるを致す。

從我到君十一尹。

我より君に到るまで十一尹、

相看自置府中無。

相看て自ら府中に置くや無や。

自予罷後。至中丞。凡十一尹也。

【字解】〔一〕水齋 即ち水堂なり。

〔二〕甘棠 木の名。詩經に甘棠鶯あり。召伯南國を循行し以て文王の政を布く。或は甘棠の下に舍す。後人其徳を思ひ、故に其樹を愛し、因つて此詩を賦す。

【題義】

宴後に河南尹の役所の水邊の堂に題し、現河南尹御史中丞盧眞に贈つた詩である。

【詩意】

僕が河南尹であつた時に建てた水堂も、歳久しくなつて漸く荒廢し、其他には人から追慕されるやうな形見の何一つないのが愧かしい。今客が来たので新酒を宴飲し、舊堂の主人も共に歡娛してゐる。惜いことに楊柳枝（妓の名）も老い、役所の西の櫻桃樹も枯れた。僕から君に到るまで河南尹が十一人代つたが、それ等の人は時時この役所に尋ねて來るであらうか。

和敏中洛下卽事時敏中爲中殿中分司。敏中が洛下卽事に和す。

昨日池塘春草生。

昨日池塘春草生じ、

阿連新有好詩成。

阿連新に好詩の成るあり。

花園到處鶯呼入。

花園到處鶯呼び入れ、

駿馬遊時客避行。

駿馬遊ぶ時客避け行く。

水暖魚多似南國。

水暖かに魚多くして南國に似たり、

人稀塵少勝西京。

人稀に塵少くして西京に勝れり。

洛中佳境應無限。

洛中の佳境應に限なかるべし、

律詩 宴後題府中水堂贈盧尹中丞 和敏中洛下卽事

【字解】〔一〕阿連 謝靈運の族弟惠連をいふ。從弟白敏中に比す。

南史謝惠連傳に、年十歲能屬文、族兄靈運加賞之云、對惠連輒有佳語、嘗於永嘉西堂思詩、竟日不就、忽夢見惠連、即得池塘生春草、大以爲工とある。〔二〕西京、長安。〔三〕老兄、樂天自ら謂ふ。

若欲詰知問老兄。若し詰知せんと欲せば老兄に問へ。

【題義】白敏中（樂天の從弟）の洛下郎事と題する詩に和した作である。敏中は會昌元年殿中侍御使分司東都となり洛陽にゐた。

【詩意】昨日は池塘に春草が生じ、洛下郎事と題する結構な詩が出来た。到る處花園では鶯が人を呼び入れ、駿馬に乗つて遊べば客が避けて通る。水暖かに魚多きことは南國の如く、人稀に塵少きことは長安に勝つてゐる。洛陽には随分佳境が多いが、若しそれを知りたければ俺に問ふがよい。

送敏中新授戸部員外郎西歸

敏中が新に戸部員外郎を授けられ西に歸るを送る

千里歸程三伏天。千里の歸程三伏の天、

官新身健馬翩翩。官新に身健にして馬翩翩たり。

行衝赤日加餐飯。行いて赤日を衝いて餐飯を加へよ、

上到青雲穩著鞭。上りて青雲に到りて穩かに鞭を著けよ。

長慶老郎唯我在。長慶の老郎唯我のみ在り、

【字解】〔一〕三伏 夏至の後の

第三の庚の日を初伏といひ、第四の

庚の日を中伏といひ、立秋の後の第

一の庚の日を末伏といふ。一年中の

最も熱き時節である。〔二〕翩翩

輕疾の貌。〔三〕赤日 夏の日。

〔四〕長慶 穆宗皇帝の年號。〔五〕

客曹 漢の時尚書に客曹あり。外國

客曹故事望君傳。

客曹の故事君が傳へんことを望む。

前鴻後鴈行難續。

前鴻後鴈行續ぎ難し、

相去迢迢二十年。

相去る迢迢二十年。

長慶初。予爲主客郎中。知制誥。遷中書舍人。去今二十一年也。

庚秋を主る。南朝には主客あり。唐宋之に因り、主客郎中・員外郎を置き、禮部の屬司となし、諸藩の朝貢、接待給賜の事を掌る。〔六〕前鴻 前の鴈。樂天自ら喩ふ。後鴈は敏中に喩ふ。〔七〕迢迢 遠き貌。

【題義】從弟白敏中が新に戸部員外郎に任せられて長安に歸るのを送る詩である。舊唐書には、「武宗居易の名を聞き之を相とせんと欲し、以て李德裕に問ふ。德裕言ふ、居易病んで廢す。敏中の文其兄に類し器識ありと。即ち翰林學士に除す。時方に庫部郎中たり。未だ三年を逾えずして入つて相たり」とある。

【詩意】三伏の炎暑を冒して遠く長安に歸るのは容易でないが、新に結構な官を授けられ身も達者で馬の歩みも輕快なのは幸である。夏の暑い日に照りつけられて行くのだから十分攝生を守り、宮廷に上つては大事に役目を務めるがよい。長慶時代の郎中で今に生き残つてゐるのは俺一人である。君の能く客曹の故事を後世に傳へることを望む次第である。先の鴈と後の鴈とが列を續ぐことが出來ず、君と俺と相距ること二十年である。

南侍御以石相贈助成水聲。因以絕句謝之

律詩 送敏中新授戸部員外郎西歸 南侍御以石相贈助成水聲因以絕句謝之

南侍御石を以て相贈り水聲を助成す。因つて絶句を以て之を謝す

泉石磷磷聲似琴。

泉石磷磷聲琴に似たり、

【字解】 一 磷磷 水石相せま

閒眠靜聽洗塵心。

閒に眠り靜に聽いて塵心を洗ふ。

る聲。宋之問の詩に碎石水磷磷とある。 二 潺湲 水の流るる聲。

莫輕兩片青苔石。

輕んずる莫れ兩片青苔の石、

一夜潺湲直萬金。

一夜潺湲として直萬金。

【題義】

南侍御(南は姓、侍御は官名)が樂天に石を贈り水聲を増すやうにしたので、樂天は此絶句を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】

泉の石に注ぐ聲が琴の音のやうで、半眠りつつ靜に聽けば汚れた心を洗ふに足る。二個の青苔の生えた石でも決して馬鹿には出來ない。夜中潺湲たる其音のよいことは萬金にも値する。

閒居自題。戲招宿客

閒居自ら題し、戲れに宿客を招く

水畔竹林邊。閒居二十年。

水畔竹林の邊、閒居二十年。

て眠る。

健常攜酒出。病即掩門眠。

健なるときは常に酒を攜へて出で、病めば即ち門を掩うし

解綬收朝佩。褰裳出野船。

綬を解いて朝佩を收め、裳を褰げて野船を出づ。

屏除身外物。擺落世間緣。

身外の物を屏除し、世間の縁を擺落す。

報曙窗何早。知秋簟最先。

曙を報すること窗何ぞ早き、秋を知ることも簟最も先なり。

微風深樹裏。斜日小樓前。

微風深樹の裏、斜日小樓の前。

渠口添新石。籬根寫亂泉。

渠口新石を添へ、籬根亂泉寫ぐ。

欲招同宿客。誰解愛潺湲。

同宿の客を招かんと欲す、誰か解く潺湲を愛する。

西亭牆下。泉石有聲。

【題義】

自ら閒居の狀を賦して、來り宿すべき客を招いた詩である。

【詩意】

池の畔、竹林の邊に、閒居すること既に二十年である。身の健なる時は酒を攜へて出遊し、病氣の時は門を閉じて眠つてゐる。印綬を解き朝佩を片附け、裳を掲げて船を出る。身外の名利をはらひのけ、世間の縁を絶つて、朝は早く目覺め、秋は快く簟に臥し、夏は深樹の裏に微風を樂み、夕には小樓の前に斜日を望みなどする。渠の口に新しく石を添へ、籬の下には泉の水が瀉いでゐる。來り宿する客を招きたいと思ふが、誰か能く此水の音を愛するであらう。

李留守相公見過池上泛舟舉酒話及翰林舊事。因成四韻

以獻之

律詩 閒居自題戲招宿客

李留守相公見過池上泛舟舉酒話及翰林舊事

李留守相公池上過、舟を泛べ酒を舉げ、話りて翰林の舊事に及べり。因つて四韻を成し以て之を獻す

引棹尋池岸。移樽就菊叢。

棹を引いて池岸を尋ね、樽を移して菊叢に就く。

何言濟川後。相訪釣船中。

何ぞ言はん濟川の後、相訪ふ釣船の中。

白首故情在。青雲往事空。

白首故情在り、青雲往事空し。

同時六學士。五相一漁翁。

同時の六學士、五は相一は漁翁。

【字解】 一 濟川 相となりて君を輔けること。書經の説命篇に、若濟巨川、用汝作舟楫とある。

二 白首 白首、しらがあたま。三 青雲 高位高官に陞ること。四 六學士 六人の翰林學士。唐詩紀事には李絳・裴度・崔羣・裴相・王播・白居易となし、容齋隨筆には裴相・王涯・杜元穎・崔羣・李絳・白居易となす。

【題義】 東都留守李絳が樂天の池上の邸を訪ひ、舟を泛べ酒を酌み、俱に翰林學士たりし時の事を語つたので、樂天は此詩を作つて獻じたのである。

【詩意】 宰相を罷めて後釣徒の仲間入りをするといふ譯でもあるまいが、君は舟に棹して池岸を尋ね、酒樽を移して我が菊叢に就いた。吾は白髮の老翁となつたが昔の情誼は今以て忘れないが、君は青雲の上へ升つて昔の事は忘れたであらう。同時に翰林學士たりし者が六人あつたが、その中五人は宰相となり僕一人は漁翁となつてゐる。

閏九月九日獨飲

閏九月九日獨り飲む

黃花叢畔綠尊前。

黃花叢畔綠尊の前、

猶有些些舊管絃。

猶ほ些些たる舊管絃あり。

偶遇閏秋重九日。

偶々閏秋重九の日に遇ひ、

東籬獨酌一陶然。

東籬獨り酌んで一に陶然たり。

自從九月持齋戒。

九月齋戒を持してより、

不醉重陽十五年。

重陽に醉はざること十五年。

【題義】 閏九月九日に獨り酒を飲んだことを述べた詩である。

【詩意】 菊の花の咲き亂れた畔に酒樽を据ゑ、些些たる管絃の樂を奏し、偶然閏の九月九日に遇つたので、東籬の下に獨酌して樂んだ。毎年九月に齋戒することにしてから、重陽に酒を飲まないことが十五年になる。

【字解】 一 黃花 菊花をいふ。綠尊は綠色に塗つた酒樽。二 重九 九月九日。三 重陽 九月九日、秋の節句をいふ。

覽盧子蒙侍御舊詩多與微之唱和感今傷昔因贈子蒙題
於卷後

律詩 閏九月九日獨飲 覽盧子蒙侍御舊詩多與微之唱和感今傷昔因贈子蒙題於卷後

盧子蒙侍御が舊詩を覽るに、多く微之と唱和す。今を感じ昔を傷み、因つて子蒙に贈りて卷後に題せしむ

早聞元九詠君詩

早に聞く元九が君が詩を詠するを、

【字解】 元九 元稹なり。

恨與盧君相識遲

恨むらくは盧君と相識るの遅きを。

九は輩行。 開道 開けば。 咸陽は元稹の墓の在る處。後集卷十一、元相公輓歌詞三首を見よ。 白楊 木の名。多く墳墓に植う。

今日逢君開舊卷

今日君に逢うて舊巻を開けば、

卷中多道贈微之

卷中多く道ふ微之に贈ると。

相看掩淚情難說

相看て涙を掩うて情説き難く、

別有傷心事豈知

別に心を傷ましむるあり事豈知らんや。

聞道咸陽墳上樹

聞く道らく咸陽墳上の樹、

已抽三丈白楊枝

已に三丈白楊の枝を抽んづと。

【題義】 盧貞（字は子蒙）侍御（官名）の舊詩を覽た所が、中に元稹（字は微之）と唱和した詩が甚だ多い。因つて今昔の感に堪へず、此詩を贈つて詩卷の後に題せしめたといふのである。

【詩意】 以前から元稹が君の詩を吟ずるのを聞いて、君と相識るの遅きを遺憾に思つてゐた。今日君に逢つて其舊詩を覽るに、其中に元稹に贈つた詩が非常に多い。因つて坐に元稹のことを思ひ出し相

看て涙を掩うて、其深情言辭に絶し、別に吾が心を傷ましむることがあるが他人にはわからぬ。聞けば元稹の咸陽の墓には、已に白楊が三丈も長い枝をさしてゐるさうだ。元稹の死んだのは先頃のやうであつたが歲月の立つのは早いものである。

寒亭留客

寒亭に客を留む

今朝閒坐石亭中

今朝閒坐す石亭の中、

爐火銷殘尊又空

爐火銷殘して尊又空し。

冷落若爲留客住

冷落若爲ぞ客を留めて住せしめん、

氷池霜竹雪髯翁

氷池霜竹雪髯翁。

【字解】 銷殘 消え果てる。尊は酒樽。 冷落 さびれ果てる。

【題義】 寒亭に客を引き留めようとする詩である。

【詩意】 今朝石亭の中に閒坐すれば、爐の火も消え果て酒も盡きた。氷池と霜竹と白髯の老翁とだけでは、あまりに不景氣で、到底客を引き留めることは出来ない。

新小灘

新小灘

石淺沙平流水寒

石淺く沙平かにして流水寒し、

【字解】 嚴陵七里灘 七里

律詩 寒亭留客 新小灘

水邊斜挿一漁竿。水邊斜に挿む一漁竿。
江南客見生鄉思。江南の客見て郷思を生じ、
道是嚴陵七里灘。道ふ是れ嚴陵七里灘と。

瀨・七里灘ともいふ。浙江省桐廬縣嚴陵山に在り、連互七里、兩山夾峙、水駛ること箭の如し。

【題義】 新に開鑿した小急流を詠じた詩である。

【詩意】 石や沙の平に敷く處を寒水が流れ、岸には斜に釣竿が挿してある。江南の客は之を見て郷思を起し、嚴陵の七里灘のやうだと謂ふ。

和李中丞與李給事山居雪夜同宿小酌

李中丞が李給事と山居し、雪夜に同宿して小酌せるに和す

憲府觸邪峨豸角。憲府邪に觸ること豸角より峨し、
瑣闥駁正犯龍鱗。瑣闥駁正して龍鱗を犯す。

二人當レ官盛テ奉。爲三時所レ稱也。

那知近地齋居客。那ぞ知らん近地齋居の客、

忽作深山同宿人。忽ち深山同宿の人と作らんとは。

一盞寒燈雲外夜。一盞の寒燈雲外の夜、

【字解】 (一) 憲府 御史臺をいふ。李中丞を指す。豸角は解豸といふ獸の角。解豸は一角獸で性忠、人の鬪ふを見れば不直なる者に觸れ、人の論するを聞けば不正なる者を噛む。(二) 瑣闥 宮門なり。門上刻むに連理の文を以てす。故に名づく。駁正は誤を駁正すること。犯龍鱗は天子の顔を犯して諷めること。

數杯溫酎雪中春。

數杯の溫酎雪中の春。

林泉莫作多時計。

林泉作す莫れ多時の計、

諫獵登封憶舊臣。

諫獵登封舊臣を憶ふ。

方好自逐野獸、相如因上疏諫とある。登封は漢書武帝紀に、元封元年東巡東海上還、登封泰山、降坐明堂云云とある。

【題義】 御史中丞李氏の給事中李氏と山居し、雪の夜に同宿して俱に飲んだといふ詩に和したのである。

【詩意】 御史中丞李氏は能く不直なる物を糾し、給事中李氏は宮廷に在り能く顔を犯して強諫する。竝に其職責を守る良臣と謂ふべきである。その近處に齋居する我は、偶然この二君と同宿することに

なり、雲外の山居の寒燈の下で、雪中温かな酒を酌みかはせば春のやうな心持がする。併し兩君は永く林泉の樂に耽つてゐてはいけな。諫獵や登封について天子が君等に待つことが急であるから。

履道西門二首 履道の西門 二首

履道西門有敝居。履道の西門に敝居あり、

池塘竹樹繞吾廬。池塘竹樹吾が廬を繞る。

豪華肥壯雖無分。豪華肥壯分なしと雖も、

【字解】 (一) 敝居 あばらや。

樂天の自邸をいふ。(二) 行篋 熈

ともいふ。晉之を三隅篋といふ。

(三) 新蔬 新しい野菜。(四) 夷

律詩 和李中丞與李給事山居雪夜同宿小酌 履道西門二首

飽煖安閒卽有餘。

飽煖安閒卽有餘。

行竈朝香炊早飲。

行竈朝に香しくして早飯を炊ぎ、

小園春暖掇新蔬。

小園春暖かにして新蔬を掇ふ。

夷齊黃綺誇芝蕨。

夷齊黃綺芝蕨を誇るも、

比我盤餐恐不如。

我に比すれば盤餐恐らくは如かず。

【題義】洛陽の履道里の西門の近くに在る自邸に閑居する状を述べた詩である。

【詩意】履道里の西門に吾が敝居があつて、池塘や竹樹が取り圍んでゐる。豪華な生活をする事などは思もよらないが、飽くまで食ひ煖かに著て閑居することは出来る。朝は早く起きて飯を炊ぎ、春暖に乗じて野菜を摘む。夷齊や黃綺は芝蕨を誇つてゐるが、俺の食事に比すれば遙に劣るであらう。

〔一〕

〔二〕

履道西門獨掩扉。

履道の西門獨り扉を掩ふ、

官休病退客來稀。

官休し病退いて客の來ること稀なり。

亦知軒冕榮堪戀。

亦知る軒冕榮戀ふるに堪ふるを、

其奈田園老合歸。

田園老いて合に歸るべきを其奈せん。

跛鼈難隨騏驎足。

跛鼈は騏驎の足に隨ひ難く、

傷禽莫趁鳳皇飛。

傷禽は鳳皇の飛ぶを趁ふ莫し。

世間認得身人少。

世間身を認め得る人少し、

今我雖愚亦庶幾。

今我愚なりと雖も亦庶幾し。

【詩意】履道里の西門の邊に門扉を鎖して閑居し、官を罷め病も癒えたが來り訪ふ者はない。高位高官の榮華を慕はないのではないが、老いては田園に歸隱するのが當然である。もと無能の身であるから俊傑と才を爭ふことは出来ない。世間には己の力量を認め得る者が少いが、俺などは愚物ではあるが、自ら知るの明は持つてゐる。

偶吟

偶吟

人生變改故無窮。

人生の變改故より窮まりなし、

昔是朝官今野翁。

昔は是れ朝官今は野翁。

久寄形於朱紫內。

久しく形を朱紫の内に寄せ、

漸抽身入蕙荷中。

漸く身を抽んで蕙荷の中に入る。

荷衣蕙帶。皆楚詞也。

律詩 偶吟

【字解】〔一〕朱紫 貴人の服色。

〔二〕蕙荷 蕙は香草の名。荷は蓮の葉。隱者の服する所なり。

〔三〕去住 去留といふが如し。

〔四〕鱸魚 尊榮 晉の張翰、秋風の起るに因りて吳中の菰菜・尊羹・鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。

無情水任方圓器。

無情の水は方圓の器に任せ、

【五】江東 吳なり。

不繫舟隨去住風。

繫がざるの舟は去住の風に隨ふ。

猶有鱸魚蓴菜興。

猶ほ鱸魚蓴菜の興あり、

來春或擬往江東。

來春或は江東に往かんと擬す。

【題義】 閒適の情狀を述べた詩である。

【詩意】 人生の變改は窮まりなく、俺も昔は朝官であつたが今は一個の野翁となり、昔は朱紫の中に身を寄せたが、今は荷衣蕙帶の隱者である。水の心なくして方圓の器に隨ふが如く、繫がざる舟の風のまにまに去留するが如くである。それでも人竝に鱸魚の鱠や蓴菜の羹を食ひたくなり、來春は吳に移住しようかなどと思つてゐる。

雪夜小飲贈夢得

雪夜小飲、夢得到贈る

同爲懶慢園林客。

同じく懶慢たる園林の客となり、

共對蕭條雨雪天。

共に對す蕭條たる雨雪の天。

小酌酒巡銷永夜。

小しく酒を酌み巡りて永夜を銷し、

【字解】 〔一〕蕭條 淋しき貌。

〔二〕永夜 永き冬の夜。

〔三〕殘年 餘年。老後の年。

〔四〕散仙 仙人の未だ職を授けられざる者をいふ。

大開口笑送殘年。

大に口を開いて笑ひ殘年を送る。

久將時背成遺老。

久しく時と背いて遺老と成り、

多被人呼作散仙。

多く人に呼んで散仙と作さる。

呼作散仙應有以。

呼んで散仙と作す應に以あるべし、

曾看東海變桑田。

曾て東海の桑田に變ずるを看たり。

【題義】 雪夜小飲して劉禹錫（字は夢得）に贈つた詩である。

【詩意】 君と僕とは共に園林に隱棲する物鼻爺となり、今蕭條として降りそそぐ雪に對してゐる。相俱に小酌して永き夜を過し、大に口を開き笑つて餘年を送り、久しく世と相背いて遺老となり、人から散仙と呼ばれてゐる。散仙と呼ばれるのも不思議はない。嘗て麻姑（古の仙女）のやうに東海の變じて桑田となるのを看たのだから。

歲暮夜長病中燈下聞盧尹夜宴以詩戲之且爲來日張本也

歲暮夜長し。病中燈下に盧尹の夜宴するを聞き、詩を以て之に戲れ、且來日の張本となす也。

榮鬧興多嫌晝短。

榮鬧は興多くして晝の短きを嫌ひ、

【字解】 〔一〕來日 後日なり。

律詩 雪夜小飲贈夢得

歲暮夜長病中燈下聞盧尹夜宴以詩戲之且爲來日張本也

衰閒睡少覺明遲。 衰閒は睡少くして明るの遅きを覺ゆ。

當君秉燭銜杯夜。 君が燭を秉り杯を銜む夜に當り、

是我停殮服藥時。 是我我殮を停め藥を服する時。

枕上愁吟堪發病。 枕上の愁吟病を發するに堪へ、

府中歡笑勝尋醫。 府中の歡笑醫を尋ぬるに勝る。

明朝強出須謀樂。 明朝強ひて出でて須らく樂を謀るべし。

不擬車公更擬誰。 車公に擬せずんば更に誰にか擬せん。

【題義】 歳の暮に方り夜が正に長い。病中燈下に河南尹（官名）盧貞の夜宴するを聞き、此詩を寄せて戲れ、後日の用意としたといふのである。

【詩意】 榮華の人は興が多いので晝の短きを嘆き、衰閒の人は睡が少いから夜の明けるのの遅いことを恨む。君が燭を秉つて夜宴する時、我は病に臥し食を廢して藥を飲んでゐる。枕上の愁吟は病を發するに足り、府中の歡笑は醫者にかかるよりも效がある。明朝は病を強めて出て樂を求めようと思ふ。就いては君を車公に擬して座興の中心となつて貰ひたい。

病中數會張道士見譏。以此答之

病中數會。張道士譏らる。此を以て之に答ふ

亦知數出妨將息。

不可端居守寂寥。

病即藥窗眠盡日。

興來酒席坐通宵。

賢人易狎須勤飲。

姪女難禁莫漫燒。

張道士輸白道士。

一杯沈瀼便逍遙。

亦知數出。出づれば將息を妨げ、

端居して寂寥を守る可からざるを。

病めば即ち藥窗眠ること盡日、

興來れば酒席坐すること通宵。

賢人は狎れ易し須らく勤めて飲むべし、

姪女は禁じ難し漫に燒く莫れ。

張道士は白道士に輸り、

一杯の沈瀼便ち逍遙。

【題義】 病中數會。宴會に列したので、張道士から譏られた。因つて此詩を以て答へたのである。

【詩意】 屢出て宴席などに列すれば休養の妨となり、端居して寂寥を守ることの出来ないことはよく承知してゐるが、病めば藥窗の下に終日眠つてゐるけれども、興が起れば酒席に乗り出して通宵の飲み明す。濁酒は勤めて飲むべく、仙薬も燒くがよい。張道士は白道士（樂天自ら謂ふ）に劣り、一杯の沈瀼を飲んだだけですつかり陶然としてしまふ。

律詩 病中數會張道士見譏以此答之

【字解】 一 將息 將養休息なり。

二 端居 ただしく坐する。

三 賢人 濁酒をいふ。

四 姪女 道家にて丹を燒くに水銀を稱して姪女と云ふ。

五 沈瀼 露氣なり。仙人の餐する所のもの。列仙傳に陵陽子春食朝霞、夏食流瀼とある。

卯飲

卯飲

短屏風掩臥牀頭。

短屏風は掩ふ臥牀の頭、

烏帽青氎白氎裘。

烏帽青氎白氎裘。

卯飲一杯眠一覺。

卯飲一杯眠一たび覺む、

世間何事不悠悠。

世間何事か悠悠たらざらん。

【題義】朝酒を飲んだ時の詩である。

【詩意】寢臺の頭に低い屏風を立てまはし、烏帽を戴き白氎の裘を纏うて青氎の上に坐し、朝酒を飲んで醉眠が覺めれば、何とも謂へぬ愉快を感じて、世間の萬事はトント氣にかからなくなる。

寄題餘杭郡樓兼呈裴使君

餘杭郡樓に寄題し、兼ねて裴使君に呈す

官歷二十政宦遊三十秋。

官歷二十政、宦遊三十秋。

江山與風月最憶是杭州。

江山と風月と、最も憶ふ是れ杭州。

北郭沙堤尾西湖石岸頭。

北郭沙堤の尾、西湖石岸の頭。

綠觴春送客紅燭夜廻舟。

綠觴春客を送り、紅燭夜舟を廻らす。

不敢言遺愛空知念舊遊。

敢て遺愛を言はず、空しく舊遊を念ふを知る。

憑君吟此句題向望濤樓。

君に憑む此句を吟じ、望濤樓に題せんことを。

【字解】

【一】餘杭郡 杭州なり。樂天嘗て杭州刺史たり。寄題は遠方にあて遙に寄せ題するなり。裴使君は現杭州刺史裴氏。使君は刺史の稱。【二】宦遊 官吏として各地に轉住すること。【三】遺愛 仁愛の後に遺留するをいふ。左傳に、子産卒、仲尼聞之、出涕曰、古之遺愛也とある。【四】望濤樓 樓の名であらう。向は於に同じ。

【題義】

杭州城樓に寄題し、兼ねて杭州刺史裴氏に呈した詩である。

【詩意】

僕は二十回も官職が換り、各地に轉住すること三十年である。その中でも江山風月の勝の最も追憶の深いのは杭州である。北郭の沙堤・西湖の石岸に、春客を送りては綠酒を酌み、夜紅燭を點した舟を廻らしなどしたことが今でも念頭に残り、遺愛などは何もないが、舊遊を念ふことだけは人並である。君に憑むが、どうぞ此詩をば望濤樓に題してくれよ。

楊六尙書留太湖石在洛下借置庭中因對舉杯寄贈絕句

楊六尙書太湖石を留めて洛下に在り。借りて庭中に置き、因つて對して杯を舉げ、

絶句を寄贈す

借君片石意何如。

君が片石を借る意何如、

【字解】

【一】太湖石 庭石なり。

律詩

卯飲

寄題餘杭郡樓兼呈裴使君

楊六尙書留太湖石在洛下借置庭中因對舉杯

置向庭中慰索居。

庭中に置いて索居を慰めんとする。

每就玉山傾一酌。

玉山に就いて一酌を傾くる毎に、

興來如對醉尙書。

興來りて醉尙書に對するが如し。

汝士を指して言ふ。

【題義】吏部尙書楊汝士（六は輩行）は太湖石を洛陽に遺して去つた。樂天は其石を借りて自分の庭に置き、其石に對して酒を飲み、此詩を作つて楊汝士に寄せたのである。

【詩意】君の遺して往つた石を借りるのは何の爲かといふに、庭に置いて之を眺め離居の情を慰めた爲である。この石に對して一酌すれば、興が湧いて來て君に對してゐるやうな氣持がする。

太湖より探る。故に此の名あり。
【一】片石 一片の石。【二】索居 友と離れてゐること。禮記に、吾離羣而索居とある。【三】玉山 太湖石を指して言ふ。【四】醉尙書 楊

喜入新年自詠

時年七十一。

新年に入るを喜んで自ら詠す

時に年七十一。

白鬚如雪五朝臣。

白鬚雪の如し五朝の臣、

又值新正第七旬。

又値ふ新正第七旬。

老過占他藍尾酒。

老い過ぎて占他す藍尾の酒、

病餘收得到頭身。

病餘收め得たり到頭の身。

【字解】【一】五朝 憲宗・穆宗・敬宗・文宗・武宗。樂天の及第したのは憲宗の時である。【二】第七旬 第七十。【三】占他 占める。他は助辭。新年の屠蘇酒は年少者から順に飲みまはして老大に至る例である

銷磨歲月成高位。

歲月を銷磨して高位を成す、

比類時流是幸人。

時流に比類すれば是れ幸人。

大曆年中騎竹馬。

大曆年中竹馬に騎る、

幾人得見會昌春。

幾人か見るを得たる會昌の春。

が、最後に飲むのを藍尾酒といふ。
【四】到頭 盡頭に窮り到るをいふ。後集卷八、憶廬山舊隱及洛下新居一を見よ。【五】時流 世の人人。【六】大曆 代宗の年號。樂天は大曆七年に生れた。【七】會昌 武宗の年號。

【題義】會昌二年の春を迎へたことを喜んだ詩である。

【詩意】我は五朝に歴史した老臣であつて、又第七十回の新年を迎へた。老大になつたので、最後に屠蘇の杯を傾げるのも嬉しく、病後に命を持ちこたへ得たのも喜ばしい。永い歳月を費して高位に升つたが、世の人人に比ぶれば餘程幸福である。大曆時代に竹馬に跨つて遊んだ者が會昌の春に遇ふことを得たのは幾何もあるまい。

灘聲

灘聲

碧玉斑斑沙歷歷。

碧玉斑斑沙歷歷、

清流泱泱響泠泠。

清流泱泱響泠泠。

自從造得灘聲後。

灘聲を造し得てより後、

【字解】【一】斑斑 斑點衆多の貌。歷歷は明なる貌。【二】泱泱 流水の貌。王建の詩に、溫泉泱泱出宮流とある。泠泠は水の聲。古樂府

玉管朱絃可要聽。玉管朱絃聽くを要すべけんや。

一 山溜何冷冷とある。

【題義】急湍の聲を聽いて樂んだ詩である。

【詩意】水中の碧玉がきらきらとして沙が白い。流水が響を立てて勢よく奔る。急湍の聲を得てから後は、管絃の聲などは聽きたくもなくなつた。

題石泉

石泉に題す

殷勤傍石繞泉行。

殷勤に石に傍ひ泉を繞つて行く、

【字解】〔一〕殷勤、れんごるに。

不説何人知我情。

説かずんば何人か我が情を知らん。

漸恐耳聾兼眼暗。

漸く恐る耳聾し兼ねて眼暗からんことを、

聽泉看石不分明。

泉を聽き石を看るに分明ならず。

【題義】石と泉とに題した詩である。

【詩意】石に傍ひ泉を繞り殷勤に閉行する。その時の我が心の樂は言つてきかせなければ他人は知るまい。併し年老いて段段耳や目が不自由になるのではあるまいかと恐れる。近頃は泉を聽いても石を看ても分明しなくなつた。

送王卿使君赴任蘇州因思花迎新使感舊遊寄題郡中木蘭西院

蘭西院

王卿使君の蘇州に赴任するを送り、因つて花の新使を迎ふるを思ひ、舊遊を感じ、郡中の木蘭西院に寄題す

一別蘇州十八載。

一たび蘇州に別れて十八載、

時光人事隨年改。

時光人事年に隨つて改まる。

不論竹馬盡成人。

論せず竹馬の盡く人と成れるを、

亦恐桑田半爲海。

亦恐る桑田の半海となるを。

鶯入故宮含意思。

鶯は故宮に入りて意思を含み、

花迎新使生光彩。

花は新使を迎へて光彩を生ず。

爲報江山風月知。

爲に江山風月に報じて知らしめよ、

至今白使君猶在。

今に至るまで白使君猶ほ在りと。

【題義】蘇州刺史王卿の赴任を送り、蘇州の木蘭の花が新しい刺史を迎ふるを思ひ、我が舊遊を感じ、此詩を寄題したといふのである。

律詩 題石泉 送王卿使君赴任蘇州因思花迎新使感舊遊寄題郡中木蘭西院

【字解】〔一〕使君、刺史の稱。

〔二〕郡中、蘇州を指して言ふ。樂天

は嘗て蘇州刺史であつた。西院は西

の中庭。寄題は遠方から寄せ題する

こと。〔三〕十八載、十八年。〔四〕

時光、時節。〔五〕竹馬、兒童。

時光、時節。〔五〕竹馬、兒童。

〔六〕桑田、桑田。〔七〕故宮、蘇

州は昔吳王の都した處である。〔八〕

白使君、蘇州刺史白樂天。

【詩意】一たび蘇州を去つてから早くも十八年になる。歲月の換ると共に人事も改まつたであらう。昔の兒童の成人したのは謂ふまでもなく、桑島が變じて半海と化したであらう。鶯は昔の宮殿に入りて懐古の思を含み、花は新しい刺史を迎へて光彩を放つであらう。願はくは我が爲に江山風月に告げ、白刺史は今以て存命であると知らせてくれよ。

出齋日喜皇甫十早訪

齋を出づる日、皇甫十の早に訪ふを喜ぶ

三旬齋滿欲銜杯。三旬齋滿ちて杯を銜まんと欲す、
平旦敲門門未開。平旦門を敲いて門未だ開かず。
除却朗之攜一榼。朗之が一榼を攜ふるを除却せば、
的應不是別人來。的に應に是れ別人來らざるべし。

【字解】 〔一〕平旦 朝早く。
〔二〕除却 除く。
〔三〕別人 ほ
かの人。

【題義】

齋戒の期限が満ちた日に皇甫朗之の朝早く來り訪ひしことを喜んだ詩である。

【詩意】三十日間の齋戒の期限が満ちて酒を飲みたくなり、朝早く家の門を敲いたがまだ門が開かない。この時に酒樽を攜へて來り訪ふ者は、皇甫朗之を措いて外にはあるまい。

會昌二年春題池西小樓

會昌二年春、池西の小樓に題す

花邊春水水邊樓。

花邊の春水水邊の樓、

一坐經今四十秋。

一たび坐してより今に經て四十秋。

望月橋傾三遍換。

望月橋傾いて三遍換へ、

采蓮船破五回修。

采蓮船破れて五回修む。

園林一半成喬木。

園林一半喬木と成り、

鄰里三分作白頭。

鄰里三分白頭と作る。

蘇李冥蒙隨燭滅。

蘇李冥蒙燭に隨つて滅し、

陳樊漂泊逐萍流。

陳樊漂泊萍を逐うて流る。

蘇庶子弘。李中丞道樞。及陳樊二妓。十餘年皆樓中歌酒中伴。或歿或散。獨予在焉。

雖貧眼下無妨樂。

貧しと雖も眼下樂を妨ぐる無し、

縱病心中不與愁。

縱ひ病むも心中愁に與からず。

自笑靈光巋然在。

自ら笑ふ靈光巋然として在るを、

春來遊得且須遊。

春來遊び得ば且須らく遊ぶべし。

【題義】

會昌二年の春に池西の小樓に題した詩である。

律詩 田齊日喜皇甫十早訪 會昌二年春題池西小樓

【字解】

〔一〕三遍 三度。

〔二〕白頭 白髮の老人。

〔三〕冥蒙 死亡する。

〔四〕眼下 眼前といふが如し。

〔五〕靈光 漢の景帝の子、魯の恭王の立つる所の殿の名。王延壽の魯靈光殿賦に、靈光巋然獨存とある。こゝは樂天が獨り生存するに喩ふ。

【詩意】花邊には池があり池邊には樓がある。我は一たび此樓に坐してから四十年になる。されば望月橋が傾いて三回架け換へ、蓮を採る船が破損して五回修繕し、園林は半は喬木となり、近鄰の人は三分通り白髪の老人になり、蘇弘・李道樞は燭火と共に消え滅び、陳・樊の二妓も萍のやうに漂流し去つた。我は貧しくはあれども樂を眼前に取ることが出来、病んではあるが心中に何の愁もない。ただ獨り生き残つてゐるのは自ら笑ふ所であるが、春色を遊賞することが出来れば尙ほ遊賞しようと思ふ。

酬南洛陽早春見贈

南洛陽の早春贈らるるに酬ゆ

物華春意尙遲廻

物華春意尙ほ遅廻す、

頼有東風晝夜催

頼に東風ありて晝夜催す。

寒縋柳腰收未得

寒は柳腰に縋うて收むること未だ得ず、

暖熏花口噤初開

暖は花口に熏じて噤初めて開く。

古詩云。口噤不能開。

欲披雲霧聯襟去

雲霧を披き襟を聯ねて去らんと欲し、

先喜瓊瑤入袖來

先づ喜ぶ瓊瑤の袖に入りて來るを。

【字解】〔一〕物華 萬物の菁華。王勃の滕王閣序に、物華天寶、龍光射斗牛之墟とある。遅廻は徘徊といふが如し。抄抄しく進まないこと。〔二〕瓊瑤 美玉なり。南洛陽の詩に喩ふ。〔三〕長齋 長期の齋戒。〔四〕年少洛陽才 賈誼は漢の洛陽の人、文帝召して博士となし、超遷して大中大夫となす。其の年少秀才なるを以て稱して賈生となす。

久病長齋詩老退

久病長齋詩老退す、

爭禁年少洛陽才

争でか禁へん年少洛陽の才。

【題義】洛陽縣令南氏から春の初に贈られた詩に酬いたのである。

【詩意】物のけはひも春意も遅廻として進まず、只東風が晝も夜も春氣を催してゐる。寒威が柳に縋うて未だその威を收めないが、暖氣が蕾に熏じて稍綻び始めた。雲霧を披き君に伴つて遊ぼうと思つた所へ、結構な詩を贈られて誠に嬉しい。併し自分は久病長齋の爲に詩力も老退し、一詩を酬いたと思ふが、到底年少洛陽の才たる君にはかなはない。

對新家醞翫自種花

新家醞に對して自ら種るし花を翫ぶ

香麴親看造芳叢手自栽

香麴親しく見て造り、芳叢手自ら栽う。

迎春報酒熟垂老看花開

春を迎へて酒の熟するを報じ、老に垂んとして花の開く

紅蠟半含萼綠油新醱醅

紅蠟半萼を含み、綠油新に醱を醱す。

玲瓏五六樹激豔兩三杯

玲瓏たる五六樹、激豔たる兩三杯。

恐有狂風起愁無好客來

狂風の起るあらんことを恐れ、好客の來るなからんこと

獨酣還獨語待取月明回。獨り酣にして還た獨り語り、月明を待ち取りて回る。

【字解】 醺、酒の熟すること。玲瓏、玉の如く美しき貌。澹澹、さざなみの立つ貌。

【題義】 新に自分の家で造つた酒を飲みつつ、自ら種ゑた花を賞翫したことを述べた詩である。

【詩意】 親ら麴を吟味して造つた酒が春を迎へて熟し、手づから種ゑた樹が老境に入つて始めて花を著けた。花は紅の蠟で作つたやうで、酒は緑の油のやうである。玲瓏たる五六本の樹に對し、なみなみとついで二三杯傾けた。狂風が吹かねばよいがと恐れ、誰か好い客でも来てくれればと思ひつつ、獨り酔ひ獨り語つて月の出るまで飲み續けた。

攜酒往朗之莊居同飲 酒を攜へ朗之が莊居に往き同じく飲む

慵中又少經過處 慵中又經過する處 少く、

別後都無勸酒人 別後都て酒を勸むる人なし。

不挈一壺相就醉 一壺を挈へ相就いて酔はずんば、

若爲將老度殘春 若爲ぞ老を將て殘春を度らん。

【題義】 酒を攜へ皇甫朗之の別莊に往つて俱に飲んだ詩である。

【詩意】 何事をするにも大儀なので何處へも出掛けず、君に別れてからは酒を勸めてくれる人もない。せめて酒を攜へ君の處へ往つて飲まなければ、どうして老の身を以て殘春を送ることが出來ようぞ。

以詩代書酬慕巢尚書見寄 慕巢書中。頻切歸休結 侶之意。故以此答。

詩を以て書に代へ、慕巢尚書の寄せられしに酬の意切なり、故に此を以て答ふ。

書意詩情不偶然 書意詩情偶然ならず、

若云夢想在林泉 夢に林泉に在るを想ふと云ふが若し。

願爲愚谷烟霞侶 愚谷烟霞の侶とならんことを願ひ、

思結空門香火緣 空門香火の緣を結ばんことを思ふ。

每媿尚書情眷眷 毎に媿づ尚書の情眷眷たるを、

自憐居士病緜緜 自ら憐む居士の病緜緜たるを。

不知待得心期否 知らず心期を待ち得んや否や、

老校於君六七年 君より老ゆること六七年。

【題義】 此詩を以て書狀に代へ、楊汝士（字は慕巢、前に見ゆ）から詩を寄せられたのに酬いたので

律詩 攜酒往朗之莊居同飲 以詩代書酬慕巢尚書見寄

【字解】 一、愚谷、谷の名。後

の遊・豐樂招提佛光三寺に見ゆ。烟霞侶は隱者をいふ。二、空門、佛教をいふ。佛家彼此契合するを謂うて香火因緣といふ。三、緜緜、長く續く貌。四、心期、兩心相期許するをいふ。南史に、向柳與・顔竣・友善、及・竣貴、柳猶以・素情・不・推・先之、曰、我與・士・遜・心期久矣、豈可・一旦・以・勢利・處・也とある。五、校、ヨリモの意に用ふ。卷十八、題・那中荔枝詩十八韻を見よ。

ある。
【詩意】君の手紙や詩の意を察するに、早く官を罷めて引退し、林泉の中に棲みたいと思つてゐるらしい。愚谷烟霞の侶となり、佛門に香火の縁を結びたいといふ君の熱情は、毎毎予の感謝する所で、ただ予の病の荏苒として癒えないのを自ら憐んでゐる。予は君よりも六七歳の年長者であるから、果して期待を全うし得るや否や甚だ覺束ない。

春盡日

春盡くる日

芳景銷殘暑氣生。

芳景銷殘して暑氣生ず、

感時思事坐含情。

時に感じ事を思ひ坐して情を含む。

無人開口共誰語。

人なし口を開いて誰と共に話らん、

有酒回頭還自傾。

酒あり頭を回らして還た自ら傾く。

醉對數叢紅芍藥。

酔うては數叢の紅芍藥に對し、

渴嘗一盃綠昌明。

渴しては一盃の綠昌明を嘗む。

獨茶之名也。

春歸似遣鶯留語。

春歸りて鶯をして語を留めしむるに似、

【字解】 一 芳景 春景色。銷 殘は過ぎ去ること。

二 一盃 一椀なり。

好住林園三兩聲。

好く林園に住すること三兩聲。

【題義】 春の盡くる日に作つた詩である。

【詩意】 春景は既に銷盡して暑氣が催して來た。時に感じ事を思ひ獨り坐して情を含んでゐる。相手がなないから誰と語らんやうもなく、酒はあるが唯獨りで傾ける外はない。酔うては數叢の紅芍藥に對し、渴しては一椀の綠昌明を飲む。春が歸り去るので鶯に挨拶の語を述べさせるのか、林園に住して二聲三聲啼いてゐる。

招山僧

山僧を招く

能入城中乞食否。

能く城中に入り食を乞ふや否や、

莫辭塵土汗袈裟。

辭する莫れ塵土の袈裟を汗すを。

欲知往處東城下。

往處を知らんと欲せば東城の下、

繞竹泉聲是白家。

竹を繞る泉聲是れ白家。

【題義】 山寺の僧を招いた詩である。

【詩意】 塵土の袈裟を汗すを厭はず、洛陽の城下に來て托鉢してはどうぢや。洛城の東の竹を繞つて泉聲の聞える處が俺の住處だ。

律詩 春盡日 招山僧

夏日與閒禪師林下避暑

夏日閒禪師と林下に暑を避く

落景牆西塵土紅。

落景牆西塵土紅なり。

【字解】 落景 夕日。落日。

伴僧閒坐竹泉東。

僧に伴ひ閒坐す竹泉の東、

綠蘿潭上不見日。

綠蘿潭上日を見ず、

白石灘邊長有風。

白石灘邊長く風あり。

熱惱漸知隨念盡。

熱惱漸く知る念に随つて盡くるを、

清涼常願與人同。

清涼常に願ふ人と同じからんことを。

每因毒暑悲親故。

毎に毒暑に因りて親故を悲む、

多在炎方瘴海中。

多く炎方瘴海の中に在り。

【三】 親故 故舊。親友。

【三】 炎方 南方炎熱の地。瘴海は惡氣の海。

是歲潮詔等郡。皆有親友謫居。

【題義】 夏、閒禪師（僧侶の名）と林下に暑を避けた時の詩である。

【詩意】 夕日の照らす我が家の牆の西は紅塵が濛濛としてゐる。我は僧に伴ひ竹泉の東に閒坐してゐる。綠蘿の這ひ雜る潭の上には日の光もささず、白石の磊磊たる急湍の邊には常に風がある。坐すること暫くにして熱惱が俗念と共に消え、この清涼を人と同じうしたいと思ふ。毒暑に遇ふ毎に南方炎

瘴の地に流されてゐる親友を悲まざるを得ない。（開成五年、楊嗣復は潮州に貶せられ、李珣は韶州に貶せられた。）

題新澗亭兼酬寄朝中親故見贈

新澗の亭に題し、兼ねて朝中親故の贈られしに酬寄す

何處披襟風快哉。

何の處か襟を披いて風快き、

一亭臨澗四門開。

一亭澗に臨んで四門開く。

金章紫綬辭腰去。

金章紫綬腰を辭して去り、

白石清泉就眼來。

白石清泉眼に就いて來る。

自得所宜還獨樂。

自ら宜しき所を得て還た獨り樂む、

各行其志莫相哈。

各其志を行つて相哈ふ莫れ。

禽魚出得池籠後。

禽魚池籠を出で得て後、

縱有人呼可更回。

縱ひ人の呼ぶあるも更に回るべけんや。

【字解】 金章 金印。紫綬 紫の印綬。

【題義】 新に開鑿した澗に臨める亭に題し、兼ねて朝廷に居る親友から贈られた詩に酬いた作である。

律詩 夏日與閒禪師林下避暑 題新澗亭兼酬寄朝中親故見贈

【詩意】襟を披いて好風に當るには何處がよいかといふに、湖に臨める亭の四方の門を開いた處に在る。金印紫綬を腰から卸して自由の身になれば、白石や清泉が忽ち我が目に入り来る。自分は自分の柄に合ったことをして獨りで楽しんでゐる。各其志を行ふのだから譏笑してはいけない。鳥や魚は一旦池や籠を出て自由の身になつてからは、たとひ人が呼んでも復た戻つては來ない。

病中看經贈諸道侶

病中看經して、諸道侶に贈る

右眼昏花左足風

右眼は昏花し左足は風、

金篋石水用無功

金篋石水用ふれども功なし。

不如廻念三乘樂

如かず廻念三乘の樂、

便得浮生百疾空

便ち得たり浮生百疾の空しきを。

無子同居草菴下

子の同じく草菴の下に居るなく、

有妻偕老道場中

妻の偕に道場の中に老ゆるあり。

何煩更請僧爲侶

何ぞ煩はしく更に請じて僧を侶となさん、

【字解】(一)昏花 目が霞んでよく見えないこと。風は中風。(二)金篋 刀の箭鏃に似たるものを篋といふ。涅槃經に、有レ人詣レ良醫、醫者以レ金篋刮其眼膜、使レ復明ことある。(三)三乘 佛語。一は菩薩乘、二は辟支乘、三は聲聞乘。乘は車乘を以て喩となす。修道の士能力各殊なり。辟支聲聞は唯自ら度せんことを求め、菩薩乘は普く衆生を濟ふ。(四)道場 佛道を修するところ。

月上新歸伴病翁

月上新に歸りて病翁に伴ふ。

時適談氏女子自太原初歸。雜摩詰有レ女名月上也。

【題義】

病中經文を讀んで、修道の侶達に贈つた詩である。

【詩意】

右の眼は霞んで見えず、左の足は中風で自由がきかず、金篋や磁石水を用ひて見たが一向効がない。寧ろ佛道の修業に心を用ひ、浮世の煩惱を盡く超逸する方がよい。子の俱に草菴に居る者はないが、妻は修道院に偕老してゐる。敢て僧を請じて侶となすを須ひない。談氏に嫁した女が歸つて我に侍してゐるから。(後の談氏小外孫玉童を見よ。)

遊豐樂招提佛光三寺

豐樂・招提・佛光三寺に遊ぶ

竹鞋葵扇白綃巾

竹鞋葵扇白綃の巾、

林野爲家雲是身

林野は家と爲り雲は是れ身。

山寺每遊多寄宿

山寺毎に遊んで多くは寄宿し、

都城暫出即經旬

都城暫く出づれば即ち旬を經。

漢容黃綺爲逋客

漢は黃綺を容して逋客となし、

【字解】(一)葵扇 蒲葵扇なり。俗に芭蕉扇といふ。白綃巾は白絹の頭巾。(二)黃綺 商山四皓中の人、夏黃公及び綺里季。逋客は世を避けて隠れてゐる人。(三)巢由 堯の時の隱者。巢父及び許由。(四)制書 詔書なり。(五)愚谷 谷の

堯放巢由作外臣。堯は巢由を放ちて外臣と作す。
 昨日制書臨郡縣。昨日制書郡縣に臨むも、
 不談愚谷醉鄉人。談せず愚谷醉郷の人。

名。前の以詩代書酬慕巢尙書見
 寄に見ゆ。愚谷醉郷人は樂天自ら謂
 ふ。

【題義】 豊樂・招提・佛光の三寺に遊んだ詩である。

【詩意】 竹の鞋をはき蒲葵扇を持ち白絹の頭巾をかぶり、林野を家となし身を浮雲に比し、山寺に遊んで多くは寄宿し、都を出れば十日位は還らない。漢は黄綺を容して逋臣となし、堯は巢由を放ちて外臣となしたやうに、只今の天子も我をば度外に置いて、昨日は詔書を郡縣に下されたが、愚谷醉郷の人たる我には何の音沙汰もない。

醉中得上都親友書以予停俸多時憂問貧乏偶乘酒興詠而報之

醉中上都親友の書を得たるに、予が俸を停められしこと多時なるを以て、貧乏を憂問す。偶、酒興に乗じ、詠じて之に報ゆ

頭白醉昏昏狂歌秋復春。頭白くして酔うて昏昏たり、狂歌す秋復た春。
 一生耽酒客五度棄官人。一生酒に耽る客、五度官を棄てし人。

異世陶元亮前生劉伯倫

異世の陶元亮、前生の劉伯倫。

臥將琴作枕行以錘隨身。臥しては琴を將て枕と作し、行けば錘を以て身に隨ふ。

歲要衣三對年支穀一困。歲、衣三對を要し、年、穀一困を支ふ。

園葵烹佐飯林葉埽添薪。園葵烹て飯を佐け、林葉埽ひて薪に添ふ。

沒齒甘蔬食搖頭謝摺紳。齒沒くして蔬食に甘んじ、頭を搖かして摺紳に謝す。

自能拋爵祿終不惱交親。自ら能く爵祿を抛ち、終に交親を惱さず。

但得杯中淥從生甌上塵。但杯中の淥を得て、甌上の塵を生ずるに従ふ。

煩君問生計憂醒不憂貧。君を煩はして生計を問はしむれども、醒を憂へて貧を憂へず。

【字解】 一、昏昏 醉ふ貌。二、陶元亮 陶淵明なり。三、劉伯倫 劉伶、字は伯倫、酒を縱にして放達なり、嘗て酒徳頌を著す。四、一困 虞の圓きものを困といふ。五、蔬食 野菜食。六、摺紳 高位高官の人。七、交親 親友。

【題義】 帝都長安に居る親友から手紙を貰つた。予が俸を停められてから大分久しくなるので、或は貧窮に惱んでゐはせぬかと心配して手紙で尋ねてくれたのである。偶、酒興に乗じて此詩を作つて答へたといふのである。

【詩意】 俺は白毛頭をして昏昏と酔ひ、年がら年中狂歌してゐる。酒に耽つて一生を送り、五度病を

以て官を辭した。世を異にする陶淵明、劉伶の生れかはりとも謂ふべき男である。臥す時は琴を枕とし、行くには錡を攜へ、毎年衣を三對、穀を一倉づつ蓄へ、園葵を煮ては飯を補ひ、落葉を掃つては薪とし、齒が抜けて蔬食に甘んじ、頭を振つて搢紳と交を絶つてゐる。自ら爵祿を抛棄したのだから、決して親友に迷惑はかけない。ただ酒さへあれば甑に塵が積らうとも敢て厭はない。親切にも君は俺の生計を尋ねてくれたが、酔の醒めることは常に憂へてゐるが貧乏は一向苦にならないのだから、君も安心してくれ。

池畔逐涼

池畔に涼を逐ふ

風清泉冷竹修修。

風清く泉冷かにして竹修修たり、

三伏炎天涼似秋。

三伏の炎天涼秋に似たり。

黃犬引迎騎馬客。

黃犬引き迎ふ騎馬の客、

青衣扶下釣魚舟。

青衣扶け下る釣魚の舟。

衰容自覺宜閒坐。

衰容自ら覺ゆ閒坐するに宜しきを、

蹇步誰能更遠遊。

蹇歩誰か能く更に遠遊せん。

料得此身終老處。

料り得たり此身終老の處、

【字解】 〔一〕 修修 風の聲。

〔二〕 三伏 夏至の後の第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋後の第一の庚の日を末伏といふ。〔三〕 青衣 婢なり。〔四〕 蹇歩 歩行の自由でないこと。時に樂天は中風で足が不自由であつた。

只應林下與灘頭

只應に林下と灘頭となるべし。

【題義】 池の畔に涼を逐うた詩である。

【詩意】 風清く泉冷かに竹が修修と鳴り、三伏の炎天でも秋よりも涼しい。黃犬を引いて騎馬の客を迎へ、婢に扶けられて釣魚の舟に乗つた。老衰しては閒坐するのが最もよいと覺り、歩行が自由でないから遠方に遊ぼうとは思はない。恐らく我が身の終老する處は、この林下と灘頭とであらう。

池鶴八絕句并序

池鶴八絕句 并に序

池上有鶴。介然不羣。烏鳶雞鵝次第嘲噪。諸禽似有所謂。鶴亦時復一鳴。余非治長不通其意。因戲與贈答。以意斟酌之。聊亦自取笑耳。

【訓讀】 池上に鶴あり、介然として羣せず。烏鳶雞鵝次第に嘲噪す、諸禽謂る所あるに似たり。鶴も亦時に復た一鳴す。余は治長に非ず、其意に通せず。因つて戲れに與に贈答し、意を以て之を斟酌す。聊か亦自ら笑を取るのみ。

【字解】 〔一〕 介然 特立の貌。〔二〕 治長 孔子の弟子公冶長、よく鳥語を解せりといふ。

雞贈鶴

雞鶴に贈る

一聲警露君能薄。
 一聲露を警む君が能薄く、
 五德司晨我用多。
 五德晨を司る我が用多し。
 不會悠悠時俗士。
 會せず悠悠たる時俗の士、
 重君輕我意如何。
 君を重んじ我を輕んずるは意如何。

【字解】 〔一〕警露 後集卷八、答裴相公乞鶴を見よ。〔二〕五德 雞に五德あり。韓詩外傳に、頭戴冠者文也、足傳距者武也、敵在前敢鬪者勇也、見食相告者仁也、守夜不_レ失_レ時者信也とある。〔三〕悠悠 眇邈期なき貌。

【詩意】 一聲_レ喚_レいて露を警_レむる君の能は敢て多とするには足らない。五德を具へて晨を司る俺の方が遙に效用が多い。然るに悠悠たる世俗の士が、君を重んじて俺を輕んずるのは俺の理會に苦む所である。

鶴答雞

鶴雞に答ふ

爾爭_レ伉儷泥中鬪。
 爾は伉儷を争つて泥中に鬪ひ、
 我整_レ羽儀松上棲。
 我は羽儀を整へて松上に棲む。
 不可遣他天下眼。
 他の天下の眼をして、

【字解】 〔一〕伉儷 つれあひ。夫婦相敵偶するをいふ。〔二〕羽儀 羽。易經に其羽可用爲儀とある。

却輕野鶴重家雞

却つて野鶴を輕んじて家雞を重んせしむべからず。

【詩意】 貴様等（雞を指して言ふ）は淫慾が深く互に伉儷を争つて塵土の中に鬪つてゐるが、俺は獨り羽を整へて松の上に棲まつてゐる。されば天下の人の眼をして鶴を賤んで雞を貴ばしむべきではない。

烏贈鶴

烏鶴に贈る

與君白黑太分明。
 君と白黒太だ分明なり、
 縱不相親莫見輕。
 縱ひ相親まざるも輕んせらるる莫れ。
 我每夜啼君怨別。
 我は毎に夜啼き君は別を怨む、
 玉徽琴裏忝同聲。
 玉徽琴裏りどうせい 忝うす。

【字解】 〔一〕玉徽琴裏 玉を以て徽とせる琴の中。徽とは琴の宮商高下の節を定むる標識の處をいふ。

琴曲有_二烏夜啼_一。別鶴怨。

【詩意】 君は白く僕は黒く其相違が甚だしいから、たとひ相親むことは出來ずとも、併し僕を輕んじ給ふな。僕は夜啼き（烏夜啼）君は別を怨み（別鶴怨）、共に琴曲の中に列せられてゐる間柄だから。

鶴答鳥

鶴鳥に答ふ

吾愛棲雲上華表。 吾は雲に棲むを愛して華表に上り、
 汝多攫肉下田中。 汝は多く肉を攫んで田中に下る。
 吾音中羽汝聲角。 吾が音は羽に中り汝が聲は角、
 琴曲雖同調不同。 琴曲は同じと雖も調は同じからず。

別鶴怨在羽調。 烏夜啼在角調。

【字解】 〔一〕華表 柱識なり。

搜神後記に、丁令威學道於靈虛山、後化鶴歸遼、集華表柱云、有鳥有鳥丁令威、去家千年今始歸、城郭如故人民非、何不學仙塚壘壘とある。

【詩意】 吾は雲中に棲むことを好んで華表に上るが、貴様は多くは田中に下つて肉を攫む。實に貴様は欲張りである。又吾が音は羽に中り貴様の音は角であるから、同じく琴曲の中にはあれども調子は全くちがふ。

鳶贈鶴

鳶鶴に贈る

君誇名鶴我名鳶。 君は鶴と名づくるを誇り我は鳶と名づく、
 君叫聞天我戾天。 君叫べば天に聞え我は天に戻る。
 更有與君相似處。 更に君と相似たる處あり、

【字解】 〔一〕聞天 詩經小雅鶴鳴篇に、鶴鳴于九臯、聲聞于天とある。戾天は詩經大雅旱麓篇に、鳶飛戾天、魚躍于淵とある。

飢來一種啄腥羶

飢る來れば一種腥羶を啄む。

【詩意】 君は鶴と呼ぶるを誇り我は鳶と呼ぶるを誇つてゐる。君は一たび唳けば其聲天に聞え、我は一たび飛べば天に戻る。更に又君と相似た處がある。そは飢ゑた時は一樣に腥羶を食ふことだ。

鶴答鳶

鶴鳶に答ふ

無妨自是莫相非。 自らは是とするを妨ぐるなきも相非とする莫れ、
 清濁高低各有歸。 清濁高低各、歸あり。
 鸞鶴羣中彩雲裏。 鸞鶴羣中彩雲の裏、
 幾時曾見喘鳶飛。 幾時か曾て喘鳶の飛ぶを見たる。

【詩意】 自らは是として己惚れるのはよいが他を非とするのは宜しくない。物は清濁高低各、其趣を異にするものである。されば彩雲の中に翱翔する鶴の羣の中に、未だ嘗て聲を暖らして鳴く鳶の飛ぶのを見たことはない。

鵝贈鶴

鵝鶴に贈る

律詩 池鶴八絶句・鶴答鳥・鳶贈鶴・鶴答鳶・鵝贈鶴

君因風送入青雲。君は風に因つて送られて青雲に入り、

我被人驅向鴨羣。我は人に驅られて鴨羣に向ふ。

雪頸霜毛紅網掌。雪頸霜毛紅網の掌、

請看何處不如君。請ふ看よ何の處か君に如かざる。

【詩意】君は風に吹き送られて青雲に飛び入り、我は人に追はれて鴨羣の中に入る。また我は頸も體も皆白く掌には紅の網がある。どこといつて君に劣る處はないではないか。

鶴答鵝

鶴鵝に答ふ

右軍歿後欲何依。右軍の歿後何にか依らんと欲する、

只合隨雞逐鴨飛。只合に雞に隨ひ鴨を逐うて飛ぶべし。

未必犧牲及吾輩。未だ必ずしも犧牲吾が輩に及ばず、

大都我瘦勝君肥。大都我の瘦するは君の肥ゆるに勝れり。

【詩意】王羲之の死後は誰に身を寄せるつもりだ。雞か鴨の仲間へでもはひるがよい。貴様は犧牲としても吾が輩には及ばない。我は瘦せてはゐるが、貴様の肥えてゐるのよりも勝つてゐるのだ。

【字解】〔一〕右軍 晉の王羲之 任へて右軍將軍となる。池に臨んで 書を學ぶ。池水盡く黒し。性鵝を愛し、山陰道士の爲に道德經を寫し畢り、鵝を籠にして以て歸る。

談氏小外孫玉童

談氏の小外孫玉童

外翁七十孫三歲。外翁は七十孫は三歲、

笑指琴書欲遺傳。笑つて琴書を指して傳へしめんと欲す。

自念老夫今耄矣。自ら念ふに老夫今耄せり、

因思穉子更茫然。因つて穉子を思ふに更に茫然たり。

中郎餘慶鍾羊祜。中郎が餘慶羊祜に鍾り、

子幼能文似馬遷。子幼が能文馬遷に似たり。

才與不才爭料得。才と不才と争でか料り得ん、

東牀空後且嬌憐。東牀空しき後且嬌憐す。

談氏初 逝

若レ不聞、鑿曰、正此佳婿耶、訪レ之、乃義之也、遂以女妻レ之とある。

【題義】談氏の小外孫なる玉童のことを賦した詩である。

【詩意】外祖父たる我は七十で孫は三歲だ。笑つて琴書を指して之を傳授せしめようとした。併し自ら念ふに我は今既に老耄し、孫は頑是ない子供で西も東もわからないから、傳授せんやうもない。昔

【字解】〔一〕外翁 外祖父。樂天自ら謂ふ。〔二〕老夫 樂天自ら謂ふ。〔三〕穉子 嬰兒。玉童を指して言ふ。〔四〕中郎 後漢の蔡邕 左中郎將に拜せらる。其の集を蔡中郎集といふ。羊祜は晉の人、字は叔子、蔡邕の外孫なり。〔五〕子幼 漢の楊惲、字は子幼、司馬遷の外孫なり。〔六〕東牀 婿をいふ。晉書に、太尉郗鑒使三門生求女婿于王導、導令就東廂一偏觀子弟、門生歸謂鑒曰、王氏諸少並佳、然聞信至、咸自矜持、惟一人在東牀坦腹食、獨

中郎將蔡邕の餘慶は外孫羊祜に鍾り、子幼の能文なのは外祖父司馬遷の遺傳である。されば此孫も俺の遺傳を受けて琴書を好むのであらう。才と不才とは今料り知ることは出来ないが、婿が死んでからは愚癡に愛憐してゐる。

送後集往廬山東林寺兼寄雲阜上人

後集を送り、廬山の東林寺に往かしめ、兼て雲阜上人に寄す

後集寄將何處去。

後集何の處にか寄せ將ち去らしむる、

故山迢遞在匡廬。

故山迢遞として匡廬に在り。

舊僧獨有雲阜在。

舊僧獨り雲阜の在るあり、

三二年來不得書。

三二年來書を得ず。

別後道情添幾許。

別後道情添ふること幾許、

老來筋力又何如。

老來筋力又何如。

來生緣會應非遠。

來生の緣會應に遠きに非ざるべし、

彼此年過七十餘。

彼此年過七十餘。

【字解】 〔一〕 故山 もとゐた山。迢遞は遙遠の貌。匡廬は廬山をいふ。

〔二〕 三二年來 三十二年以來。

〔三〕 道情 佛道の修養。

【題義】

自作の詩文集を廬山の東林寺に託送し、兼て雲阜上人に寄せた詩で、樂天の東林寺白氏文集記に「昔余江州司馬たりし時、嘗て廬山の長老と東林寺の經藏中に於て遠大師が諸文士と唱和せる集卷を披閱す。諸長老余が文集を請ひ亦經藏に置かんとす。唯然として心に他日之を致さんことを許す。茲に迨んで二十年に餘る。今余が前後作所の文大小合せて二千九百六十四首、六十卷と成し、編次既に畢る。藏中に納め、且二林（東林寺、西林寺）と他生の緣を結び、曩歳の志を復まんと欲す。故に自ら其鄙拙を忘れ、仍つて本寺の長老及び主藏の僧に請ふ。遠公が文集の例に依り外客に借さず、寺門を出さずんば幸甚。太和九年夏、太子賓客晉陽縣開國男太原の白居易樂天記す」とある。併し太和九年は樂天年六十四で、此詩には年過七十餘とあるから、此記の後に別に寫本を廬山に寄せたのであらう。

【詩意】 我が後集をば遙に廬山に送る。廬山の舊僧は獨り雲阜上人が生存してゐるばかりで、然も三十二年來手紙も貰はない。別後上人の佛道の修業はどの位進歩したであらう。近來年を取つて體力が衰へはしまいか。嘗て來生の緣を結ばうと約束したが、もう其時機も遠くはあるまい。上人も僕も七十を過ぎたのだから。

客有說

客即李浙東也。所說不能具錄其事。

客說あり

客は即ち李浙東なり。説く所具に其事を録する能はず。

近有人從海上廻

近ごろ人あり海上より廻る、

【字解】

〔一〕 海上 海のほと

海山深處見樓臺。海山深處樓臺を見る。

中有仙龕虛一室。中に仙龕あり一室を虚しうす、

多傳此待樂天來。多くは傳ふ此れ樂天の來るを待つと。

六七〇
り。浙東觀察府は越州に在り。故に海上といふ。〔一〕仙龕。仙洞といふが如し。仙人の住む洞窟。

【題義】客(浙東觀察使李君穆)が来て或る事を謂つたといふのである。

【詩意】近ごろ東海の濱から歸つて来た人がある。其人は海や山の深い處で樓臺などを見て来たさうだ。其人の話によれば中に仙洞があつて其一室が虚いてゐて、聞けば白樂天の來り住むのを待つてゐるのだといふ。

答客說

客の說に答ふ

吾學空門非學仙。

吾は空門を學ぶなり仙を學ぶに非るなり、【字解】〔一〕空門。佛教。〔二〕

恐君此說是虚傳。

恐らくは君が此說是れ虚傳ならん。

海山不是我歸處。

海山は是れ我が歸處ならず、

歸即應歸兜率天。

歸らば即ち應に兜率天に歸るべし。

予晚年結彌勒上生業。故云。

【題義】客の說に答へた詩である。

兜率天。佛經にいふ天の名。地上三十二萬由旬の上に在りて彌勒菩薩の住する處なりといふ。

【詩意】吾は佛教を學んでゐるので仙を學んでゐるのではないから、君の說は恐らく虚傳であらう。海や山は吾が往くべき處ではない。若し往くならば兜率天に往くであらう。

哭劉尚書夢得二首 劉尚書夢得を哭す 二首

四海齊名白與劉。

四海名を齊しうす白と劉と、

百年交分兩綢繆。

百年の交分兩ながら綢繆。

同貧同病退閒日。

同貧同病退閒の日、

一死一生臨老頭。

一死一生臨老の頭。

杯酒英雄君與操。

杯酒の英雄は君と操と、

曹公曰。天下英雄。唯使君與操耳。

文章微婉我知丘。

文章の微婉は我丘を知る。

仲尼云。後世知丘者春秋。又云。春秋之旨。微而婉也。

賢豪雖歿精靈在。

賢豪は歿すと雖も精靈在り、

應共微之地下遊。

應に微之と共に地下に遊ぶべし。

【字解】〔一〕百年。人の一生をいふ。交分は交際といふが如し。綢繆は親密なこと。〔二〕退閒。官を退いて閑居する。〔三〕君與操。曹操が劉備に對して「今天下の英雄は使君と操のみ」と謂つた。使君とは州牧の稱で劉備を指したのである。ここでは君と僕だけだといふ意に用ひたのである。〔四〕我知丘。我君を知るといふ意。〔五〕微之。元稹、字は微之。樂天竝に夢得と親交あり。太和五年に卒す。

【題義】禮部尚書劉禹錫（字は夢得）の死を哭した詩である。

【詩意】我と君とは文章を以て天下に名を齊しうし、一生親密な交際を結んだ。貧と病とを同じうして官を退いて閑居し、今老境に在つて君は歿し我は獨り生き残つた。杯酒の英雄は先づ今の世に君と我とを措いては外に人はない。文章の微妙なことは我能く君の手腕を認めてゐる。君のやうな賢豪はたとひ死んでも精神は存在するであらうから、必ず地下に於て元稹と遊ぶであらう。

（一）

（二）

今日哭君吾道孤。

今日君を哭して吾が道孤なり、

寢門淚滿白髭鬚。

寢門涙は滿つ白髭鬚。

不知箭折弓何用。

知らず箭折れて弓何の用ぞ、

兼恐唇亡齒亦枯。

兼ねて恐る唇亡びて齒も亦枯れんことを。

窅窅窮泉埋寶玉。

窅窅たる窮泉寶玉を埋め、

駸駸落景挂桑榆。

駸駸たる落景桑榆に挂る。

夜臺暮齒期非遠。

夜臺暮齒期遠きに非ず、

但問前頭相見無。

但問ふ前頭相見んや無や。

【字解】（一）寢門 儀禮に、主人迎于寢門外とあり、注に寢門内門也とある。（二）窅窅 深遠の貌。窮泉は黄泉なり。潘岳の哀永逝文に、襲窮泉兮朽壤とある。寶玉は劉禹錫の身に喩ふ。（三）駸駸 疾速の貌。落景は落日。桑榆は日の沈む處に在る木の名。晩年に喩ふ。（四）夜臺 墓穴をいふ。暮齒は老年なり。（五）前頭 この後。

【詩意】今日君の死を哭して我の孤なるを痛感し、寢門に入れば忽ち涙が吾が白髭に滿ちた。箭が折れては弓の用はなく、唇がなくなれば齒も缺ける。（君が死んでは我獨り存することは出来ないといふ喩。）君が身は奥深く黄泉の下に埋められ、我は夕日の桑榆に挂るが如く老衰した。我の死して墓穴に入るのも遠くはあるまい。ただ彼の世で君と相見ることが出来るかどうか、それが問題だ。

昨日復今辰

昨日復た今辰

昨日復今辰悠悠七十春。

昨日復た今辰、悠悠たり七十春。

所經多故處却想似前身。

經る所故處多く、却つて想ふに前身に似たり。

散秩優遊老閑居清淨貧。

散秩優遊して老い、閑居清淨にして貧し。

螺杯中有物鶴髦上無塵。

螺杯中に物あり、鶴髦上に塵なし。

解佩收朝帶抽簪換野巾。

佩を解いて朝帶を收め、簪を抽いて野巾に換ふ。

風儀與名號別是一生人。

風儀と名號と、別には是れ一生人。

【字解】（一）今辰 今日。（二）悠悠 遙なる貌。七十春は七十年。（三）散秩 散官で、一定の職守なきもの。優遊は閑暇の貌。（四）螺杯 貝殻で作つた杯。（五）鶴髦 鳥の羽毛で作つた裘。（六）野巾 野人のかぶる頭巾。

【題義】第一句を取つて題としたので、老來閑適の狀情を述べた詩である。

【詩意】昨日と過ぎ今日と過ぎて七十年の歲月を送つて來た。其間幾度となくもゐた處を經過した。回顧すれば前世の事のやうに思はれる。今や閒散の身になつて優遊自適し、清貧に安んじてゐる。杯中には酒があり鶴鬢には塵がない。佩を解き簪を抽いて野服に換へ、風體も名號も全く別人のやうになつた。

病瘡

瘡を病む

門有醫來往。庭無客送迎。

門に醫の來往するあり、庭に客の送迎するなし。

病銷談笑興。老足歎嗟聲。

病は談笑の興を銷し、老は歎嗟の聲を足す。

鶴伴臨池立。人扶下砌行。

鶴は伴つて池に臨んで立ち、人は扶けて砌を下つて行く、

脚瘡春斷酒。那得有心情。

脚瘡春酒を斷つ、那ぞ心情あるを得ん。

【題義】瘡を病みし事を述べた詩である。

【詩意】門庭には醫者が往來するのみで、送迎すべき客の訪ふ者はない。病に因つて談笑の興を殺がれ、老いては唯嗟歎するのみである。鶴に伴はれて池の邊に立ち、人に扶けられて砌を下つて行き、ただ庭前を逍遙するのみで、脚に瘡が發して春でも酒を斷つてゐるから、何の感興も湧かない。

遊趙邨杏花

遊字一

遊趙邨の杏花。字無し。

趙邨紅杏每年開。

趙邨の紅杏毎年開く、

十五年來看幾廻。

十五年來看ること幾廻ぞ。

七十三人難再到。

七十三の人は再び到り難し、

今春來是別花來。

今春來るは是れ花に別れんとして來るなり。

【題義】趙邨の杏花を觀て詠じた詩である。後集卷三の洛陽春、贈劉李二賓客を參照せよ。

【詩意】趙邨の紅杏は毎年開くので、十五年來幾廻とも知らぬ程觀てゐるから、別に珍しいこともないのだが、僕も七十三になつては來年も來られるかどうか疑はしいから來たので、謂はば花に暇乞の爲に來たやうなものだ。

刑部尙書致仕

刑部尙書もて致仕す

十五年來洛下居。

十五年來洛下に居る、

道緣俗累兩何如。

道緣俗累兩ながら何如。

迷路心廻因向佛。

迷路心廻りて因つて佛に向ひ、

【字解】〔一〕洛下。洛陽。

〔二〕道緣。佛道の方の緣故。俗累は俗人の係累。

〔三〕懸車。致仕すること。

律詩 病瘡 遊趙邨杏花

刑部尙書致仕

宦途事了是懸車。宦途事了りて是に車を懸く。

全家遯世曾無悶。全家世を遯れて曾て悶なく、

半俸資身亦有餘。半俸身を資けて亦餘あり。

唯是名銜人不會。唯是れ名銜人會せず、

毘耶長者白尙書。毘耶長者白尙書。

の半分の俸を受けるのであらう。
【五】名銜。官吏の位階を銜といふ。
【六】毘耶長者。維摩經に、爾時毘耶大城中有長者、名維摩詰とある。

【題義】會昌二年刑部尙書を以て官を罷めたことを述べた詩である。

【詩意】余は十五年來洛陽にゐた。其間道縁俗累は如何であつたかといふに、迷路に臨んでは心が佛理の信仰に向ひ、宦途の事を了つて今日官を退いたのである。全家世を遯れて少しも煩悶がなく、半俸を戴いて生活には餘裕がある。ただ世人は我が名銜を知らぬであらうが、毘耶の長者白尙書といふのがそれである。

初致仕後戲酬留守牛相公 并呈分司諸寮友

初めて致仕して後、戲れに留守牛相公に酬ひ 并せて分司諸寮友に呈す。
南北東西無所羈。南北東西羈する所なし、

【字解】〔一〕挂冠。官を辭す

挂冠自在勝分司。冠を掛けて自在分司に勝る。

看花嘗酒多先到。花を看酒を嘗むるは多く先づ到り、

拜表行香盡不知。表を拜し香を行ふは盡く知らず。

魚筍烹魚飽餐後。筍を包き魚を烹て飽餐せし後、

擁袍枕臂醉眠時。袍を擁し臂を枕にして醉眠する時、

報君一語君應笑。君に報す一語君應に笑ふべし、

兼亦無心羨保釐。兼ねて亦保釐を羨むに心なからん。

【題義】初めて官を退いて後戲れに東都留守牛僧儒に酬ひ、并せて分司東都（樂天はもと分司東都であつた）の諸寮友に呈した詩である。

【詩意】東に行かうが西に行かうが束縛せられる所はなく、辭職してから身の自由なことは分司東都たる時より勝つてゐる。花を看るとか酒を飲むとかいふ時は先づ第一に出掛け、表を拜するとか香を行ふとかいふ事には一切無關係である。筍を包いたり魚を烹たりして飽食し、袍を擁し臂を枕にして醉眠する。君にこんな事を謂つたら笑ふであらう。又靜養を羨む氣もあるまい。

ること。自在は身の自由なこと。
【一】拜表。陛下に書を奉ること。
【二】行香は文武官吏の廟に入り、香を焚いて叩拜すること。
【三】保釐。安養治正の謂なり。書經に、命畢公保釐東郊とある。

問諸親友

諸の親友に問ふ

七十人難到。過三更較稀。

七十には人到り難し、三を過ぐるは更に較稀なり。

占花租野寺。定酒典朝衣。

花を占めて野寺を租し、酒を定めて朝衣を典す。

趁醉春多出。貪歡夜未歸。

醉を趁うて春多く出づ、歡を貪りて夜未だ歸らず。

不知親故口。道我是耶非。

知らず親故の口、我を道ふこと是非か。

【字解】(一) 定酒 豫約して作るを定といふ。朝衣は官服。(二) 親故 親友。

【題義】親友に問うたといふ意。

【詩意】七十までは仲仲生きたれない。況んや僕のやうに七十三まで生きる者は極めて稀である。野寺を租借して花を作り、官服を質に入れて酒を醸し、醉を求めて春は屢外出し、歡を貪つて夜まで歸らない。吾が親友たちは我を評して何と言つてゐるであらうか。

戲問牛司徒

戲れに牛司徒に問ふ

抖擻塵纓。捋白鬚。

塵纓を抖擻して白鬚を捋り、

半酣扶起問司徒。

半酣扶け起されて司徒に問ふ。

【字解】(一) 抖擻 振刷する。塵纓は塵に汚れた冠の紐。(二) 懸 懸

不知詔下懸車後。

知らず詔下りて車を懸けし後、

醉舞狂歌有例無。

醉舞狂歌する例ありや無や。

【題義】戲れに牛司徒(司徒は官名)に問うた詩である。

【詩意】冠の塵を拂ひ白鬚をしごき、半酔つた時扶け起されて牛司徒に問うた。「僕のやうに詔あつて官を退いて後まで、狂歌醉舞した人が嘗てあるのであらうか」と。

不與老爲期

老と期するを爲さず

不與老爲期。因何兩鬢絲。

老と期するを爲さざるに、何に因つてか兩鬢絲となる。

纔應免天促。便已及衰羸。

纔に應に天促を免るべし、便ち已に衰羸に及べり。

昨夜夢何在。明朝身不知。

昨夜夢何にか在る、明朝身知らず。

百憂非我所。三樂是吾師。

百憂は我が所に非ず、三樂は是れ吾が師。

閉日常閒坐。低頭每靜思。

目を閉ちて常に閒坐し、頭を低れて毎に靜思す。

存神機慮息。養氣語言遲。

神を存して機慮息み、氣を養つて語言遲し。

行亦攜詩篋。眠多枕酒卮。

行けば亦詩篋を攜へ、眠れば多く酒卮を枕す。

律詩 問諸親友 戲問牛司徒 不與老爲期

自慙無一事。少有不安時。

自ら慙づ一事なきも、少しく安んぜざる時あるを。

【字解】 〔一〕 絲。白毛をいふ。 〔二〕 天促。わかじに。 〔三〕 三樂。列子天瑞篇に、孔子遊泰山、見榮啓期、鹿裘帶索、鼓琴而歌、孔子曰、先生何以爲樂、曰、天生萬物、惟人爲貴、吾得爲人、一樂也、男貴女賤、吾得爲男、二樂也、人生不見日月、有不免襁褓者、吾年九十、是三樂也とある。 〔四〕 存神。精神を存養すること。班固の賦に、守寂寞、而存神とある。機慮は機巧の心。 〔五〕 詩篋。詩をいれる箱。 〔六〕 酒卮。酒壺。

【題義】 第一句を取つて題にしたのである。

【詩意】 自ら好んで老と約束したわけでもないのに、何故に兩鬢が白毛になつたのであらう。纔に天死を免れるだけの人さへあるのに、我は已に老衰するまで生きた。昨夜は何處にゐたか、明朝はどうなるか、そんな事は吾が問ふ所ではない。百憂は我が關する所にあらず、三樂こそ我が師とする所である。目を閉じて閑坐し、頭を垂れて靜思し、機巧の心を去つて専ら黙して精神を練り、行く時は詩篋を攜へ、眠る時は酒壺を枕とする。自ら慙づる所は何事もないのに、時に心に不安の生ずることである。

開龍門八節石灘詩二首并序

龍門の八節石灘を開く詩、二首并に序

東都龍門潭之南有八節灘。九峭石。船筏過此。例及破傷。舟人楫師。推挽束縛。大寒之月。裸跣水中。饑凍有聲。聞於終夜。予嘗有願。力及則救之。會昌四年。有悲智僧道遇。適同發心。經營開鑿。貧者出力。仁者施財。

於戲。從古有礙之險。未來無窮之苦。忽乎一旦。盡除去之。茲吾所用。適願快心。拔苦施樂者耳。豈獨以功德福報爲意哉。因作二詩。刻題石上。以其地屬寺事。因僧故。多引僧言見志。

【訓讀】 東都の龍門潭の南に八節灘九峭石あり。船筏此を過ぐれば例として破傷に及ぶ。舟人楫師推挽束縛す。大寒の月水中に裸跣し、饑凍聲あり、終夜に聞ゆ。予嘗て願あり、力及ばば則ち之を救はんとす。會昌四年悲智僧道の遇ふあり。適同じく心を發し、開鑿を經營す。貧者は力を出し、仁者は財を施す。於戲古より礙あるの險、未來窮りなきの苦、忽乎として一旦盡く之を除き去る。茲れ吾が用ふる所、願に適ひ心を快くし、苦を抜き樂を施す者のみ。豈獨り功德福報を以て意となさんや。因つて二詩を作り、刻して石上に題す。其地の寺に屬し、事の僧に因るを以ての故に、多く僧言を引いて志を見す。

【字解】 〔一〕 東都。洛陽なり。 〔二〕 悲智。余靖の開元寺記に、釋氏之爲道、以悲智爲修者也、悲之爲言、仁之端也、智之爲言、介之徒也とある。

鐵鑿金鎚殷若雷

鐵鑿金鎚殷として雷の若し、

八灘九石劍稜摧

八灘九石劍稜摧く。

竹篙桂檝飛如箭

竹篙桂檝飛ぶこと箭の如く、

【字解】 〔一〕 殷若雷。音の高きこと雷の如きをいふ。詩經召南、殷其雷篇の傳に、殷雷聲也とある。 〔二〕 劍稜。劍の角。 〔三〕 竹篙。竹篙。

律詩 開龍門八節石灘詩二首并序

百筏千艘魚貫來。百筏千艘魚貫して來る。

振錫導師憑衆力。錫を振ふ導師衆力を憑み、

揮金退傅施家財。金を揮ふ退傅家財を施す。

他時相逐西方去。他時相逐うて西方に去らば、

莫慮塵沙路不開。慮る莫れ塵沙路開かざるを。

【題義】龍門潭の舟行を礙ぐる石を開鑿したことを述べた詩である。

【詩意】鑿や鎚の音が雷のやうに鳴り、やがて八節灘の劍の角のやうな九峭石が摧けた。篙や楫は箭の飛ぶやうに速かに動き、數多の舟が續續と航行し得るやうになつた。これは導師が協力し、引退せる太子少傅が家財を提供して成し遂げたものである。かかる功德を施したのであるから後日相繼へて極樂淨土へ行く時は、必ず佛の御利益を蒙ることが出來て、塵沙の道が開けないやうな氣遣ひはあるまい。

(一)

(二)

七十三翁且暮身。七十三翁且暮の身、

誓開險路作通津。誓つて險路を開き通津を作る。

【字解】(一) 叱灘。地名。吳船錄に、未至歸州數里、曰叱灘とある。河漢は黃河及び漢水。

夜舟過此無傾覆。夜舟此を過ぐるも傾覆するなく、

朝脛從今免苦辛。朝脛今より苦辛を免れん。

十里叱灘變河漢。十里の叱灘河漢に變じ、

八寒陰獄化陽春。八寒の陰獄陽春に化す。

八寒地獄。見佛名及涅槃經。故以八節灘爲比。

我身雖歿心長在。我が身歿すと雖も心長へに在らん、

聞施慈悲與後人。聞に慈悲を施して後人に與ふ。

【詩意】七十三の老翁(樂天時に年七十三)で明日をも知れぬ身であるが、誓つて險路を開き舟の通路を作つた。夜舟が通つても傾覆する患なく、朝涉つても苦辛を免れるであらう。十里の叱灘が變じて河漢となり、八寒地獄が化して陽春となつた。陰徳を後人に施したのだから、その報いで我が身は死んでも心は長く存するであらう。

閒坐

閒坐

婆婆放雞犬。嬉戲任兒童。婆婆として雞犬を放ち、嬉戲兒童に任す。

閒坐槐陰下。開襟向晚風。閒に槐陰の下に坐し、襟を開いて晚風に向ふ。

律詩 閒

坐

漚麻池水裏。曬棗日陽中。
麻を漚す池水の裏、棗を曬す日陽の中。
人物何相稱。居然田舍翁。
人物何にか相稱ふ、居然たる田舍翁。

【字解】(一) 婆娑。往來する貌。(二) 漚麻。麻を水に浸し其皮をむいて麻絲を作る。(三) 曬棗。棗を日にほすなり。(四) 居然。立派な。堂堂たる。

【題義】閑坐無事の状を寫した詩である。

【詩意】雞や犬を放ちて往來するに任せ、兒童をば思ふが儘に嬉戲せしめ、槐の木陰に閑坐し、襟を開いて風に當り、麻を池の水に漚し、棗を天日に曬しなどして、どこから見ても立派な田舍翁になりすましてゐる。

酬寄牛相公同宿話舊勸酒見贈

牛相公が同じく宿し舊を語り酒を勸めて贈られしに酬い寄す

每來政事堂中宿。毎に來りて政事堂中に宿す、

共憶華陽觀裏時。共に憶ふ華陽觀裏の時。

日暮獨歸愁米盡。日暮獨り歸りて米の盡きしを愁へ、

泥深同出借驢騎。泥深く同じく出で驢を借りて騎る。

交遊今日唯殘我。交遊今日唯我を殘し、

富貴當年更有誰。富貴當年更に誰か有る。

彼此相看頭雪白。彼此相看るに頭雪のごとく白し、

一杯可合重推辭。一杯重ねて推辭すべんや。

【題義】牛僧孺が樂天と同宿して昔を語り酒を勸め詩を贈つたのに寄せ酬いた作である。

【詩意】政事堂に同宿し、新進士として華陽觀に整列した時の事を憶ふ。その頃は日が暮れて家に歸りては米の盡きたことを愁へ、泥の深い時に俱に外出するに驢馬を借りて乗つたりしたものであつたが、當時の親友で今残つてゐるのは僕だけである。當時の富貴の人は今は一人も残つてゐない。今君と僕と相看るに頭髮が雪のやうになつた。敢て辭退せずに杯を重ねて憂を遣らう。

道場獨坐

道場に獨坐す

整頓衣巾拂淨牀。衣巾を整頓して淨牀を拂ふ、

一餅秋水一鑪香。一餅の秋水一鑪の香。

不論煩惱先須去。論せず煩惱先づ去らんことを須ふるを、

【字解】(一) 道場。佛を修する處。(二) 一餅。一瓶。(三) 菩提。

佛語。猶ほ正覺といふが如し。

直到菩提亦擬忘。直なに菩提ぼだいに到いたりて亦また忘わすれんことを擬なす。

朝謁久停收劍珮。朝謁てうえつひさ久とく停とどめて劍珮けんはいを收ちさめ、

宴遊漸罷廢壺觴。宴遊えんいうやう漸やく罷やめて壺觴こしやうを廢はいす。

世間無用殘年處。世間せけん無用むよう殘年ざんねんの處ところ、

祇合逍遙坐道場。祇合ただまに逍遙せうえうとして道場だうじやうに坐ますべし。

【題義】道場に獨り坐して作つた詩である。

【詩意】衣巾を整へ牀上の塵を拂ひ、一瓶の水と一罇の香とを具へ、煩惱を去るは言ふまでもなく、直に菩提に入つて萬事を忘れんと欲する。久しく劍珮を脱して朝謁もせず、酒を廢して宴席にも列しない。世間に用のない老衰の身は、逍遙として道場に坐するのが一番よい。

偶作寄朗之

偶作、朗之に寄す

歷想爲官日。無如刺史時。官くわんたるの日ひを歷想れきさうするに、刺史ししの時ときに如しくはなし。

歡娛接賓客。飽暖及妻兒。歡娛くわんごして賓客ひんかくに接せうし、飽暖ほうだん妻兒さいじに及およぶ。

自到東都後。安閒更得宜。東都とうとに到いたりてより後のち、安閒あんかん更さらに宜よろしきをえ得たり。

分司勝刺史。致仕勝分司。分司ぶんしは刺史ししに勝まさり、致仕ちしは分司ぶんしに勝まさる。

何況園林下。欣然得朗之。何なんぞ況いはんや園林えんりんの下もと、欣然きんぜんとして朗之らうしを得うるをや。

仰名同舊識。爲樂即新知。名なを仰あげば同おなじく舊識きうしき、樂たのしみを爲なすは即すなはち新知しんち。

有雪先相訪。無花不作期。雪ゆきあれば先まづ相訪あひとひ、花はななくして期きすることをな作さす。

鬪醜乾釀酒。誇妙細吟詩。鬪醜ちゆうちうはか乾釀かんじやうの酒さけ、妙めうに誇ほこる細吟さいぎんの詩し。

里巷千來往。都門五別離。里巷りかう千ち來往らいわうし、都門ともん五いつたび別離べつりす。

岐分兩回首。書到一開眉。岐分きぶんして兩ふたつながら首かうべを回めぐらし、書到しよたりて一ひとたび眉まゆを開ひらく。

葉落槐亭院。氷生竹閣池。葉はは落おつ槐亭くわいていの院いん、氷こほりは生しやうず竹閣ちくかくの池いけ。

雀羅誰問訊。鶴鷺罷追隨。雀羅じやくら誰たれか問訊もんじんせん、鶴鷺かくしやう罷や追隨つゐを罷やむ。

身與心俱病。容將力共衰。身みと心こころと俱ともに病やみ、容かたちと力ちからと共ともに衰おとろふ。

老來多健忘。唯不忘相思。老來らうらい多おほく健忘けんぼうすれども、唯ただ相思あひおもふを忘わすれず。

【字解】(一) 分司。官名。分司東都。(二) 致仕。官を辭して退くこと。(三) 乾釀酒。水を入れざる酒。(四) 雀羅。雀を捕ふる網。漢書に、下邳翟公爲廷尉、賓客填門、及廢門外可設雀羅云云とある。問訊は訪問する。(五) 鶴鷺。鶴の羽毛で作つた裘。(六) 健忘。よく忘れる。

【題義】皇甫朗之寄せた詩である。

【詩意】官吏務をしてゐた當時を回想するに、刺史時代が一番よかつた。賓客に接つて相歡娛し、妻子も飽食暖衣してゐられた。刺史を罷めて東都洛陽に来てからは、安閑更に宜しきを得、分司の職は刺史に勝り、致仕して後は更に分司に勝ることを悟つた。況んや園林の下に高臥し欣然として君と相伍することが出来るのであるから。君は名に於ては舊相識であるが、樂を俱にする點では新知である。雪が降つたと言つては先づ訪ひ、花がなくなつたと言つては期會を罷め、互に酒の醴を鬪はし詩の妙を誇り、里巷には各千度も往來し、都門に五回相別れた。手を分つた時は互に首を回らして相慕ひ、手紙が來れば始めて愁眉を開いた。今や槐亭の庭に木葉落ち、竹閣の池には氷の張る時節になつた。誰一人吾が閑居を訪ふ者なく、鶴警を着て君を訪ふこともない。身も心も俱に病み、形も力も共に衰へ、老いては物を忘れがちであるが、どういふものか君を思ふことは少しも忘れない。

狂吟七言十四韻

狂吟七言十四韻

亦知世是休明世。
自想身非富貴身。
但恐人間爲長物。

亦知る世は是れ休明の世、
自ら想ふ身は富貴の身に非ず。
但恐る人間長物となるを、

【字解】

【一】休明 美明といふが如く。平に治まること。【二】人間 世間。長物は無用の長物。【三】遺民 棄てられた民。【四】三友 詩と琴と酒。後集卷三、北窓三友を見よ。【五】雙林 寺をいふ。【六】性海 性質。五燈會元に、祖曰、汝化性海得否、曰、何謂性海、特未嘗知、祖即爲說性海曰、山河大地、皆依建立、三昧六通、由玆發現とある。【七】心田 心なり。梁の簡文帝の文に、澤雨無偏、心田受潤とある。【八】香山 洛外の山の名。山に香山寺あり。【九】梓澤 晉書に、石崇有別館、在河陽之金谷、一名梓澤とある。【一〇】殷勤 親切なり。【一一】交親 親友。【一二】貫 錢を貫くサシ。【一三】洛堰 洛水の堰。【一四】遊 村の名であらう。前の遊趙村杏花を見よ。【一五】七旬 七十。【一六】微俸 微俸なり。まぐれさいはひ。【一七】東都 洛陽。時に樂天は洛陽にゐた。

不如林下作遺民。
遊依二室成三友。
住近雙林當四鄰。
性海澄淨平少浪。
心田灑掃淨無塵。
香山閒宿一千夜。
梓澤連遊十六春。
是客相逢皆故舊。
無僧每見不殷勤。
藥停有喜閒銷疾。
金盡無憂醉忘貧。
補綻衣裳媿妻女。
支持酒肉頼交親。
俸隨日計錢盈貫。

如かや林下遺民と作るに。
遊は二室に依りて三友を成し、
住は雙林に近く四鄰に當つ。
性海澄淨平かにして浪少く、
心田灑掃淨くして塵なし。
香山閒に宿す一千夜、
梓澤連に遊ぶ十六春。
是客相逢ふ皆故舊、
僧は見る毎に殷勤ならざるはなし。
藥停めて喜あり閒に疾を銷し、
金盡きて憂なく酔うて貧を忘る。
衣裳を補綻して妻女に媿ぢ、
酒肉を支持して交親に頼る。
俸は日に隨つて計り錢貫に盈ち、

祿逐年支粟滿困。

祿は年を逐うて支へ粟困に滿つ。

尙書致任。請半俸百斛。亦五十千。歲給祿粟二千可爲。

洛堰魚鮮供取足。

洛堰魚鮮にして供足るを取り、

遊邨果熟饋爭新。

遊邨果熟して饋新なるを爭ふ。

詩章人與傳千首。

詩章は人與に千首を傳へ、

壽命天教過七旬。

壽命は天七旬を過ぎしむ。

點檢一身微倖事。

一身微倖の事を點檢するに、

東都除我更無人。

東都我を除いて更に人無し。

【題義】 閒適の狀を述べた七言二十八句の詩である。

【詩意】 今の世は休明の世であるのに、富貴の身になれないのは自ら憐む所である。世上に在りて無用の長物となるよりは、寧ろ林下に高臥して遺民となる方がよい。詩琴酒の三友と交遊し、寺の近くに居を構へ、心は常に穩かで汗がない。屢香山寺にも參籠し、十六年間梓澤にも遊んだ。相逢ふ客は皆故舊で、相見る毎に僧は親切になる。疾が癒えて藥を停めたのが嬉しく、酔うて貧を忘れ金のないのが氣にならない。妻女を煩はして著物のつぎはぎをさせ、酒肉を攜へて親友を訪ふ。俸祿を頂戴してゐるから生活に餘裕があり、洛水の鮮魚は食ふに足り、遊村の新杏は茹ふに足り、吾が詩をば世多く傳唱し、壽命は七十を越してゐる。一身を點檢して見るのに、廣い洛陽にも俺ほど徳倖な男はいやうだ。

喜裴濤使君攜詩見訪醉中戲贈

裴濤使君の詩を攜へて訪はれしを喜び、醉中戲れに贈る

忽聞扣戶醉吟聲。

忽ち戸を扣き醉吟する聲を聞き、

不覺停杯倒屣迎。

覺えず杯を停め屣を倒にして迎ふ。

共放詩狂同酒癖。

共に詩狂を放にして酒癖を同じうす、

與君別是一親情。

君と別にはれ一親情。

【題義】 刺史裴濤の詩を攜へて來り訪ひしを喜び、酔うて戲れに贈つた詩である。

【詩意】 門を扣き醉吟する聲を聞き、杯を抛ち急いで出迎へた。それから君と詩酒の狂を放にし、又一種特別な親交を結んだ。

得潮州楊尙書繼之書并詩以此寄之

潮州の楊尙書繼之の書并に詩を得、此を以て之に寄す

律詩 喜裴濤使君攜詩見訪醉中戲贈 得潮州楊尙書繼之書并詩以此寄之

詩情書意兩殷勤。

詩情書意兩ながら殷勤、

來自天南瘴海濱。

天南瘴海の濱より來る。

親覩銀鈎還啓齒。

親しく銀鈎を觀て還た齒を啓き、

細吟瓊什欲霑巾。

細に瓊什を吟じて巾を霑さんと欲す。

鳳池隔絕三千里。

鳳池隔絶すること三千里、

蝸舍沈冥十五春。

蝸舍沈冥すること十五春。

唯有新昌故園月。

唯新昌故園の月のみあり、

至今分照兩鄉人。

今に至るまで分照す兩郷の人。

鳳池屬「楊相」也。
蝸舍自謂也。

【字解】〔一〕殷勤 丁寧親切な

こと。〔二〕天南瘴海濱 潮州を指

して言ふ。潮州は南海の濱に在り炎

瘴の地である。〔三〕銀鈎 書法の

巧なるを狀す。書苑に、晉索靖草書

絶代、名銀鈎蠶尾とある。啓齒

は口を開くなり。舊唐書に、酒杯流

行、發言啓齒とある。〔四〕瓊什

立派な詩。〔五〕鳳池 鳳凰池とも

いふ。中書省の在る處。唐宋人の詩

に多く宰相をいふ。楊嗣復はもと宰

相であつた。〔六〕蝸舍 小屋をい

ふ。沈冥は沈淪するなり。〔七〕新

昌 洛陽の里の名。故園は故郷。

【題義】潮州刺史に貶せられてゐる前の戸部尙書楊嗣復、字は繼之から手紙と詩とを寄せられたので此詩を作つて寄せたのである。

【詩意】君が潮州から遙遙寄せられた詩と書狀とを見るに、如何にも情味が深い。親しく君の書風に接して口を開いて誦し、仔細に美詩を吟じて手巾を沾した。君は都を距ること三千里外に貶せられ、僕は小屋に沈淪すること十五年である。ただ昔に變らぬ新昌里の明月が遠く離れ住む僕等兩人を照し

てゐる。

宿府池西亭

府池の西亭に宿す

池上平橋橋下亭。

池上の平橋橋下の亭、

夜深睡覺上橋行。

夜深け睡覺めて橋を上つて行く。

白頭老尹重來宿。

白頭の老尹重ねて來宿すれば、

十五年前舊月明。

十五年前舊月明かなり。

【字解】〔一〕老尹 樂天自ら謂

ふ。樂天はもと河南尹であつた。

【題義】河南尹の役所の池の西に在る亭に宿した詩である。後集卷十に府西池と題する詩がある。

【詩意】池の上に平橋があり橋の下に亭がある。夜深に目が覺めたので橋の邊を散歩した。白髪の老尹が久し振りで來て宿つたら、十五年前の舊月が昔ながらに輝いてゐる。

閒眠

閒眠

暖牀斜臥日曛腰。

暖牀斜に臥せば日腰に曛す、

一覺閒眠百病銷。

一覺閒眠百病銷す。

盡日一餐茶兩椀。

盡日一餐茶兩椀、

【字解】〔一〕暖牀 暖かな寢臺。

〔二〕盡日 終日。

更無所要到明朝。更に要むる所なくして明朝に到る。

【題義】 閒眠の状を述べた詩である。

【詩意】 暖かな寢臺に斜に臥してゐると夕日が腰のあたりを照し、一たび眠が覺めると忽ち百病が癒えたやうに思ふ。一日一食を取り二椀の茶を飲むのみで、何も要求する所なく明朝に到るのである。

楊柳枝詞

楊柳枝詞

一樹春風千萬枝。

一樹春風千萬枝、

嫩於金色軟於絲。

金色よりも嫩に絲よりも軟なり。

永豐西角荒園裏。

永豐の西角荒園の裏、

盡日無人屬阿誰。

盡日人無し阿誰に屬せん。

【字解】 〔一〕 永豐 洛陽の坊の名。 〔二〕 盡日 終日。 阿誰は誰。

【題義】 雲溪友議に、「居易妓樊素あり、善く歌ふ。小蠻善く舞ふ。嘗て詩を爲りて曰く、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰と。年既に高邁にして小蠻方に豊豔なり。楊柳詞に因つて以て意を託すと云ふ」とある。

【詩意】 春風が千萬條の柳の枝を弄してゐる。其枝は黄金の色よりも嫩かに白絲よりも軟かである。

獨り淋しく永豊坊の西の角の荒園の中に在つて、終日賞翫する人もなく手持無沙汰に立つてゐる。

詔取永豊柳植禁苑感賦

詔して永豊の柳を取り禁苑に植るしむ。感じて賦す

一樹衰殘委泥土。

一樹衰殘して泥土に委す、

雙枝榮耀植天庭。

雙枝榮耀天庭に植るしむ。

定知玄象今春後。

定めて知る玄象今春の後、

柳宿光中添兩星。

柳宿光中兩星を添へんことを。

【字解】 〔一〕 永豐 前の詩に見ゆ。 〔二〕 衰殘 衰傷といふが如し。 〔三〕 天庭 天帝の庭。 〔四〕 玄象 天象。 〔五〕 柳宿 星の名。二十八宿の一。亦鶉火といふ。

【題義】 雲溪友議に、「宣宗の朝、國樂、前詞（前の樂天の楊柳枝詞）を倡ふ。上問ふ、誰の作ぞ、永豊とは何處に在りやと。左右具に以て對ふ。遂に東使に因り命じて永豊の柳兩枝を取り、禁中に植るしむ。居易上の其名を知り且風雅を好尚するに感じ、又詩一章を爲る」とある。

【詩意】 一株の衰柳が泥土の中に棄てられてゐたが、一たび榮耀を蒙つて二本の枝が天帝の庭に植ゑられた。今春以後は天象が變つて柳宿の中に更に二個の星が加はるであらう。

齋居春久感事遣懷

齋居春久しく事に感じ懷を遣る

律詩 楊柳枝詞

詔取永豊柳植禁苑感賦

齋居春久感事遣懷

齋戒坐三旬。笙歌發四鄰。

齋戒して坐すること三旬、笙歌四鄰に發す。

月明停酒夜。眼闇看花人。

月は明かなり酒を停むる夜、眼は闇し花を看る人。

賴學空爲觀。深知念是塵。

學に頼つて空を觀となし、深く知る念は塵なるを。

猶思閒語笑。未忘舊交親。

猶ほ閒に語笑せんことを思ひ、未だ舊交親を忘れず。

久作龍門主。多爲兔苑賓。

久しく龍門の主となり、多く兔苑の賓となる。

水嬉歌盡日。雪宴燭通晨。

水嬉して歌ふこと盡日、雪宴燭通晨。

事事皆過分。時時自問身。

事事皆分に過ぎ、時時自ら身に問ふ。

風光拋得也。七十四年春。

風光拋ち得たり、七十四年の春。

【字解】

龍門 洛陽の南に在る山の名。兔苑 梁園ともいふ。漢の梁の孝王の園なり。漢の枚乘に梁王兔園賦あり。梁の孝王は鄒陽・枚乘等の文士を保護した。水嬉 舟遊。廣博物志に、夫差作天池、造青龍舟、日與西施爲水嬉とある。

【題義】

春久しく齋戒し事に感懐を述べた詩である。

【詩意】

齋戒して三十日間静坐し、四鄰に聞える笙歌の聲を聽いてゐる。月は明かであるが酒を停めては風情がなく、花は咲いても目が不自由だからつまらない。佛理を學んで萬事の空なるを悟り、深く心の塵に汗れてゐることを知つた。猶ほ閒に乗じて笑語せんことを思ひ、昔の友達を忘れかねる。

久しく主人役になつて龍門に遊んで終日舟遊をしたり、有力者の賓となり雪見の宴に列して夜を明したりした。事ごとに身分に過ぎたことばかりして來たので、時時自ら問ふ、七十四年の風光を可惜夢の間に棄擲してしまつたではないかと。

每見呂南二郎中新文。輒竊有所歎惜。因成長句以詠所懷。

呂南二郎中の新文を見る毎に、輒ち竊に歎惜する所あり。因つて長句を成して以て所懷を詠す。

雙金百鍊少人知。

雙金百鍊人知ること少し、

縱我知君徒爾爲。

縱ひ我君を知るも徒爾たり。

望梅閣老無妨渴。

望梅閣老は渴を妨ぐるなく、

畫餅尙書不救飢。

畫餅尙書は飢を救はず。

白日回頭看又晚。

白日頭を回らして看ること又晚く、

青雲舉足躡何遲。

青雲足を舉げて躡むこと何ぞ遅き。

【字解】

雙金 雙南金なり。范仲淹の賦に、雙南之價彌高とある。呂南二郎中に喩ふ。望梅閣老 樂天自ら謂ふ。魏の武帝の軍士道を失ひ大に渴す。水なし、白して曰く前に梅林あり渴を止むべしと。士卒之を聞き口皆水を出す。これ望梅止渴の故事、世説に見ゆ。畫餅尙書 樂天自ら謂ふ。樂天は刑部尙書を以て致仕す。三國志に、選舉莫取有姓名、名如畫餅地作餅、

律詩 每見呂南二郎中新文輒竊有所歎惜因成長句以詠所懷

壯年可惜虛銷擲。壯年惜むべし虚しく銷擲し、
遣把閒杯吟詠詩。閒杯を把つて詩を吟詠せしむるを。

不可嘆也とある。これ畫餅充飢の故事。〔四〕白日 壯年時代を指して言ふ。

【題義】 呂・南二郎中の新作の詩を見る毎に、其妙を歎惜しないことはない。因つて此詩を以て感懷を述べたといふのである。

【詩意】 二郎中は百鍊の雙金の如き秀才であるが世人は其眞價を知らず、俺は知つてはゐるが拔擢してやる權力を持たないからだめだ。梅を望んでも渴を止める役に立たず、餅を畫いても飢を充す役に立たないと同じである。壯年の頃に知つたらと思つて、徒らに相見るの晩きを惜み、自分がもつと榮達してゐたらと残念に思ふのみである。惜しことに壯年時代をあだに過してしまつて、今はただ閒杯を把つて二郎中の詩を吟ずるばかりで、どうしてやることも出来ない。

歡喜二偈

歡喜二偈

得老加年誠可喜。老を得年を加へたるは誠に喜ぶべく、

當春對酒亦宜歡。春に當り酒に對するも亦歡ぶべし。

心中別有歡喜事。心中別に歡喜する事あり。

開得龍門八節灘。開き得たり龍門の八節灘。

【字解】 〔一〕龍門 洛陽の南に在る山の名。八節灘は前の開龍門八節石灘詩を見よ。

【題義】 心の歡を述べた詩である。偈とは佛家の詩をいふ。

【詩意】 段段老いて年の加はるのも喜ばしく、春に當つて酒を飲むのも歡ばしい。併し我が心には別に歡がある。それは龍門の八節灘の石を開いて舟行に便したことである。

〔一〕

〔二〕

眼暗頭旋耳重聽。

眼暗く頭旋り耳重聽す、

唯餘心口尙醒醒。

唯餘す心口尙ほ醒醒たり。

今朝歡喜緣何事。

今朝歡喜何事にか縁る。

禮徹佛名百部經。

禮し徹る佛名百部の經。

【字解】 〔一〕頭旋 目がまはる。重聽は聾なり。〔二〕醒醒はつきりしてゐること。〔三〕佛名 經文の名。

【詩意】 目は見えず頭はぐらつき耳も聾になつて、今でもはつきりしてゐるのは口と心とだけだ。今朝は殊に喜ばしいことがある。それは百部の佛名經を念じ畢つたことである。

閒居貧活計

閒居貧活計

冠蓋閒居少。簞瓢陋巷深。

冠蓋閒居少く、簞瓢陋巷深し。

稱家開戶牖。量力置園林。

家に稱へて戸牖を開き、力を量りて園林を置く。

律詩 歡喜二偈 閒居貧活計

儉薄身都慣。營爲力不任。

儉薄身都て慣れ、營爲力任へず。

飢烹一斤肉。暖臥兩重衾。

飢ゑて一斤の肉を烹、暖かに兩重の衾に臥す。

尊有陶潛酒。囊無陸賈金。

尊には陶潛の酒あり、囊には陸賈の金なし。

莫嫌貧活計。更富即勞心。

貧活計を嫌ふ莫れ、更に富まば即ち心を勞せん。

【字解】 〔一〕冠蓋。高位高官の人をいふ。〔二〕簞瓢。貧者をいふ。論語に、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、云云とある。〔三〕戶牖。戸やマド。〔四〕陶潛。晉の陶淵明。〔五〕陸賈。漢の高祖の臣。

【題義】 閉居して貧生活に甘んじてゐることを述べた詩である。

【詩意】 高貴の人は閉居することは出来ないが、貧賤の身は陋巷に臥してゐられる。家相當に戸や牖を設け、力を量つて園林を置き、儉薄に慣れて苦痛を感じないが、すべて事を營む力はない。飢ゑて一斤の肉を烹、暖かに重衾を擁して臥し、囊中に錢はないが樽には酒がある。結句貧乏暮しの方がよい。富めば却つて心を勞せねばならないから。

贈諸少年

諸少年に贈る

少年莫笑我蹉跎。

少年笑ふ莫れ我が蹉跎たるを、

聽我狂翁一曲歌。

我が狂翁一曲の歌を聽け。

【字解】 〔一〕蹉跎。躓くこと。榮達しないこと。

入手榮名取雖少。

手に入る榮名は取ること少しと雖も、

關心穩事得還多。

心に關する穩事は還つて多きを得たり。

老慙退馬露芻秣。

老いて慙づ退馬の芻秣に露ふを、

〔一〕退馬。役に立たなくなつた馬。芻秣は馬の食糧。

高喜歸鴻脫弋羅。

高く喜ぶ歸鴻弋羅を脱するを。

官給俸錢天與壽。

官は俸錢を給し天は壽を與ふ、

些些貧病奈吾何。

些些たる貧病吾を奈何せん。

〔二〕弋羅。いぐるみと網。

【題義】 少年輩に贈つた詩である。

【詩意】 少年諸子よ、吾が沈滞してゐることを笑ふな。我が一曲の狂歌を聽くがよい。榮名を取ることは少ないが、その代りに心は常に安穩だ。老いて官を退いても猶ほ俸錢を貰ひ（現職の半俸を受く。前の狂吟七言十四韻の自注を見よ）すべて事に與らないから災禍を免れてゐる。かくの如く官は俸錢を與へ天は壽命を與へてゐるのだから、少し位の貧や病は意とするに足らないのだ。

感所見

見る所に感ず

巧者焦勞智者愁。

巧者は焦勞し智者は愁ふ、

【字解】

〔一〕山木。莊子山木篇

愚翁何喜復何憂。 愚翁は何をか喜び復た何をか憂へん。

莫嫌山木無人用。 嫌ふ莫れ山木人の用ふるなきを、

大勝籠禽不自由。 大に籠禽の自由ならざるに勝る。

網外老雞因斷尾。 網外の老雞は尾を斷つに因り、

盤中鮮膾爲吞鈎。 盤中の鮮膾は鈎を吞むが爲なり。

誰人會我心目中事。 誰人か我が心中の事を會せん、

冷笑時時一掉頭。 冷笑して時時一たび頭を掉ふ。

【題義】 見る所に感じて作つた詩である。

【詩意】 巧者は心を勞し智者は愁へるが、俺のやうな愚者は喜もなければ憂もない。山木は何の役にも立たないから斬られずにあるので、籠の鳥の自由を奪はれてゐるのよりもましである。老雞は自ら美しい尾を斷つて網の中に入れられることを免れ、皿の中の膾は慾に驅られて鈎を吞んだ報いである。結句何の取柄もないのが身の幸なのだ。世人は吾が心中を知らないから、冷笑しては頭を掉つてゐる。

寄黔州馬常侍

黔州の馬常侍に寄す

閒看雙節信爲貴。

閒に雙節を看れば信に貴しとなすも、

樂飲一杯誰與同。

樂んで一杯を飲み誰と與にか同じうせん。

可惜風情與心力。

惜むべし風情と心力と、

五年拋擲在黔中。

五年拋擲して黔中に在り。

【題義】 左散騎常侍黔州觀察使馬植に寄せた詩である。

【詩意】 觀察使といへば誠に貴いけれども、與に酒を飲んで樂む相手もないのは氣の毒である。君の風情と心力とをば、むざむざ黔州といふ片田舎へ五年間も棄てて置くのは惜いものだ。

和李相公留守題漕上新橋六韻

同用二 黎字

李相公留守の漕上の新橋に題する六韻に和す 字を用ふ。

選石鋪新路安橋壓古堤。

石を選んで新路に鋪き、橋を安んじて古堤を壓す。

似從銀漢下落傍玉川西。

銀漢より下るに似、落ちて玉川の西に傍ふ。

影定闌干倒標高華表齊。

影定まりて闌干倒れ、標高くして華表齊し。

烟開虹半見月冷鶴雙棲。

烟開いて虹半見はれ、月冷かにして鶴雙び棲む。

律詩 寄黔州馬常侍 和李相公留守題漕上新橋六韻

【字解】 (一) 雙節 小學紺珠に

節度使賜雙旌雙節、行則建節樹二六 藪、とある。觀察使と節度使とを一 人が兼れるのが普通である。

に、莊子行於山中、見大木枝葉盛 茂、伐木者止其旁而不取也、問 其故、曰、無所可用、莊子曰、此 木以不材得終其天年云云とあ る。(二) 斷尾 左傳昭公二十二 年に、賓孟適郊見雉雞自斷其尾 問之、侍者曰、自憚其穢也とあ る。(三) 盤中 皿の中。鮮膾は新 鮮な切肉。鈎は鈎針。

材映夔龍小。功嫌元凱低。

材映じて夔龍小に、功嫌はしく元凱低し。

從容濟世後。餘力及黔黎。

從容として世を濟ふの後、餘力黔黎に及ぶ。

【字解】

【一】漕上。運河のほとり。【二】銀漢。あまのがは。温庭筠の詩に、銀漢横空萬象秋とある。【三】玉川。洛水を指して言ふか。【四】關干。橋のてすり。【五】標。柱。華表は交衢に立ててある柱識。【六】夔龍。舜の三名臣の名。【七】元凱。八元八凱。左傳に高辛氏有才子八人、謂之八元、高陽氏有才子八人、謂之八凱とある。【八】黔黎。人民なり。

【題義】

李相公留守（前に見ゆ）の運河の上に新に架けた橋に題した六韻十二句の詩に和したのである。

【詩意】

運河が天河の天上から落ちたやうに洛水の西に傍うて流れる。その古堤を壓して橋を架け、石を選んで新道に鋪いた。橋の影が水に映つて倒になり、橋の柱が道傍の華表と齊しく立つてゐる。橋の様は烟霧が開けて虹の現れたやうで、月の牙ゆる時に鶴が來り棲むであらうと思はれる。さて此橋を架けた李相公の材は古今に照映して夔龍にもまさり、功は寧ろ八元八凱の方が劣るであらう。既に宰相として一世を濟ひ、更に餘力を以て橋梁を通じて民利を謀つた。誠に賢宰相と謂ふに足る御方である。

閒居

閒居

風雨蕭條秋少客。

風雨蕭條として秋客少く、

【字解】

【一】蕭條。淋しき貌。

門庭冷靜晝多關。

門庭冷靜にして晝多くは關す。

金羈駱馬近賣却。

金羈の駱馬近ごろ賣却し、

羅袖柳枝尋放還。

羅袖の柳枝尋いで放還す。

書卷略尋聊取睡。

書卷略尋ねて聊か睡を取り、

酒杯淺把粗開顏。

酒杯淺く把つて粗顔を開く。

眼昏入夜休看月。

眼昏くして夜に入りて月を見るを休め、

脚重經春不上山。

脚重くして春を経て山に上らず。

心靜無妨喧處寂。

心靜にして喧處の寂を妨ぐるなく、

機忘兼覺夢中閒。

機忘れて兼ねて夢中の閒を覺ゆ。

是非愛惡銷停盡。

是非愛惡銷停し盡し、

唯寄空身在世間。

唯空身を寄せて世間に在り。

【題義】

閒居の状を述べた詩である。

【詩意】

雨風が淋しく降りそいで秋でも客が少く、門庭も物靜で晝も門を閉ぢて置く。近ごろは馬も賣拂ひ、愛妓にも暇を出した。時折書物を見るがそれも眠を催すが爲で、少量の酒を飲んで愁顔を

【字解】

【一】金羈。黄金のくつわ。駱馬は白馬黒鬣なるもの。詩經に我馬維駱とある。後集卷十六、病中詩中の賣駱馬を見よ。

【二】羅袖。薄絹の袖。柳枝は樂天の妓の名。後集卷十六、病中詩中の別柳枝を見よ。

【四】

機忘。機巧の心を失ふこと。

開き、眼が十分に見えないので夜も月を看ることをやめ、脚が重いので春でも山に上らない。ただ心が静だから喧騒の地にゐても寂寞を感じ、機巧の心を棄てたから夢中の閑なるを覺える。是非愛憎を銷盡して、空身を世間に寄せてゐる。

新秋夜雨

新秋の夜雨

蟋蟀暮啾啾。光陰不少留。

蟋蟀暮に啾啾たり、光陰少くも留まらず。

松檐半夜雨。風幌滿牀秋。

松檐半夜の雨、風幌滿牀の秋。

曙早燈猶在。涼初簟未收。

曙早くして燈猶は在り、涼初めに簟未だ收めず。

新晴好天氣。誰伴老人遊。

新晴天氣好し、誰か老人に伴つて遊ばん。

【字解】 一 啾啾 蟋蟀の鳴く聲。 二 風幌 風の吹き込むとばり。

【題義】 秋の初の雨の夜の詩である。

【詩意】 蟋蟀が夕暮に啾啾と鳴いてゐる。月日の立つのは早いもので忽ち秋になつた。夜半に雨が松下の檐に降りそそぎ、秋風が幌を吹いて寢臺に入る。やがて夜が明けたが燈が尙ほ残り、秋の初なのでまだ簟も片附けない。今朝は雨があがつて天氣も晴れた。誰か俺に伴つて散歩でもする者はあるまいか。

春眠

春眠

枕低被暖身安穩。

枕低く被暖かにして身安穩なり、

日照房門帳未開。

日は房門を照して帳未だ開かず。

還有少年春氣味。

還た少年春の氣味あり、

時時暫到睡中來。

時時暫く到りて睡中に來る。

【題義】 春眠の狀を述べた詩である。

【詩意】 枕が低く夜著が暖かで身が安泰である。旭が寢室の入口にさし込んで來たがまだ帳を開かない。年は取つても若い時の氣持が尙ほ残つてゐて、時時睡中に蘇つて來る。

【字解】 一 被 夜具。

二 房門 寢室の入口。

喜老自嘲

老を喜んで自ら嘲る

面黑頭雪白。自嫌還自憐。

面黒くして頭雪のごとく白し、自ら嫌ひ還た自ら憐む。

毛龜著下老。蝙蝠鼠中仙。

毛龜著下に老い、蝙蝠鼠中の仙。

名籍同逋客。衣裝類古賢。

名籍逋客に同じく、衣裝古賢に類たり。

裘輕被白氎。靴暖蹋烏氎。

裘軽くして白氎を被り、靴暖かにして烏氎を蹋む。

周易休開卦陶琴不上絃。

周易卦を開くを休め、陶琴絃を上せず。

任從人棄擲自與我周旋。

人の棄擲するに任從せ、自ら我と周旋す。

鐵馬因疲退鉛刀以鈍全。

鐵馬は疲るるに因つて退き、鉛刀は鈍を以て全し。

行開第八秩可謂盡天年。

行くゆく第八秩を開かんとす、天年を盡せりと謂ふべし。

時俗謂二十七已上。爲レ開第八秩。

【字解】

【一】毛龜。大龜。著は草の名。樂天の詩に、松枝上鶴著下龜、千年不死仍無病とある。【二】連客。世を避けた隱者。【三】白氈。白い細毛布。【四】烏氈。黒い毛氈。【五】陶琴。陶淵明は無絃琴を弾いたといふ。【六】鐵馬。士馬強悍、鐵の堅銳なるが如きをいふ。【七】鉛刀。鉛で作つた刀。史記に莫邪爲鉛刀、鉛刀爲鉛とある。

【題義】

老を喜んで自ら嘲つた詩である。

【詩意】

老いて顔色は黒くなり頭髮は雪のやうになつた。自ら嫌ひ又自ら憐んでゐる。著下に老いた毛龜か、鼠中の仙たる蝙蝠にも譬へられよう。今や名籍を除かれて隱者同様になり、白い毛布の裘をまとひ、黒い毛氈の靴をはき、古賢のやうな身装をしてゐる。周易を開いても卦を立てて見るでもなく、陶淵明のやうに無絃琴を弾きなどして、世間の人の棄擲するに甘んじ、獨り自ら徘徊する。鐵馬は勇悍だから疲れて退くが、僕のやうな鈍刀は役に立たないから、いつまでも折れることはない。かくていよいよ八十の坂に登らうとする。先づは天壽を全うした者と謂つてよからう。

河陽石尙書破廻鶻迎貴主。過上黨射鷲斯爲繪畫爲圖。猥蒙見示稱歎不足。以詩美之。

河陽の石尙書廻鶻を破り貴主を迎へ、上黨を過ぐるとき鷲を射る。繪畫して圖を爲り、猥りに示さるるを蒙る。稱歎して足らず、詩を以て之を美す。

塞北虜郊隨手破。

塞北の虜郊手に隨つて破り、

山東賊壘掉鞭收。

山東の賊壘鞭を掉つて收む。

烏孫公主歸秦地。

烏孫公主秦地に歸り、

白馬將軍入潞州。

白馬將軍潞州に入る。

劍拔青鱗蛇尾活。

劍青鱗を抜いて蛇尾活し、

弦抨赤羽火星流。

弦赤羽を抨ちて火星流る。

須知鳥目猶難漏。

須らく知るべし鳥目猶ほ漏れ難きを、

縱有天狼豈足憂。

縱ひ天狼あるも豈憂ふるに足らんや。

畫角三聲刁斗曉。

畫角三聲刁斗の曉、

尙書將入潞府。偶逢水鳥驚鷲。引弓射之。一發中目。三軍歡躍。其事上聞。詔下美之。

律詩 河陽石尙書破廻鶻迎貴主過上黨射鷲斯爲繪畫爲圖猥蒙見示稱歎不足以詩美之

【字解】

【一】烏孫公主。烏孫は漢の西域の國名。太和公主に比す。秦地は中國をいふ。【二】白馬將軍。魏の將龐德善く戰ふ。嘗て關羽を射て額に中つ。徳常に白馬に乗る。羽の軍之を白馬將軍といふ。石尙書に比す。潞州は今の山西省長治縣。【三】青鱗。孟郊の詩に、旗影卷赤電、劍鋒匣青鱗とある。【四】赤羽。孔子家語に、孔子登農山之上、喟然而歎、子路進曰、由願得赤羽若日、白羽若月、鐘鼓之聲、上震于天、旌旗繽紛、下蟠于地、由當一隊而敵之、必也攘地千里、秦旂執敵とある。火星は星の名。【五】天狼。

清商一部管絃秋。清商一部管絃の秋。

他時麟閣圖勳業。他時麟閣に勳業を圖せば、

更合何人居上頭。更に合に何人か上頭に居るべき。

星の名。楚辭に擧げ長矢一兮射天狼とある。【六】畫角 軍中にて吹く一種の笛。刁斗は銅を以て作り、晝は飲食物を炊ぎ、夜は鳴らして衆を警むるもの。【七】清商 樂曲の名。【八】他時 後日。麟閣は麒麟閣なり。漢の宣帝功臣十一人の像を麒麟閣に圖せしめた。上頭は前列なり。古詩に東方千餘騎、夫婿居上頭とある。

【題義】

河陽の石尙書（汪立名按ずるに會昌三年癸亥正月、劉沔大に回鶻を破り、太和公主を迎へて以て歸る。石雄は劉沔の將なり）が回鶻（回紇に同じ、突厥の別種、内外蒙古の地を有す）を破り太和公主（天子の女を公主といふ。太和公主は穆宗の第十妹で回鶻に嫁す）を迎へて上黨（今の山西省冀寧道南部の地）を過ぐるとき鷲鷲を射、それを晝に書いたのを示された。贊歎しただけではまだ意に満たないので此詩を作つて稱美したといふのである。

【詩意】

大に回鶻の賊軍を破り、太和公主を奉じて石尙書が潞州に入るとき、青鱗の劍を揮へば蛇尾の活躍するが如く、赤羽の箭を放てば星の飛ぶが如くで、鳥の目さへ過たずに射止めたのであるから、たとひ天狼星（悪星なり）が現れても憂ふるには及ばない。然も其軍隊は畫角を鳴らし刁斗を撃つて警戒怠りなく、秋に方つて軍樂を奏してゐる。後日若し功臣を麒麟閣上に畫くやうな事があらば、石尙書を指しては、他に其上位に居る者はあるまい。

自詠老身示諸家屬

自詠老身を詠じ、諸の家屬に示す

壽及七十五。俸霑五十千。

壽は七十五に及び、俸は五十千に霑ふ。

夫妻偕老日。甥姪聚居年。

夫妻偕老の日、甥姪聚居の年。

粥美嘗新米。袍溫換故絛。

粥美にして新米を嘗め、袍溫かにして故絛を換ふ。

家居雖濩落。眷屬幸團圓。

家居濩落なりと雖も、眷屬幸に團圓なり。

置榻素屏下。移爐青帳前。

榻を素屏の下に置き、爐を青帳の前に移す。

書聽孫子讀。湯看侍兒煎。

書は孫子の讀むを聽き、湯は侍兒の煎るを見る。

走筆還詩債。抽衣當藥錢。

筆を走らして詩債を還し、衣を抽きて藥錢に當つ。

支分閒事了。爬背向陽眠。

閒事を支分し了り、背を爬き陽に向つて眠る。

【字解】

【一】五十千 五萬錢なり。【二】故絛 古綿。【三】濩落 廓落に同じ。廣大の貌。【四】素屏 無地の屏風。【五】詩債 酬ゆべき詩。【六】支分 處分といふが如し。處理する意。

【題義】

己の老境を詠じて家屬に示した詩である。

【詩意】

今や七十五の高齡に及び、五萬錢の俸錢を貰ひ、夫妻俱に息災で、甥姪皆同居してゐる。新米の粥の特に美味なるを覚え、綿入の綿を入れ換へて新調した。家は伽藍堂だが一家眷屬皆團樂して

我わは屏風びやうぶの下したに榻しきを置おき、青帳せいぢやうの前まへに爐ろを移うつし、孫子まごこの本ほんを讀よむのを聽きき、侍兒じじの湯ゆを沸わかすのを見み、筆ふでを走はらし詩しを認しためて酬むかひ、衣ころもを脱ぬぎ質しちに入いれて藥代くすりだいを拂はひ、何なにや彼かやと閒事かんじを處し理りし終はれば、背せの痒かゆきを搔かきつつ陽ひなたに出でて眠ねむる。

自問此心呈諸老伴

自みづから此この心こころに問とひ、諸しよらう老伴はんに呈ていす

朝問此心何所思

朝あしたに此この心こころに問とふ何なんの思おもふ所ところぞと、

暮問此心何所爲

暮くれに此この心こころに問とふ何なんの爲なす所ところぞと。

不入公門慵斂手

公門こうもんに入いらず慵もつくして手てを斂をさめ、

不看人面免低眉

人面じんめんを見みずして眉まゆを低たるるを免まぬか。

居士室間眠得所

居士室間こじしつかんねむりところ眠ねむる所を得え、

少年場飲非宜

少年場せうねんぢやう上うじやう飲いん非いん宜よろ。

閒談疊疊留諸老

閒談かんたん疊たむ疊びとして諸しよらう老らうを留とどめ、

美醞徐徐進一卮

美醞びうん徐じよ徐じよとして一し卮しを進すすむ。

心未嘗求過分事

心こころ未いま嘗かつて過くわ分ぶんの事ことを求もとめざるも、

身常少有不安時

身み常つねに少すくし有ある時ときあること少すくし。

此心除自謀身外

此この心こころ自みづから身みを謀はかるを除のぞくの外ほか、

更問其餘盡不知

更さらに其その餘よを問とふに盡ことごとく知しらず。

【題義】

自みづから吾わがが心こころに問とひ、諸しよらう老友らうに呈ていした詩しである。

【詩意】

朝あしたに夕ゆふべに吾わがが心こころに其そのの思おもふ所ところを問とへば、慵もつくして公門こうもんに入いらず、人ひとに對たいして媚こびを呈ていせず。居士こじの室しつには安眠あんみんすることが出で来るが、若わかい者ものの宴席えんせきでは肌はだが合あはない。ただ老人らうじん仲間なかまを引留ひきとめては疊たむ疊びとして閒談かんたんし、徐おそに酒杯しゆはいを進すすめる。心こころは敢あへて過くわ分ぶんの事ことを求もとめること無なく、身みは不安ふあんを感かんずること極きはめて稀まれである。吾わがが心こころは身みの爲ためを謀はかるより外ほかは、一切さいな何事なにごとも知しらない。

六年立春日日人日作

六年ねんりつしゅん立春日ひじんじつの日ひ人日じんじつの作さく

二日立春人七日

二ふた日かりつしゅんじんじつ

盤蔬餅餌逐時新

盤蔬餅餌はんそへいじ時ときを逐おうて新あらたなり。

年方吉鄭猶爲少

年としは吉きつ鄭ていに方かたべて猶なほ少わかしとなし、

家比劉韓未是貧

家いへは劉りう韓かんに比ひして未いまだ是これ貧みんならず。

【字解】

〔一〕人日 陰曆正月七日をいふ。〔二〕盤蔬 皿に盛つた野菜。餅餌は急就篇の注に、漉れ麵而蒸之、熟之、則爲餅、漉れ米而蒸之、則爲餌とある。〔三〕鄉園節歲 故郷に在りて正月に遇ふこと。〔四〕眼想

郷園節歲應堪重。郷園の節歲應に重んずるに堪ふべし、

眼看といふが如し。

親故歡遊莫厭頻。親故の歡遊頻なるを厭ふ莫し。

試作循潮封眼想。試みに循潮封の眼想を作す、

何由得見洛陽春。何に由つてか洛陽の春を見るを得ん。

分司致仕官中。吉傳鄭諮議最老。韓庶子劉員外尤貧。循潮封三郡遷客。皆洛下舊遊也。

【題義】會昌六年正月七日の作である。

【詩意】二日が立春で今日は丁度七日である。七草の祝の御馳走も時節相應に整つた。吾が年齢は吉傳や鄭諮議よりも若く、家は劉員外や韓庶子ほど貧乏ではない。故郷に在りて正月に遇ふのは至極結構なことで、親故相會して屢歡遊するがよい。試みに循潮封等遠方の州に貶せられた者の身になつて想像するに、配所の春は定めて目を傷ましむるのみであらうから、どうかして洛陽の春を見ることを得たいものだと思ふであらう。

齋居偶作

齋居偶作

童子裝爐火。行添一炷香。

童子爐火を装ひ、行いて一炷の香を添ふ。

老翁持麈尾。坐拂半張牀。

老翁麈尾を持ち、坐して半張の牀を拂ふ。

卷幔看天色。移齋近日陽。

幔を卷いて天色を看、齋を移して日陽に近づく。

甘鮮新餅果。穩暖舊衣裳。

甘鮮なり新餅果、穩暖なり舊衣裳。

止足安生理。優閒樂性場。

止足生理を安んじ、優閒性場を樂ましむ。

是非一以遣。動靜百無妨。

是非一に以て遣り、動靜百妨なし。

豈有物相累。兼無情可忘。

豈物の相累はすあらんや、兼ねて情の忘るべきなし。

不須憂老病。心是自醫王。

老病を憂ふるを須ひず、心は是れ自ら醫王。

【字解】〔一〕麈尾。拂子。〔二〕止足。老子に知不足不辱、知止不殆とある。〔三〕性場。沈約の郊居賦に自中智以下、咸得性以爲場とある。〔四〕醫王。梁の簡文帝の勸醫論に、祇城醫王明於釋典とある。

【題義】齋戒してゐる時に偶然作つたといふ意。

【詩意】先づ童子が爐火を用意し一炷の香を焚き添へた。我は拂子を持つて牀几の塵を拂ひ、幔幕を卷いて天を仰ぎ、日陽に出て齋についた。新しい餅果は甘鮮で、著古した衣裳は穩暖である。足るを知れば生活に不満を感せず、優閒なれば性情を樂ましめる。是非の念を一掃し去れば、動靜すべて何等の碍もない。物の心を累はすなく、情の今更忘るべきものもない。老病をも憂ふるには足らない、心が即ち醫者であるから。

詠身

身を詠す

自中風來三歷閏

中風より來三たび閏を歴

從懸車後幾逢春

懸車より後幾たびか春に逢ふ

周南留滯稱遺老

周南に留滯して遺老と稱せられ

漢上羸殘號半人

漢上に羸殘して半人と號す

薄有文章傳子弟

薄か文章の子弟に傳ふるあり

斷無書札答交親

斷えて書札の交親に答ふるなし

餘年自問將何用

餘年自ら問ふ將何の用ぞと

恐是人間賸長身

恐らくは是れ人間賸長の身

【題義】我が身を詠じた詩である。

【詩意】中風に罹つてから三回閏に遇ひ、七十になつて致仕してから幾たびか春に逢つた。周南に留滯して遺老と稱せられた太史公の如く、漢上に衰廢して半人と謂はれた習鑿齒の如くである。聊か子弟に傳ふべき文章はあるが、友達などに手紙を遣ふことは全くない。一體今後の餘年を何をするであらう。恐らく世間の餘物となるに過ぎまい。

【字解】〔一〕懸車 致仕すること。〔二〕漢上 漢水のほとり。羸殘は衰廢なり。半人は襄陽者舊傳に、習鑿齒以脚疾廢於家巷、襄陽陷於苻堅、堅聞其名、與道安俱與而致焉、謂權翌曰、朕取襄陽、惟得一人半、翌曰、誰耶、堅曰、安公一人、習鑿齒半人也とある。〔三〕書札 手紙。交親は親友。〔四〕人間 世間なり。賸長身は餘計な人、賸は俗に剩に作る。

予與山南 英華作 王僕射淮南李僕射事歷五朝踰三紀海
內年輩今唯三人 榮路雖殊交情不替 聊題長句寄舉之公
垂二相公

予山南 英華には荆南に作る の王僕射・淮南の李僕射と事へて五朝を歴、三紀を踰ゆ。海内の年輩今唯三人のみ。榮路殊なりと雖も交情替らず。聊か長句を題して舉之。公垂二相公に寄す

故交海內只三人

故交海內只三人

二坐巖廊一臥雲

二は巖廊に坐し一は雲に臥す

老愛詩書還似我

老いて詩書を愛するは還た我に似たり

榮兼將相不如君

榮將相を兼ねるは君に如かず

百年膠漆初心在

百年膠漆初心在り

律詩 詠身 予與山南王僕射淮南李僕射事歷五朝踰三紀

【字解】〔一〕王僕射 名は起、字は舉之。會昌二年左僕射に拜せらる。李僕射は李紳、字は公垂、會昌元年右僕射となる。〔二〕五朝 憲宗・穆宗・敬宗・文宗・武宗。三紀は三十六年。十二年を一紀といふ。〔三〕年輩 侯鯖錄に、陸長源以勳德爲

萬里烟霄中路分。 萬里烟霄中路分。

宣武軍司馬、韓愈爲巡官、或戲之

阿閣鸞鳳野田鶴。 阿閣の鸞鳳野田の鶴、

曰、年輩相違とある。【四】故交

何人信道舊同羣。 何人が道ふを信せん舊同羣と。

【五】巖廊 殿廡なり。漢書に虞舜之時、游于巖廊之上、垂拱無爲、天下平とある。臥雲は隱居す

ること。【六】百年 人の一生をいふ。膠漆は固き交をいふ。【七】烟霄 高き天空。中路は中途なり。【八】阿閣 帝王世紀に、黃帝時、鳳凰巢於阿閣とあり、文選注に、周書曰、明堂成有西四阿、然則閣有西四阿者、謂之阿閣とある。鸞鳳は王李二僕射に比す。鶴は樂天自ら比す。

【題義】予は王起・李紳二相と俱に五朝に歴事し、三十六年を踰えたが、當時の同年輩の者で今に存する者は天下に唯三人のみとなつた。榮達は二相に及ばないけれども交情は昔に替らない。因つて此詩を題して二相に寄せたといふ意。

【詩意】舊友と謂つては天下に唯我等三人のみになつた。その中の二人は廟堂に坐して宰相となり、一人は隱居の身である。老いて詩書を好むことは君等も我に似てゐるが、將相の榮官に在ることは我は到底君等に及ばない。然し生涯の固き交情は今以て昔に替らない。ただ萬里の天空が我と君等との間を隔ててゐるので、昔の同輩だと謂つても誰も信する者のないほど違つてしまつた。

讀道德經

道德經を讀む

玄元皇帝著遺文。

玄元皇帝遺文を著し、

鳥角先生仰後塵。

鳥角先生後塵を仰ぐ。

金玉滿堂非己物。

金玉滿堂も己が物に非ず、

子孫委蛻是他人。

子孫は委蛻是れ他人。

世間盡不關吾事。

世間盡く吾が事に關せず、

天下無親於我身。

天下我が身より親しきはなし。

只有一身宜愛護。

只一身の宜しく愛護すべきあり、

少教氷炭逼心神。

少しく氷炭をして心神に逼らしめよ。

【題義】老子道德經（略して老子といふ）を讀んで所感を述べた詩である。

【詩意】老子は五千言を著して後世に遺し、我は後塵を仰いで其説を奉じてゐる。老子の言ふ通り、たとひ金銀珠玉が家に滿つるとも其れは吾が有ではない。又子孫といふものは天地の委蛻で赤の他人と同じである。世間の事は一切己の關知すべき所ではない。天下に我が身ほど親しきものはないのである。されば宜しく吾が身を愛護して、心神を苦しめるやうな事はせぬがよい。

【字解】【一】玄元皇帝 唐は老子を奉じて始祖となし、尊んで玄元皇帝と謂つた。【二】鳥角先生 鳥角は隱士の冠。許渾の詩に、歸臥養天眞、鹿裘鳥角巾とある。鳥角先生とは樂天自ら謂ふ。【三】金玉滿堂 老子に、金玉滿堂、莫之能守とある。【四】委蛻 蛻は蟲の抜殻。莊子に、子孫非汝有、天地之委蛻也とある。【五】氷炭 冷熱なり。

禽蟲十二章并序 禽蟲十二章并序

莊列寓言。風騷比興。多假蟲鳥。以爲筌蹄。故詩義始於關雎。鵲巢。道說先乎鯤。鵬。蜩。鸚。之類是也。子閒居乘興。偶作一十二章。頗類志怪放言。每章可致一哂。一哂之外。亦有以自警其衰耄封執之惑焉。頃如此作。多與故人微之。夢得共之。微之。夢得嘗云。此乃九奏中新聲。八珍中異味也。有旨哉。有旨哉。今則獨吟。想二君在目。能無恨乎。

【訓讀】莊列の寓言、風騷の比興、多く蟲鳥を假りて以て筌蹄となす。故に詩義の關雎鵲巢に始まり、道説の鯤鵬蜩鸚の類を先にする是れなり。子閒居して興に乗じ、偶々一十二章を作る。頗る志怪放言に類たり。章毎に一哂を致すべし。一哂の外亦以て自ら其衰耄封執の惑を警むるあり。頃此作の如き、多くは故人微之・夢得と之を共にす。微之・夢得嘗て云く、此れ乃ち九奏中の新聲、八珍中の異味なり。旨ある哉、旨ある哉と。今則ち獨り吟じ、二君を想ふに目に在り。能く恨なからんや。

【字解】(一) 莊列 莊子・列子、並に戰國時代の文豪。(二) 風騷 詩經の國風、並に屈原の離騷。比興は比喻を以て成れる詩をいふ。(三) 筌蹄 手段方法の意。莊子に筌者所以魚を、蹄者所以兔を、得兔而忘蹄とある。(四) 關雎・鵲巢 詩經の卷頭に在る篇の名。(五) 鯤鵬蜩鸚 魚鳥蟲の名。莊子の卷頭の逍遙游篇に見ゆ。(六) 志怪 怪を誌す。莊子逍遙游篇に齊諧者志怪者也とある。(七) 一哂 一笑なり。(八) 故人 舊友。微之は元稹の字。夢得は劉禹錫の字。(九) 九奏 天帝の音樂。史記

趙世家に、簡子箴語大夫曰、我之帝所甚樂、與三百神遊于鈞天、廣樂九奏萬舞、不類三代之樂とある。(一〇) 八珍 八種の美味。周禮・禮記に見ゆ。

燕違戊己鵲避歲

燕は戊己を避け鵲は歲を避く、

【字解】(一) 羽族 鳥類。

茲事因何羽族知

このこと因つて羽族知る。

【三】 參差 整齊ならざること。くひちがひのあること。

疑有鳳皇頰鳥曆

疑ふらくは鳳皇鳥曆を頰つあり、

一時一日不參差

一時一日も參差たらざるを。

不知其然也。燕衛泥。常避戊己日。鵲巢口。常避太歲。驗之皆信。

【題義】鳥や蟲に就いての感想を述べた詩である。

【詩意】燕は泥を銜んで巢を作るのに常に戊己の日を避け、鵲の巢の入口は常に太歲(星の名)即ち木星。十二年で一周年する。故に此星の方角に因つて子の年、丑の年などといふ)の方角を避けるといふ。どうして鳥類がこんな事を心得てゐるのであらう。或は昔鳳皇が鳥の曆を頰ける時に、一日一時も支吾のないやうに作つたのかも知れない。

(一)

(二)

水中科斗長成蛙

水中の科斗は長じて蛙と成り、

【字解】(一) 科斗 おたまじやくし。

林下桑蠶老作蛾

林下の桑蠶は老いて蛾と作る。

律詩 禽蟲十二章并序

七二一

蛙跳蛾舞仰頭笑。 蛙は跳り蛾は舞ひ頭を仰いで笑ふ、
焉用鯤鵬鱗羽多。 焉んぞ用ひん鯤鵬鱗羽の多きを。

〔二〕 鯤鵬 前の詩に見ゆ。

【詩意】 水の中の科斗は成長して蛙になり、桑の林の中の蠶は老いて蛾となる。蛙や蛾は跳ること
も舞ふことも仰いで笑ふことも出来る。して見れば鯤鵬などのやうに鱗や羽はいらないわけだ。

〔三〕

〔三〕

江魚羣從稱妻妾。 江魚は羣從して妻妾と稱し、

【字解】 〔一〕 塞鴈 邊塞の鴈。

塞鴈聯行號弟兄。 塞鴈は聯行して弟兄と號す。

但恐世間眞眷屬。 但恐らくは世間の眞眷屬、

親疎亦是強爲名。 親疎亦是れ強ひて名を爲すを。

故名也。江沱間有魚。每遊輒三。如膝隨妻。一先二後。土人號爲婢妾魚。禮云。鴈兄弟行。

【詩意】 江魚の羣を成して從ふをば妻妾といひ、鴈の羽を聯ねて飛ぶのをば兄弟といふ。されば世間の眞の眷族親疎も強ひて名づけて親とか子とかいふのではあるまいか。

〔四〕

〔四〕

蠶老繭成不庇身。 蠶老い繭成りて身を庇はず、

蜂飢蜜熟屬他人。 蜂飢る蜜熟して他人に屬す。

須知年老憂家者。 須らく知るべし年老いて家を憂ふる者、

恐是二蟲虛苦辛。 恐らくは是れ二蟲の虚しく苦辛するを。

自警也。

【詩意】 蠶が老いて繭が出来ても吾が身を庇ふことは出来ず、蜂が飢を忍んで蜜を作るが、蜜が熟すれば人に取られてしまふ。年老いて家の事を憂ふる者は、蠶や蜂があくせくと繭や蜜を作つても、結局徒勞に屬することを知るがよい。

〔五〕

〔五〕

阿閣鸞鸞田舍鳥。 阿閣の鸞鸞田舎の鳥、

妍蚩貴賤兩懸殊。 妍蚩貴賤兩ながら懸殊す。

如何閉向深籠裏。 如何ぞ深籠の裏に閉され、

一種摧頽觸四隅。 一種摧頽して四隅に觸るる。

有感也。

【字解】 〔一〕 阿閣 帝王世紀に、黃帝時、鳳皇巢於阿閣とあり、文選注に、周書曰、明堂成有四阿、然則閣有四阿者、謂之阿閣とある。鸞鸞は鳳皇の類の鳥。貴人に喩ふ。田舍鳥は微賤の人に喩ふ。〔二〕 妍蚩 美醜なり。懸殊は非常に異なる。

【詩意】殿上の鸞鳳と田野の鳥とは、美醜貴賤殆ど比べ物にならないほど違ふ。然し深籠の中に閉ぢ込められ、籠の四隅に頭を觸れてへとへとになつてゐるのは氣が知れない。

〔六〕

獸中刀槍多怒吼。
鳥遭羅弋盡哀鳴。
羔羊口在縁何事。
闇死屠門無一聲。

〔六〕

獸刀槍に中れば多く怒吼し、
鳥羅弋に遭へば盡く哀鳴す。
羔羊口在れども何事にか縁、
闇に屠門に死して一聲なし。

【字解】(一) 羅弋。羅は網。弋はいぐるみの矢。
(二) 羔羊。小羊。

【詩意】獸は刀槍を被れば怒り吼え、鳥は網や矢に遇へば哀み鳴くものであるが、なせか彼の小羊は口が在るのに、屠者の手に罹つて一聲をも立てずに殺されてしまふ。

〔七〕

蟪蛄殺敵蚊巢上。
蠻觸交爭蝸角中。

〔七〕

蟪蛄敵を殺す蚊巢の上、
蠻觸交争ふ蝸角の中。

【字解】(一) 蟪蛄。小蟲の名。列子湯問篇に、江浦之間生蟪蛄、其名曰蟪蛄、羣飛而集於蚊睫、弗相觸也とある。(二) 蠻觸。莊子則陽篇に、有國于蝸之左角一者曰蠻氏、國于蝸之右角一者曰觸氏、争地而戰、伏尸數萬とある。(三) 諸天。

應似諸天觀下界。

應に諸天の下界を觀るに似たるべし、

一微塵內鬪英雄。

一微塵の内英雄を鬪はしむ。

自照也。

佛說に三界二十八天あり、稱して諸天といふ。(四) 一微塵。極めて小さきもの。

【詩意】蟪蛄は蚊の巢の上で敵と戦ひ、蠻觸二氏は蝸牛の角の中で戦ふといふが、諸天の目から下界の英雄の争鬪を觀たならば、一微塵の内争と見えるであらう。

〔八〕

蠨蛸網上罨蜉蝣。
反覆相持死始休。
何異浮生臨老日。
一彈指頃報恩讐。

〔八〕

蠨蛸網上蜉蝣を罨け、
反覆相持し死して始めて休む。
何ぞ異ならん浮生臨老の日、
一彈指頃恩讐を報ゆるに。

誠報也。

【詩意】蜘蛛が網を張つて蜉蝣をひっかけ、互に争つてもみあひ、死ぬまで相對抗する。永くもない人生の臨老の日に、讐を報いんとあくせくする人も亦此類である。

〔九〕

蟻王化飯爲臣妾。螺母偷蟲作子孫。彼此假名非本物。其間何怨更何恩。

蟻王は飯を化して臣妾と爲し、螺母は蟲を偷んで子孫と作す。彼此は假名にして本物に非ず、其間何をか怨み更に何をか恩とせん。

【字解】

〔一〕蟻王 大蟻なり。
〔二〕螺母 蟲の名。螺贏といふ蟲は螟蛉といふ蟲を養つて己の子となすといふ。詩經に螟蛉有子、螺贏負之とある。

【詩意】

蟻は飯を化して臣妾となし、螺母は螟蛉といふ蟲を己の子孫にする。されば彼といひ此といつて差別を立てるけれども、それは假に名づけたもので本質的のものではない。深く考へて見れば恩も怨もないわけである。

〔十〕

豆苗鹿嚼解鳥毒。艾葉雀銜奪燕巢。鳥獸不曾看本草。諳知藥性是誰教。

豆苗は鹿嚼んで鳥毒を解き、艾葉は雀銜んで燕巢を奪ふ。鳥獸曾て本草を看ず、藥性を諳知するは是れ誰か教へたる。

【字解】

〔一〕鳥毒 箭の毒。
〔二〕艾葉 よもぎの葉。
〔三〕本草 藥用植物書。

晉鑑者說云。鹿若中箭發。即嚼豆葉食之。多消解。箭毒多用鳥頭。故云。鳥毒。艾燕惡。雀欲奪其巢。先銜艾。致其窠。輒避去。因而有之。

【詩意】鹿は豆の葉を嚼んで箭の毒を消し、雀は艾の葉を銜んで行つて燕の巢を占領する。鳥や獸は本草學を學んでもゐないのに、誰が藥物學の知識を授けたのであらうか。

〔十一〕

一鼠得仙生羽翼。衆鼠相看有羨色。豈知飛上未半空。已作鳥鳶口中食。

一鼠仙を得て羽翼を生ず、衆鼠相見て羨む色あり。豈知らんや飛び上りて未だ半空ならざるに、已に鳥鳶口中の食と作らんとは。

【字解】

〔一〕一鼠得仙 前の喜老自嘲と題する詩に、蝙蝠鼠中仙とある。

【詩意】一匹の鼠が仙術を悟り、羽翼を生じて蝙蝠になった。他の鼠どもは皆相見て之を羨んだ。然し氣の毒な事に、飛んで未だ半空に上らないうちに鳥や鳶に食はれてしまった。

〔十二〕

鵝乳養雛遺在水。魚心想子變成鱗。細微幽隱何窮事。知者唯應是聖人。

鵝乳雛を養ひ遺つて水に在り、魚心子を想へば變じて鱗と成る。細微幽隱何ぞ事を窮めん、知る者は唯應に是れ聖人のみなるべし。

鵝放乳水中。不能離。羣雛從而食之。皆飽而去之。又如魚想子。子成魚。故是佛經中說。

【詩意】鵝は乳を水中に流して雛を養ひ、魚が子を想へば子が魚と成るといふ。こんな微妙幽隠な事は人智を以て窮め盡すことは出来ない。之を知ることの出来るのは聖人だけであらう。

白樂天詩後集 卷十八 別集

格律詩 一首

窗中列遠岫 以題中平聲爲韻。○按各本別附宣州試射中正鵠賦後上。

窗中に遠岫列る。題中の平聲を以て韻と爲す。○按するに各本別に宣州の試射正鵠に中るの賦の後に附す。

天靜秋山好。窗開曉翠通。天靜にして秋山好し、窗開きて曉翠通す。

遙憐峰窈窕。不隔竹朦朧。遙に峰の窈窕たるを憐み、竹の朦朧たるを隔てず。

萬點當虛室。千重疊遠空。萬點虛室に當り、千重遠空に疊る。

列檐攢秀氣。緣隙助清風。檐に列りて秀氣を攢め、隙に緣りて清風を助く。

碧愛新晴後。明宜反照中。碧は新晴の後に愛し、明は反照の中に宜し。

宣城郡齋在。望與古時同。宣城郡齋在り、望古時と同じ。

【字解】【一】窈窕。深遠の貌。郭璞の賦に、幽岫窈窕とある。【二】朦朧。明かならざる貌。一本に蒙籠に作る。蒙籠は掩蔽の貌。

【三】反照。夕日のてりかへし。【四】宣城。宣州。今の安徽省宣城縣。郡齋は郡の役所。

【題義】窗を開き遠山の列るを見た時の詩である。

格律詩 窗中列遠岫

【詩意】秋の山は物静で誠に好い。窗を開けば曉翠がはひつて来る。峰が遙遙と竹藪にも遮られずに見える。點點として虚室と相對し、幾重ともなく遠空に疊つてゐる。檐先に竝んで秀氣を競ひ、隙間から清風が吹いて来る。雨あがりには一入縁が深く、夕日の返照の中に殊にくつきりと見える。宣城の郡齋から見た景色は今も昔と同じである。(昔南齊の謝朓は宣城の太守となり、宣城の風景を賛歎した。)

玉水記方流

以三流字二爲韻。六十字成。○按
玉水方流を記す。流字を以て韻と爲し、六十字成る。○按するに各本は別に省試の性習相遠近の賦の後に附す。

良璞含章久。寒泉徹底幽。

良璞章を含むこと久しく、寒泉底に徹して幽なり。

矩浮光灑灑。方折浪悠悠。

矩浮光灑灑、方折浪悠悠。

凌亂波紋異。縈廻水性柔。

凌亂して波紋異り、縈廻して水性柔かなり。

似風搖淺瀨。疑月落清流。

風の淺瀨を搖かすに似、月の清流に落つるかと思ふ。

潛頴應傍達。藏眞豈上浮。

頴に潛むも應に傍達すべし、眞を藏して豈上り浮べんや。

玉人如不見。淪棄卽千秋。

玉人如し見ずんば、淪棄せられて卽ち千秋ならん。

【字解】

〔一〕良璞。美玉なり。璞は玉の未だ彫琢を加へざるもの。含章は美を内に含むこと。〔二〕潛。頴。高士傳に、許由開F堯致天下二而讓焉、乃退而逕ニ於中嶽、颺水之陽、箕山之下一とある。〔三〕玉人。玉を琢く人。ここでは暗に試験官たる高士を指して言ふ。〔四〕千秋。千年。永遠といふが如し。

【題義】この詩は樂天が進士の試験を受けた時に提出したもので、玉水の方に流るることを記述したのである。

【詩意】璞の美質を内に含むが如く、寒泉が底まで透きとほつてゐる。玉の光のさらさらと浮動するが如くで、然も曲折して浪を立てつつ悠悠と流れる。波紋の混亂する所が面白く、縈廻して善く水の柔順な性を示してゐる。昔許由は頴川に隠れてゐたが、終に旁く天下に名を立てた。眞性を心の中に藏する者は妄に上へには顯さなれぬものだ。さて若し玉人が之をよく見てくれなければ、永遠に棄てられて世に出ずに終るであらうと、暗に我が身を玉水に比し、高野に向つて自分を及第させてくれるやうに願つたのである。

大社觀獻捷詩

以三功字一爲韻。四韻成。

大社に獻捷を觀る詩。功字を以て韻と爲し、四韻成る。

淮海妖氛滅。乾坤嘉氣通。

淮海妖氛滅す、乾坤嘉氣通す。

班師郊社內。操袂凱歌中。

師を班す郊社の内、袂を操る凱歌の中。

廟算無遺策。天兵不戰功。

廟算遺策なく、天兵戰功せず。

格律詩 玉水記方流 大社觀獻捷詩

小臣同鳥獸率舞向皇風

小臣は鳥獸に同じく、率ひ舞うて皇風に向ふ。

【字解】 一 獻捷 敵に克ちて凱旋し、俘囚を以て成功を廟社に告げること。左傳に、蠻夷戎狄、不式王命、王命伐之、則有獻捷とある。二 淮海 淮水の流域から東海に瀆する地方。妖氣は不祥の氣。ここは淮西の賊將李希烈・陳仙奇・吳少誠等の亂をいふ。三 班師 凱旋する。郊社は廟社なり。四 操袂 相會して見物する。五 廟算 天皇の謀略。古は師を出す時、先づ祖廟で謀を定めたから、かくいふ。遺策は失策なり。六 天兵 王師なり。七 小臣 樂天自ら謂ふ。八 率舞 書經に、百獸率舞とある。

【題義】 廟社で獻捷を觀て作つた詩で、自注に元和二年の作だとある。

【詩意】 淮海地方の賊軍が敗滅に歸して、天地の間に瑞氣が満ちた。今や廟社の内に捷を獻するに方り、我等は袂を聯ねて凱歌の中に其盛儀を拜觀してゐる。天皇の謀略に闕失がないから、かかる功績を擧げ得たのであるが、王師は少しも戦功を伐るやうなことはない。鳥獸にも比すべき微賤の我等は率ひ舞うて皇風の辱きを仰いでゐる。

自誨

自ら誨ふ

樂天樂天。來與汝言。

樂天樂天、來れ汝と言はん。

汝宜拳拳終身行焉。

汝宜しく拳拳として、身を終るまで行ふべし。

物有萬類。錮人如鎖。

物に萬類あり、人を錮すること鎖の如し。

事有萬感。燕人如火。

事に萬感あり、人を燕くこと火の如し。

萬類遞來。鑠汝形骸。

萬類遞に來り、汝が形骸を鑠し、

使汝未老。形枯如柴。

汝をして未だ老いざるに、形枯ること柴の如くならしむ。

萬感遞至。火汝心懷。

萬感遞に至り、汝が心懷を火き、

使汝未死。心化為灰。

汝をして未だ死せざるに、心化して灰とならしむ。

樂天樂天。可不大哀。

樂天樂天、大に哀まざるべけんや、

汝胡不懲往而念來。

汝胡ぞ往に懲りて來を念はざる。

人生百歲七十稀。

人生百歲七十稀なり、

設使與汝七十期。

設使汝に七十の期を與ふるも、

汝今年已四十四。

汝今年已に四十四なり、

却後二十六年能幾時。

却後二十六年能く幾時ぞ。

汝不思二十五年來。

汝二十五年來の事を思はずや、

來事。

疾速倏忽如一寐。

疾速倏忽一寐の如し。

往日來日皆瞥然。

往日來日皆瞥然たり。

胡爲自苦於其間。

胡爲れぞ自ら其間に苦む。

樂天樂天可不_レ大哀。

樂天樂天、大に哀まざるべけんや、

而今而後。

而今而後、

汝宜_レ饑而食、渴而飲。

汝宜しく饑ゑて食ひ、渴して飲み、

晝而興、夜而寢。

晝にして興き、夜にして寢ぬべし。

無_レ浪喜、無_レ妄憂。

浪に喜ぶなかれ、妄に憂ふるなかれ。

病則臥、死則休。

病まば則ち臥し、死せば則ち休せよ。

此中_レ是汝家。

此中_レ是れ汝が家なり、

此中_レ是汝鄉。

此中_レ是れ汝が郷なり。

汝何捨_レ此而去。

汝何ぞ此を捨てて去り、

自取其_レ遑遑。

自ら其の遑遑たるを取る。

遑遑兮欲_レ安往哉。

遑遑として安に往かんと欲するや、

樂天樂天歸去來。

樂天樂天歸去來。

【字解】 〔一〕拳拳 捧持して謹み守る貌。

〔二〕鑣 鎖に同じ。くさり。

〔三〕百歲 人の一生をいふ。

〔四〕却後 今後。

〔五〕

警然 忽ち去る貌。〔六〕而今而後 今より後。

〔七〕遑遑 あくせくと奔走すること。

【題義】 自ら誨へたといふ意で、四十四の時の作とすれば、丁度憲宗の元和十年、盜が宰相武元衡を殺したので、樂天は賊を捕へんことを請うて執政に悦ばれず、江州に謫せられた時である。

【詩意】 樂天よ、我汝に誨ふる所あらんとす。謹んで終身之を守るべし。世事に萬類あり人を束縛すること鎖の如し。事に萬感あり人を焼くこと火の如し。萬類往來して汝が身を束縛し未だ老いざるに枯木の如くならしめ、萬感去來して汝の心情を燒き心化して死灰の如くならしむ。誠に哀むべきなり。汝宜しく既往に懲り將來を圖るべし。人生百歲と謂ふも能く七十に至る者稀なり。汝をして七十の壽を保たしむるも、汝今既に四十四なり。今後の二十六年は決して長しと謂ふべからず。自ら近く二十五六年來の事を思へ。其の忽ち去りしこと一場の夢の如くなりしにあらすや。胡爲れぞ官途に在りて自ら苦むこと此の如くなる。亦大哀と謂はざるべからず。今より後起居飲食皆己の欲する所に任せ、妄に喜憂せず、死して則ち休むべし。かかる生活こそ汝の身を置くべき處なれ。汝何ぞ此を捨てて遑遑として何をか求めんと欲する。樂天樂天、彼の宦途を捨てて速かに此境に歸るべし。

三謠 并序

三謠并序

余廬山草堂中有朱藤杖一。蟠木机一。素屏風二。時多杖藤而行。隱机而坐。掩屏而臥。宴息之暇。筆研在前。偶爲三謠。各導其意。亦猶座右陋室銘之類爾。

【訓讀】余が廬山草堂の中、朱藤杖一、蟠木机一、素屏風二あり。時に多く藤を杖いて行き、机に隠りて坐し、屏に掩はれて臥す。宴息の暇、筆研前に在り。偶、三謠を爲り、各、其意を導ふ。亦猶は座右陋室の銘の類のごとくなるのみ。

【字解】〔一〕宴息 休息なり。〔二〕筆研 筆硯なり。〔三〕座右陋室銘 訓誡の文字を坐する所に記して自ら警むるもの。古人多く之を作る。劉禹錫に陋室銘の作あり。

蟠木謠

蟠木謠

蟠木蟠木。有似我身。
不中乎器。無用於人。
下擁腫而上麟菌。
桷不桷兮輪不輪。
天子建明堂兮。

蟠木蟠木、我が身に似たるあり。
器に中らず、人に用なし。
下は擁腫して上は麟菌、
桷とせんとするも桷たらず輪とせんとするも輪たらず。
天子明堂を建つるも、

既非梁棟。

既に梁棟に非ず。

諸侯斲大輅兮。

諸侯大輅を斲るも、

材又不中。

材又中らず。

唯我病夫。或有所用。

唯我病夫、或は用ふる所あり。

用爾爲几。

爾を用ひて几となす、

承吾臂支吾頤而已。

吾が臂を承け吾が頤を支ふるのみ。

矣。

不傷爾性。不枉爾理。

爾が性を傷はず、爾が理を枉げず。

爾怏怏爲几之外無

爾怏怏たるも几たるの外爾を用ふる所なし。

所用爾。

爾既不材。吾亦不材。

爾既不材なり、吾も亦不材なり。

胡爲乎人間徘徊。

胡爲れぞ人間に徘徊する。

蟠木蟠木。

蟠木蟠木、

吾與汝歸草堂去來。

吾汝と草堂に歸らん去來。

【字解】〔一〕擁腫 瘤だらけなこと。莊子逍遙游篇に、吾有大樹、人謂之樗、其大本擁腫而不中繩墨とある。麟菌は象の鼻の垂るる貌。張衡の賦に垂鼻麟菌とある。〔二〕明堂 天子政教を明にするの堂なり。〔三〕大輅 大車なり。〔四〕人間 世間。

【題義】蟠木凡を詠じた謠である。

【詩意】蟠木よ、お前は能く俺に似てゐる。器とするに適せず世間の役に立たず、根は節くれ立つてゐて枝は象の鼻のやうに垂れ、柄にもならねば車の輪にもならない。天子が明堂を建てても其棟梁にもなれず、諸侯が大車を造つても其用材ともなれず、ただ一病夫たる俺が汝を用ひて脇息とし、臂をついたり頬杖をついたりするのみで、敢て汝の性理を損傷することはない。爾は不平であらうが、脇息にでもする外は實は使ひ道がないのだ。ああ汝も不材、吾も不材である。いつまで世間にゐてもどうにもならないから、相俱に草堂に歸らうではないか。

素屏謠

素屏謠

素屏素屏。

素屏素屏、

胡爲乎不文不飾。

胡爲れぞ文せず飾せず、

不丹不青。

丹せず青せざる。

當世豈無李陽冰

當世豈無李陽冰の篆字、

【字解】〔一〕素屏 無地の屏風。

〔二〕丹青 繪をかくこと。

〔三〕李陽冰 唐の趙郡の人。篆書を善くす。

之篆字。

張旭之筆跡。

張旭の筆跡、

邊鸞之花鳥。

邊鸞の花鳥、

張璪之松石。

張璪の松石なからんや。

吾不令加一點一

吾一點一畫をも其上に加へしめず、

畫於其上。

欲爾保眞而全白。

爾が眞を保ちて白を全うせんことを欲す。

吾於香爐峰下置

吾香爐峰下に於て草堂を置く。

草堂。

二屏倚在東西牆。

二屏倚せて東西牆に在り。

夜如明月入我室。

夜は明月の我が室に入るが如く、

曉如白雲圍我牀。

曉には白雲の我が牀を圍むが如し。

我心久養浩然氣。

我が心久しく浩然の氣を養ふ、

亦欲與爾表裏相

亦爾と表裏して相輝光せんと欲す。

〔四〕張旭 唐の人。草書を善くす。

〔五〕邊鸞 唐の京兆の人、少くして丹青を攻め、花鳥に長す。

〔六〕張璪 璪、一に藻に作る。巧に樹石山水を畫く。

〔七〕香爐峰 廬山の峰の名。

輝光

爾不見當今甲第

爾見不や當今の甲第と王宮と、

與王宮

織成步障錦屏風

步障錦屏風を織り成し、

綴珠陷鈿貼雲母

珠を綴り鈿を陷し雲母を貼り、

五金七寶相玲瓏

五金七寶相玲瓏たり。

貴豪待此方悅目

貴豪此を待つて方に目を悦ばしめ、

晏然寢臥乎其中

晏然として其中に寢臥す。

素屏素屏

素屏素屏、

物各有所宜

物各宜しき所あり、

用各有所施

用各施す所あり。

爾今木爲骨兮紙

爾今木を骨となし紙を面となす、

爲面

捨吾草堂欲何之

吾が草堂を捨てて何に之かんと欲する。

【八】 甲第 巨室といふが如し。甲乙次第あり故にいふ。張衡の賦に、北闕甲第、當道直啓とある。

【九】 步障 竹を立てて幕を張り屏障となし、以て塵土を障蔽するもの。晉書石崇傳に、崇作錦步障五十里とある。

【一〇】 鈿 螺鈿。

【一一】 晏然 やすらかに。

【題義】 無地の屏風を詠じた謠である。

【詩意】 この無地の屏風に何故文飾を施さず、繪畫を書かないか。今の世に書畫の名人がないわけではないが、吾は一點一畫をも此屏風に染めさせず、どこまでも自然の色を保たしめようと思ふのである。香爐峰下の草堂の東西牆に此屏風を立てて置くと、夜は明月が我室に入りしかと思はれ、曉には白雲が我寢臺を繞るかと思はれる。我は久しく浩然の氣を養つてゐるが、此屏風と光を争はしめようと思ふ。見よ當今の宮殿大宅では步障錦屏風を織り成し、金銀珠玉を綴り、其中に安眠してゐる。あ素屏よ、物には各宜しき所あり、その效用を異にするものである。汝は木を骨とし紙を貼つた至つて粗末な物であるから、到底宮殿大宅の用には立たない。やはり俺の草堂に安んじてゐるがよい。

朱藤謠

朱藤謠

朱藤朱藤

朱藤朱藤、

溫如紅玉直如朱繩

溫は紅玉の如く、直は朱繩の如し。

自我得爾以爲杖

我爾を得て以て杖となしてより、

大有裨於股肱

大に股肱に裨あり。

前年左選東南萬里

前年東南萬里に左選せらる。

【字解】 左選 左選に同じ。

江州司馬に貶せられたこと。

交遊別我於國門。
親友送我於滻水。
登高山兮車倒輪摧。
渡漢水兮馬跼蹄開。
中途不進。部曲多廻。
唯此朱藤。實隨我來。
瘡癘之鄉。無人之地。
扶衛衰病。驅訶魑魅。
吾獨一身。賴爾爲二。
或水或陸。自北徂南。
泥黏雪滑。足力不堪。
吾本兩足。得爾爲三。
紫霄峰頭。黃石巖下。
松門石磴。不通輿馬。

交遊我に國門に別れ、
親友我を滻水に送る。
高山に登りて、車倒れ輪摧け、
漢水を渡りて、馬跼り蹄開き、
中途にして進まず、部曲多く廻る。
唯此朱藤、實に我に随つて來る。
瘡癘の郷、無人の地、
衰病を扶衛し、魑魅を驅訶す。
吾獨り一身なるも、爾に頼りて二となる。
或は水或は陸、北より南に徂き、
泥黏き雪滑かに、足力堪へず。
吾本兩足なるも、爾を得て三となる。
紫霄峰頭、黃石巖下、
松門石磴、輿馬を通せず。

【三】 國門 國都の門。

【三】 滻水 長安の附近に在る川。

【四】 部曲 行伍をいふ。

【五】 瘡癘 炎熱惡氣なり。

【六】 魑魅 惡鬼の類。

吾與爾披雲撥水。
環山繞野。

吾爾と雲を披き水を撥ひ、
山を環り野を繞る。

【七】 匡廬 廬山をいふ。

二年蹋徧匡廬間。
未嘗一步而相捨。

二年匡廬の間を蹋み徧くし、
未だ嘗て一步も相捨てず。

雖有佳子弟良朋友。

佳子弟良朋友ありと雖も、

扶危助蹇。不如朱藤。

危きを扶け蹇を助くること、朱藤に如かず。

嗟乎窮既若是。

嗟乎、窮既に是の若し、

通復何如。

通復た何如。

【八】 蹇 難なり。

吾不以常杖待爾。

吾常杖を以て爾を待たず、

爾勿以常人望吾。

爾常人を以て吾に望む勿れ。

朱藤朱藤。

朱藤朱藤、

吾雖青雲之上黃泥

吾青雲の上黃泥の下と雖も、

之下。

誓不棄爾於斯須。

誓つて爾を斯須も棄てじ。

【九】 斯須 暫時。

【題義】朱塗の藤の杖を詠じた謠である。

【詩意】朱藤は温潤なことは紅玉の如く、眞直なことは朱繩の如くである。我汝を得て杖となしてから、大に我が股肱の助となつた。先年江州に貶せられ、交友に別れて東南萬里の地に来る時、高山に登りては車輪摧け、漢水を渡りては馬蹄進まず、従者も多く途中から歸つたが、ただ此朱藤のみは我に隨つて瘴癘無人の地に来り、我が爲に衰病を扶け魑魅を驅つてくれた。吾は獨りであるが、汝を得て二人となり、水陸を渉り北から南に徂くに、泥や雪が滑かで足力が堪へられなかつた。吾は二足であるが汝を得て三足となつた。紫雲の棚曳く峰、黄巖の下の輿馬の通じない處でも、我は汝を得て雲を披き水を撥ひ山野を繞ることが出来て、二年の間廬山を周遊したが、一步も汝と離れたことはなかつた。子弟朋友と雖も我が危難を助くることは汝に及ばない。我の窮すること此の如くであるから、將來通することがあつても亦推して知るべきのみである。吾は汝をば世間竝の杖とは思はないのだから、汝も我を普通の人と思つてくれるな。ああ吾は將來富貴になるとも貧賤になるとも、誓つて暫くも汝を棄てないであらう。

無可奈何歌

奈何ともすべきなきの歌

無可奈何兮

奈何ともすべきなし、

白日走而朱顏積

白日走りて朱顏積る、

少日往而老日催

少き日は往つて老の日は催す。

生者不往兮

生者は住まらず、

死者不廻

死者は廻らず。

況乎寵辱豐頰之外

況んや寵辱豐頰の外物、

物。

又何常不十去而一來

又何ぞ常て十たび去つて一たび來

來。

去不可挽兮

去るは挽くべからず、

來不可推

來るは推すべからず、

無可奈何兮已焉哉

奈何ともすべきなし已んぬる哉。

惟天長而地久

惟天は長くして地は久し、

前無始兮後無終

前に始なく後に終なし。

嗟吾生之幾何

嗟吾が生の幾何ぞ、

【字解】(一) 朱顏 紅顏なり。

若き顔色。頰は頰に同じ。

(三) 豐頰 盛衰なり。

寄瞬息兮其中。

又如太倉之稊米。

委一粒於萬鍾。

何不與道逍遙。

委化從容。縱心放志。

洩洩融融。

胡爲乎分愛惡於生

死。

繫憂喜於窮通。

倔強其骨髓。

齟齬其心胷。

合冰炭以交戰。

祇自苦兮厥躬。

彼造物者。云何不爲。

瞬息を其中に寄す。

又太倉の稊米、

一粒を萬鍾に委するが如し。

何ぞ道と逍遙し、

化に委して從容し、心を縱にし志を放にし、

洩洩融融たらざる。

胡爲れど愛惡を生死に分ち、

憂喜を窮通に繫け、

其骨髓を倔強し、

其心胷を齟齬し、

冰炭を合せて以て交戦し、

祇自ら厥躬を苦むる。

彼の造物者は、云に何をか爲さざらん。

【三】瞬息 極短の時間。目一たび動くを瞬といひ、呼吸一回を息といふ。

【四】稊米 小粒の米。莊子に稊米在太倉とある。

【五】萬鍾 鍾は樹目の名。六斛四斗。

【六】委化 自然の運行に任せる。

【七】洩洩 舒散の貌。左傳に其樂也洩洩とある。融融は和樂の貌。左傳に其樂也融融とある。

【八】愛惡 愛憎なり。

【九】倔強 屈抑を受けざること。

此與化者。云何不隨。

或煦或吹。或盛或衰。

雖千變與萬化。

委一順以貫之。

爲彼何非。爲此何是。

誰冥此心。夢蝶之子。

何禍非福。何吉非凶。

誰達此觀。喪馬之翁。

俾吾爲秋毫之杪。

吾亦自足。不見其小。

俾吾爲泰山之阿。

吾亦無餘。不見其多。

是以達人。

靜則昭然與陰合迹。

此與に化する者。云に何を隨はざらん。

或は煦め或は吹き、或は盛或は衰、

千變と萬化と雖も、

一順に委して以て之を貫く。

彼を爲すも何ぞ非ならん、此を爲すも何ぞ是ならん。

誰か此心に冥する、蝶を夢むる子。

何の禍か福に非ざらん。何の吉か凶に非ざらん。

誰か此觀に達する、馬を喪ふの翁。

吾をして秋毫の杪たらしむるも、

吾亦自ら足れりとし、其小を見ず。

吾をして泰山の阿たらしむるも、

吾亦餘なし、其多きを見ず、

是を以て達人は、

靜なれば則ち昭然として陰と迹を合せ、

【一〇】委一順 自然に順應すること。

【一一】冥 冥合なり。

【一二】夢蝶之子 莊子なり。莊子の齊物論に昔者莊周夢爲蝴蝶とある。

【一三】喪馬之翁 淮南子人間訓に夫禍福之轉而相生、其變難見也、近塞上之人、有善術者、馬無故亡而入胡、人皆弔之、其父曰、此何遽不爲福乎、居數月、其馬將胡駿馬而歸、人皆賀之、其父曰、此

動則浩然與陽同波。

動けば則ち浩然として陽と波を同じうし、

委順而已孰知其他。

何邊不能爲禍乎、其子好騎、墮而折其髀、人皆弔之、其父曰、此何邊不爲福乎、居一年、胡人大入塞、近塞之人、死者十九、此獨以跛之故、父子相保、故福之爲禍、禍之爲福、化不可極、深不可測也とある。

時邪命邪。

時か命か、

吾其無奈彼何。

吾其れ彼を奈何ともするなし。

委邪順邪。

委か順か、

彼亦無奈吾何。

彼亦吾を奈何ともするなし。

夫兩無奈何。

夫れ兩ながら奈何ともするなし、

然後能冥至順而合。

然る後能く至順に冥し太和に合ふ。

太和。

故吾所以飲太和扣

故に吾太和を飲み至順を叩へて、

至順。

而爲無可奈何之歌。

奈何ともすべきなきの歌を爲る所以なり。

【題義】

宜しく自然に順應すべきことを述べた詩である。

【詩意】

光陰は矢の如く速に去り、紅顔も忽ち衰へる。生は留むべからず死は廻すことは出来ない。

身外の寵辱盛衰も去來して暫くも止むことはない。去る者は挽くことは出來ず、來る者は拒むことは出來ない。亦奈何ともすべからずである。獨り天地は長久で始もなく終もない。人の天地の間に生を寄するは、恰も太倉の一粟の如くである。されば宜しく道と逍遙し、心を縱にして樂むべきである。生を愛し死を惡み、窮を憂へ通を喜び、其骨を強くして其心に背き、冰炭相容れざるの戰を事とし、自ら其身を苦むるは愚の極である。彼の造物者は如何なる事でも出來るのだ。其化に従ふ者は宜しく其命に従ふべきである。千變萬化皆自然に順はんのみ。是非はもと定めなきものである。此意に冥合せる者は莊子である。禍福吉凶も定任のものではない。此を達觀した者は彼の馬を喪つた塞上の翁である。吾をして秋毫の末たらしむるも、吾亦足れり、自ら小なりとは思はず。吾をして泰山たらしむるも、敢て餘ありとせず、亦自ら多とせぬのである。されば達人は、一動一靜悉く自然の運化に順應し、其他を知らず。時か命か吾彼を奈何ともすべからず、委か順か彼亦吾を奈何ともすべからず。因つて奈何ともすべからざるの歌を作つたのである。

池上篇 并序

池上篇 并序

都城風土水木之勝。在東南偏。東南之勝。在履道里。里之勝。在西北隅。西開北垣第一。即白氏叟樂天退老之地。地方十七畝。屋室三之一。

水五之一。竹九之一。而島樹橋道間之。初樂天既爲主。喜且曰。雖有臺。無粟不能守也。乃作池東粟廩。又曰。雖有子弟。無書不能訓也。乃作池北書庫。又曰。雖有賓朋。無琴酒不能娛也。乃作池西琴亭。加石樽焉。樂天罷杭州刺史時。得太湖石一。華亭鶴二。以歸。始作西平橋。開環池路。罷蘇州刺史時。得太湖石。白蓮。折腰菱。青版舫。以歸。又作中高橋。通三島。逕罷刑部侍郎時。有粟千斛。書一車。泊臧獲之習。箒磬絃歌者。指百以歸。先是。潁川陳孝山與釀法酒。味甚佳。博陵崔晦叔與琴韻甚清。蜀客姜發授秋思。聲甚淡。弘農楊貞一與青石三。方長平滑。可以坐臥。太和三年夏。樂天始得請爲太子賓客。分秩於洛下。息躬於池上。凡三任所得。四人所與。泊吾不才身。今率爲池中物矣。每至池風春。池月秋水。香蓮開之旦。露清鶴唳之夕。拂楊石。舉陳酒。援崔琴。彈姜秋思。頽然自適。不知其他。酒酣琴罷。又命樂童登中島亭。合奏霓裳散序。聲隨風飄。或凝或散。悠揚於竹烟波月之間者久之。曲未竟。而樂天陶然已醉。睡於石上矣。睡起偶詠。非詩非賦。阿龜握筆。因題石間。視其粗成韻章。命

爲池上篇二云爾

【訓讀】都城の風土水木の勝は東南偏に在り。東南の勝は履道里に在り。里の勝は西北隅に在り。西開北垣の第一第は即ち白氏の叟樂天が退老の地なり。地は方十七畝。屋室は三の一、水は五の一、竹は九の一、而して島樹橋道之に間る。初め樂天既に主となり、喜び且曰く、臺ありと雖も粟なければ守る能はざるなりと。乃ち池東に粟廩を作る。又曰く、子弟ありと雖も書なければ訓ふる能はざるなりと。乃ち池北に書庫を作る。又曰く、賓朋ありと雖も琴酒なければ娛む能はざるなりと。乃ち池西に琴亭を作り石樽を加ふ。樂天杭州刺史を罷めし時、天竺石一、華亭の鶴二を得て以て歸り、始めて西平橋を作り、池を環る路を開く。蘇州刺史を罷めし時、太湖石・白蓮・折腰菱・青版舫を得て以て歸り、又中高橋を作りて三島逕を通ず。刑部侍郎を罷めし時、粟千斛、書一車、泊臧獲の箒磬絃歌を習ふ者指百あり以て歸る。是より先潁川の陳孝山法酒を興へ釀す。味甚だ佳なり。博陵の崔晦叔琴を興ふ。韻甚だ清し。蜀客姜發秋思を授く。聲甚だ淡し。弘農の楊貞一青石三を興ふ。方長平滑以て坐臥すべし。太和三年夏、樂天始めて請うて太子賓客となり、秩を洛下に分ち、躬を池上に息するを得たり。凡て三任の得たる所、四人の興へし所、泊び吾が不才の身、今率ね池中の物となる。池風の春、池月の秋、水香しく蓮開くの旦、露清く鶴唳くの夕に至る毎に、楊石を拂ひ陳酒を擧げ、崔琴を援き、姜の秋思を弾じ、頽然自適して其他を知らず。酒酣に琴罷むれば、又樂童に命じて中島亭に登りて霓裳散序を合奏せしむ。聲風に隨つて飄り、或は凝り或は散じ、竹烟波月の間に

悠揚ゆうやうすること之これを久ひさしうす。曲未きよくいまだだ竟まはらずして樂天陶然らくてんたうぜんとして已すでに醉ゑひ、石上せきじやうに睡ねる。睡起ねりおきて偶たまたま詠えいす。詩しに非あず賦ふに非あず。阿龜筆あきふでを握にぎり因よつて石間せきかんに題だいす。其その粗韻章ほまみんしやうを成なすを視み、命めいじて池上ちじやう篇へんとなすと云爾しかいふ。

【字解】 〔一〕都城 洛陽を指して言ふ。 〔二〕西開 開は里門なり。 〔三〕第一第 最先の邸宅。 〔四〕三之一 三分の一。 〔五〕天然石 天然は杭州靈隱山飛來峰の南に在る峰の名。 〔六〕華亭鶴 今の江蘇省松江縣西の平原村は古の華亭谷で、晉の陸機の故宅其側に在り。機の將に死せんとする時、華亭の鶴唳復た聞くべけんやと嘆じた。 〔七〕太湖石 太湖より採りし假山石。 〔八〕青版筋 青く塗つた板舟。 〔九〕臧獲 僕なり。 〔一〇〕筓磬 竝に樂器の名。詩經に磬筓鏘鏘とある。 〔一一〕指百 人口の數を計るを指といふ。猶ほ動物の若干頭といふが如し。 〔一二〕法酒 法に合ひて釀す所の酒。 〔一三〕崔晦叔 名は玄亮。 〔一四〕秋思 樂府怨思曲中の一。 〔一五〕分秩於洛下 分司東都なり。 〔一六〕三任 杭州刺史、蘇州刺史、刑部侍郎。 〔一七〕霓裳散序 樂曲の名。或は言ふ葉法善玄宗を引きて月宮に入り、樂を聞き、歸りて其半を寫す。たまたま西涼、婆羅門の曲を進む。聲調適合す。遂に月中聞く所を以て散序となすと。 〔一八〕阿龜 樂天の姪龜郎なり。

十畝之宅五畝之園。 十畝の宅、五畝の園。
有水一池有竹千竿。 水一池あり、竹千竿あり。
勿謂土狹勿謂地偏。 土狹しと謂ふ勿れ、地偏なりと謂ふ勿れ。
足以容鄙足以息肩。 以て鄙を容るるに足り、以て肩を息むるに足る。
有堂有亭有橋有船。 堂あり亭あり、橋あり船あり。

有書有酒有歌有絃。 書あり酒あり、歌あり絃あり。
有叟在中白鬚飄然。 叟の中に在るあり、白鬚飄然たり。
識分知足外無求焉。 分を識り足るを知り、外に求なし。
如鳥擇木姑務巢安。 鳥の木を擇び、姑く巢の安きを務むるが如く、
如龜居坎不知海寬。 龜の坎に居り、海の寬きを知らざるが如し。
靈鶴怪石紫菱白蓮。 靈鶴怪石、紫菱白蓮。
皆吾所好盡在吾前。 皆吾が好む所、盡く吾が前に在り。
時飲一杯或吟一篇。 時に一杯を飲み、或は一篇を吟ず。
妻孥熙熙雞犬閒閒。 妻孥熙熙として、雞犬閒閒たり。
優哉遊哉。 優なる哉遊なる哉、
吾將終老乎其間。 吾將に其間に終老せんとす。

【字解】 〔一〕妻孥 妻子なり。熙熙は樂む貌。 〔二〕閒閒 閑閑に同じ。往來する貌。詩經に桑者閑閑分とある。 〔三〕優哉 遊哉 閒暇自得の貌。

【題義】 宅中池上の樂を述べた詩である。

格律詩 池上篇并序

【詩意】十畝の宅に五畝の園あり。中に一池の水と千竿の竹とあり。土地は狭いけれども膝を容れ肩を息むるに足りる。堂あり亭あり、橋あり船あり、書物もあれば酒もあり、歌もあれば樂器もある。白鬚の老人たる吾は其中に閑居してゐる。己の分を知り足ることを知つて外には何物をも求めない。鳥の木を擇んで巢の安さを求め、龜の穴に居て大海の廣さを知らないのと同じである。鶴や石や紫菱や白蓮やは、皆其の好む所で、時に一杯の酒を飲み、一篇の詩を吟じ、妻子雞犬も皆熙熙として樂んで居る。吾は優游自適して此に終老しようと思ふ。

齒落辭 并序

齒落辭 并序

開成二年。予春秋六十六。瘠黑衰白。老狀具矣。而雙齒又墮。慨然感歎者久之。因爲齒落辭以自廣。其辭曰。

【訓讀】開成二年、予春秋六十六、瘠黑衰白して老狀具はれり。而して雙齒又墮つ。慨然として感歎すること之を久しうす。因つて齒落辭を爲り以て自ら廣うす。其辭に曰く、

【字解】〔一〕春秋 年齢。

嗟嗟乎雙齒。

嗟嗟乎雙齒、

自吾有之。

吾之有してより、

而俾爾嚼肉咀蔬。

爾をして肉を嚼み蔬を咀ひ、

銜杯漱水。

杯を銜み水に漱がしめ、

豐吾膚革。滋吾血髓。

吾が膚革を豊にし、吾が血髓を滋し、

從幼逮老。勤亦至矣。

幼より老に逮ぶ、勤亦至れり。

幸有輔車。非無斷齧。

幸に輔車あり、斷齧なきに非ざれども、

胡然捨我。一旦雙落。

胡然ぞ我を捨て、一旦雙び落つる。

齒雖無情。吾豈無情。

齒情なしと雖も、吾豈情なからんや。

老與齒別。齒隨涕零。

老は齒と別れ、齒は涕に隨つて零つ。

我老日來。爾去不廻。

我が老日に來り、爾去つて廻らず。

嗟嗟乎雙齒。

嗟嗟乎雙齒、

孰謂而來哉。

孰か而の來るを謂はんや、

孰謂而去哉。

孰か而の去るを謂はんや。

齒不能言。請以意宣。

齒言ふ能はず、請ふ意を以て宣せん。

爲口中之物。

口中の物となり、

忽乎六十餘年。

忽乎たること六十餘年。

昔君之壯也。

昔君の壯なるや、

血剛齒堅。

血剛に齒堅し。

今君之老矣。

今君の老いたる、

血衰齒寒。

血衰へ齒寒し。

輔車斷齟。日削月朘。

輔車斷齟、日に削られ月に朘る。

上參差而下脆脆。

上は參差として下は脆脆たり。

曾何足以少安。

曾ち何ぞ以て少しく安んずるに足らん。

嘻君其聽哉。

嘻君其れ聽け、

女長辭姥。臣老辭主。

女は長じて姥を辭し、臣は老いて主を辭し、

髮衰辭頭。葉枯辭樹。

髮は衰へて頭を辭し、葉は枯れて樹を辭す。

物無細大。功成者去。

物細大となく、功成る者は去る。

君何嗟嗟。

君何ぞ嗟嗟たる、

獨不聞諸道經。

獨り諸を道經に聞かずや、

我身非我有也。

我が身は我が有に非ざるなり、

蓋天地之委形。

蓋し天地の委形なりと。

君何嗟嗟。

君何ぞ嗟嗟たる、

又不聞諸佛說。

又諸を佛說に聞かずや、

是身如浮雲。

是身は浮雲の如し、

須臾變滅。

須臾にして變滅すと。

由是而言。君何有焉。

是に由つて言へば、君何か有らんや。

所宜委百骸而順萬化。

宜しく百骸を委して萬化に順ふべき所なり、

胡爲乎嗟嗟於一牙。

胡爲れぞ一牙一齒の間に嗟嗟たると。

一齒之間。

吾應曰吾過矣。

吾應へて曰く、吾過てり、

爾之言然。

爾の言然りと。

【字解】【一】而俾、而の字、一に爾に作る。【二】輔車、頰輔及び牙車。【三】斷齟、はぐき。【四】胡然、詩經秦風小戎篇に、胡然我念之とある。【五】參差、整齊ならざる貌。脆脆は危き貌。【六】姥、姆に同じ。女師なり。【七】委形、莊子知北遊篇に、

格律詩 齒落辭并序

七五七

生非汝有、是天地之委和也、性命非汝有、是天地之委順也、子孫非汝有、是天地之委蛻也とある。【六】萬化 自然の化。【七】爾之言然 お前の言ふ通りだとの意。論語に、子曰、偃之言是也、前言戲之耳とある。

【題義】齒の抜け墮ちた時の感想を述べた詩である。

【詩意】「ああ一枚の齒よ。俺は始めてお前を得て以來、お前を用ひて肉を嚼んだり野菜を食つたり、杯を銜んだり水に漱いだりして、吾が身を養つて來た。お前も永らく勤勞したものだ。然し輔車や斷齧は尙ほ幸に存するけれども、お前はなせ俺を捨てて墮ちたのだ。お前は何といふ考もないのかも知れないが、俺は實に情なきを得ない。お前に別れたので涙が落ちる。俺は日増に老い、お前は去つて歸らない。かくも早く老が來て、お前が去らうとは夢にも思はなかつた」と嗟いた。齒は自ら答へることが出來ないから、俺が意を以て代に言つた。「私は貴下の口中に生じてから忽ち六十年を過ぎました。貴下の壯年時代には血氣が盛で齒も丈夫でありましたが、今は貴下が老いたので血氣も衰へ齒も弱り、輔車や斷齧も日増に縮まり、不揃になり危げになつた。これは自然の道理で已むを得ないのです。女は成長すれば保姆の手を離れ、臣下は老いては主君を辭し、髪は衰へては頭を辭し、葉は枯れると樹を辭するのが習ひで、如何なる物でも皆この通り、功の成つた者は去るのが常で、今更嗟くには及ばぬことです。道經には、身は我が有に非ず、天地の委形なりとあり、佛説では身は浮雲の如し、須臾にして變滅すと謂つてあります。されば貴下も身を委して自然の化に順ふべきでありませぬ。敢て齒の抜けたのを嗟くべきではありませんせぬ」といふ。そこで俺は「成程お前の言ふ通りだ。俺の嗟いたのは誤りであつた」と應へた。

の嗟いたのは誤りであつた」と應へた。

不能忘情吟 并序

不能忘情吟 并序

樂天既老。又病風。乃錄家事。會經費。去長物。妓有樊素者。年二十餘。綽綽有歌舞態。善唱楊枝。人多以曲名名之。由是名聞洛下。籍在經費中。將放之。馬有駱者。駟壯駿穩。乘之亦有年。籍在經物中。將鬻之。圉人牽馬出門。馬驤首反顧。一鳴。聲音間似知去而旋戀者。素聞馬嘶。慘然立。且拜。婉孌有辭。辭畢泣下。予聞素言。亦愍默不能對。且命廻勒反袂。飲素酒。自飲一杯。快吟數十聲。聲成文。文無定句。句隨吟之短長也。凡二百五十五言。噫。予非聖達。不能忘情。又不至於不及情者。事來攬情。情動不可柅。因自哂。題其篇曰不能忘情吟。吟曰。

【訓讀】樂天既に老い、又風を病む。乃ち家事を録し經費を會し長物を去らんとす。妓樊素といふ者あり。年二十餘。綽綽として歌舞の態あり。善く楊枝を唱ふ。人多く曲名を以て之に名づく。是に由つて名洛下に聞ゆ。籍經費の中に在り、將に之を放たんとす。馬駱といふ者あり。駟壯駿穩、之に

格律詩 不能忘情吟并序

乘る亦年あり。籍經物の中に在り。將に之を鬻がんとす。圉人馬を牽き門を出づ。馬首を驤げ反顧して一鳴す。聲音の間去るを知つて旋戀ふる者に似たり。素馬の嘶くを聞き慘然として立つて且拜し、婉變として辭あり。辭畢つて泣下る。予素の言を聞き、亦慙黙して對ふる能はず。且命じて勒を廻し杖を反し、素に酒を飲ましめ、自ら一杯を飲み、快吟すること數十聲、聲文を成し、文に定句なし。句は吟の短長に隨ふなり。凡て二百五十五言。噫、予は聖達に非ず、情に忘るる能はず。又情に及ばざる者に至らず。事來りて情を攪し、情動いて柅づべからず。因つて自ら晒ひ、其篇に題して不能忘情吟といふ。吟に曰く、

【字解】 〔一〕 病風 中風に罹る。 〔二〕 會 計算する。 〔三〕 長物 元物なり。 〔四〕 楊枝 楊柳枝なり。樂曲の名。樂天の詩にも古歌舊曲君休聽、聽取新翻楊柳枝とある。 〔五〕 洛下 洛陽。 〔六〕 駱 白馬黑鬣のもの。詩經に、我馬維駱とある。 〔七〕 經物 整理すべき物。 〔八〕 圉人 馬を養ふ者。 〔九〕 婉變 少く美しき貌。 〔一〇〕 廻勒 馬銜をめぐらす。

鬻駱馬兮放楊柳枝。
掩翠黛兮頓金羈。
馬不能言兮。
長鳴而却顧。
楊柳枝再拜長跪而

駱馬を鬻ぎ楊柳枝を放つ、
翠黛を掩うて金羈を頓す。
馬言ふ能はず、
長鳴して却顧す。
楊柳枝再拜長跪して辭を致す。

【字解】 〔一〕 翠黛 美しき眉。
金羈は黄金のくつわ。

致辭。

辭曰。主乘此駱五年。
凡千有八百日。
銜檠之下。不驚不逸。
素事主十年。
凡三千有六百日。
巾櫛之間。無違無失。
今素貌雖陋。
未至衰摧。
駱力猶壯。又無虺隤。
即駱之力尙可以代。
主一步。
素之歌亦可以送主一杯。

辭に曰く、主此駱に乗ること五年、
凡て千有八百日。
銜檠の下、驚かず逸せず。
素主に事ふること十年、
凡て三千有六百日。
巾櫛の間、違なく失なし。
今素貌陋なりと雖も、
未だ衰摧に至らず。
駱力猶ほ壯にして、又虺隤するなし。
即ち駱の力尙ほ以て主の一步に代
るべし。
素の歌も亦以て主に一杯を送るべし。

〔一〕 銜檠 くつわ。
〔二〕 逸 逃げ走る。

〔三〕 虺隤 疲病する。詩經に、我馬虺隤とある。

一旦雙去。有去無廻。

一旦雙び去り、去るありて廻るなし。故に素將に去らんとして其辭するや苦し。

駱將去其鳴也哀。

駱將に去らんとして其鳴くや哀し。

此人之情也。

此人の情なり。

馬之情也。

馬の情なり。

豈主君獨無情哉。

豈主君獨り情なからんやと。

予俯而歎。仰而哈。

予俯して歎じ、仰いで哈ふ。

且曰駱駱爾勿嘶。

且曰く駱駱爾嘶く勿れ。

素素爾勿啼。

素素爾啼く勿れ。

駱反廐。素反閨。

駱は廐に反れ、素は閨に反れ。

吾疾雖作年雖頽。

吾疾作ると雖も年頽ると雖も、

幸未及項籍之將死。

幸に未だ項籍の將に死せんとするに及ばず。

何必一日之內。

何必必ずしも一日の内、

棄離兮而別虞兮。

驩を棄てて虞に別れんと。

乃目素兮素兮。

乃ち目す素よ素よ、

爲我歌楊柳枝。

我が爲に楊柳枝を歌へ。

我姑酌彼金疊。

我姑く彼の金疊に酌み、

我與爾歸醉鄉去來。

我爾と醉郷に歸らん去來と。

【七】金疊 酒甕。木を以て之を造り飾るに金を以てす。詩經周南卷耳篇に、我姑酌彼金疊とある。

【題義】

妓を解放し馬を賣るに忍びざりしことを述べた詩である。併し冷齋夜話には、「東坡南遷するときは、侍兒王朝雲といふ者従つて行かんことを請ふ。東坡之を嘉して詩を作り、不學楊枝別樂天の句あり。其序に云く、世謂ふ樂天鬻駱放楊枝詞ありと。其の老病に至つて去るに忍びざるを嘉す。然れども夢得（劉禹錫）の詩に曰く、春盡絮飛留不得、隨風好去落誰家」と。樂天亦云く、病

【詩意】

駱を賣り樊素を解放しようとした時に、樊素は美しき眉を掩ひ、駱は銜を止めた。駱は物言ふことが出来ないのと同顧して嘶き、樊素は再拜長跪して暇を告げて言うた。「御主人様には此馬に乗られてから既に五年、其間此馬は驚かす逸せず、能く御奉公致しました。私も十年間御意に違はずお事へ申しました。今私の容貌はまだ老衰せず、駱もまだ血氣盛でありますから、尙ほ歩に代るに堪へ、一杯の酒を侑めるに足るのですが、今暇を賜はつて一時に去ることになりましたのは、誠に哀に堪へられませぬ」と。之を聞いた予は俯して歎じ仰いで哈ひ、「駱も樊素も、どうぞ啼いて

くれるな。俺はお前等に暇を出すには忍びない。どうぞ元の儘にゐてくれよ。俺は老い朽ちてはゐるが、進退谷まつた項羽のやうに、一日の中に騷と虞美人とに別れねばならぬほどではない」と言ひ、因つて目で知らせた。「樊素よ、我が爲に楊柳枝の曲を歌つてくれ。俺は一杯の酒を傾けてお前と俱に快く酔ふであらう」と。

白樂天詩後集

卷十九

補遺 卷上

格律詩

凡五十 五首

勸酒

以下出文苑英華

酒を勸む

以下、文苑英華に出づ。

昨與美人對尊酒。

昨美人と尊酒に對す、

朱顏如花腰似柳。

朱顔は花の如く腰は柳に似たり。

今與美人傾一杯。

今美人と一杯を傾く、

秋風颯颯頭上來。

秋風颯颯として頭上に來る。

年光似水向東去。

年光水に似て東に向つて去り、

兩鬢不禁白日催。

兩鬢禁せず白日に催すを。

東鄰起樓高百尺。

東鄰樓を起す高さ百尺、

璇題照日光相射。

璇題日に照りて光相射る。

【字解】 〔一〕 朱顔 紅顔なり。

若き顔色。樂天の詩に、又無大藥駐朱顔とある。

〔三〕 璇題 璇は美玉なり。題は棧の端。

珠翠無非二八人。
 盤筵何啻三千客。
 鄰家儒者方下帷。
 夜誦古書朝忍饑。
 身年三十未入仕。
 仰望東鄰安可期。
 一朝逸翮乘風勢。
 金榜高張登上第。
 春闈未了冬登科。
 九萬搏風誰與繼。
 不逾十稔居台衡。
 門前車馬紛縱橫。
 人人仰望在何處。
 造化筆頭雲雨生。

珠翠二八の人に非ざるはなく、
 盤筵何ぞ雷に三千の客のみならんや。
 鄰家の儒者方に帷を下し、
 夜は古書を誦し朝は饑を忍ぶ。
 身年三十未だ入り仕へず、
 仰いで東鄰を望むも安んぞ期すべけん。
 一朝逸翮風勢に乘じ、
 金榜高く張りて上第に登る。
 春闈未だ了らず冬登科す、
 九萬風に搏つて誰か與に繼がん。
 十稔を逾えずして台衡に居り、
 門前の車馬紛として縱橫。
 人人仰ぎ望むも何處にか在る、
 造化筆頭雲雨生ず。

【一】珠翠 美人の粧飾。二八は十六歳。
 【二】盤筵 宴席なり。三千客は孟嘗君食客三千人を養ひし故事。
 【三】下帷 帳を垂れること。漢の董仲舒帷を下して書を讀む。弟子次を以て相授く。或は其面を見ざりきといふ。
 【四】逸翮 翼を奮つて飛躍する。
 【五】金榜高張 試に應じて及第すること。上第は及第。
 【六】春闈 進士の試験は三月に行はる。故にかくいふ。登科は及第なり。
 【七】九萬搏風 忽ち昇進すること。莊子逍遙遊篇に、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九萬里とある。扶搖は大風なり。
 【八】十稔 十年なり。台衡は並に星の名。宰相に喩ふ。

東鄰高樓色未改。
 主人云亡息猶在。
 金玉車馬一不存。
 朱門更有何人待。
 牆垣反鎖長安春。
 樓臺漸漸屬西鄰。
 松篁薄暮亦棲鳥。
 桃李無情還笑人。
 憶昔東鄰宅初構。
 雲薨彩棟皆非舊。
 瑇瑁筵前翡翠棲。
 芙蓉池上鴛鴦鬪。
 日往月來凡幾秋。
 一衰一盛何悠悠。

東鄰の高樓色未だ改まらず、
 主人云に亡びて息猶ほ在り。
 金玉車馬一も存せず、
 朱門更に何人をか待つある。
 牆垣反つて鎖す長安の春、
 樓臺漸漸西鄰に屬す。
 松篁薄暮亦鳥を棲ましめ、
 桃李情なきも還つて人を笑ふ。
 憶ふ昔東鄰宅初めて構ふ、
 雲薨彩棟皆舊に非ず。
 瑇瑁筵前翡翠棲み、
 芙蓉池上鴛鴦鬪ふ。
 日往き月來る凡て幾秋、
 一衰一盛何ぞ悠悠たる。

【一】造化 云云 造化は天地。以て天子に喩ふ。雲雨は恩澤なり。
 【二】息猶在 存命なるをいふ。
 【三】朱門 朱塗の家。富豪の家。
 【四】瑇瑁 鼈甲の類。翡翠は美しき鳥の名。
 【五】芙蓉 蓮花なり。
 【六】悠悠 行く貌。

但教^(二七)帝里^(二七)笙歌在。但帝里^(二七)の笙歌^(二七)をして在らしめば、
池上年年^(二八)醉^(二八)五侯^(二八)。池上年年^(二八)五侯^(二八)を醉はしめん。

【二七】帝里 帝都。
【二八】五侯 漢の元帝、舅王譚・王逢時・王根・王立・王商兄弟五人を同日に侯に封ず。世之を五侯といふ。

【題義】歲月富貴の恃むに足らず、即時一杯の酒に如かざることを述べた詩である。

【詩意】嘗て美人と酒を飲んだ。美人の顔は花の如く腰は柳の如くであつた。今復た其美人と酒を飲めば、歲月の流と共に秋が襲つて来て、美人の兩鬢にも霜が降つた。恃み難きは人の若さである。さして東鄰の家では百尺の樓臺を建て、榱の端が日に輝き、二八の美人が粧を凝らし、三千の客が集つて盛宴を張るといふ豪勢ぶりであつた。西鄰の儒者は刻苦して書を読み、年三十になつてもまだ官に任へず、徒に仰望するのみで、東鄰の豪勢ぶりは思ひも寄らなかつた。所が如何なる風の吹きまはしか、トントン拍子で及第し、十年たたすの中に相位に昇り、車馬は門前に滿ち、皇恩にも浴するやうになつた。東鄰の樓閣は色未だ改まらないのに、早くも主人は失脚し、生命だけは残つてゐるが金玉車馬は一つも残らず。樓閣が人待ち顔に空しく立つてゐる。都の春に淋しく門戸を鎖して空屋敷となれば、やがて災厄が西鄰にも及んで、夕空に庭前の松や竹に鳥が棲むやうになり、桃や李の花が人を笑ふものの如く咲き誇つてゐる。憶へば東鄰の樓閣を初めて建てた時は、薨や棟が雲に聳え、瑤瑤の筵には翡翠が棲み、蓮花の池には鴛鴦が住んでゐたものであつたが、一時の豪勢も一場の夢と消え果てた。ただ帝京の笙歌の存する限りは、時を得た貴人が醉遊を恣にするであらうが、そのま

た貴人も常住のものではない。人の身の榮華も亦恃むに足らない。

南陽小將張彥硤口鎮稅人場射虎歌

南陽の小將張彥が硤口鎮の稅人場にて虎を射たる歌

海内昔年狎^(一)太平。海内昔年^(一)太平に狎れ、
横目穰^(二)穰何崢嶸。横目^(二)穰穰として何ぞ崢嶸たる。
天生天殺豈^(三)天怒。天生^(三)天殺す豈天怒るならんや、
忍使朝朝餵^(四)猛虎。朝朝^(四)猛虎に餵はしむるに忍びんや。
關東驛路多^(五)丘荒。關東^(五)の驛路丘荒多し、
行人最忌稅人場。行人^(五)最も忌む稅人場。
張彥雄特制^(六)殘暴。張彥^(六)雄特殘暴を制す、
見之叱起如叱^(七)羊。之を見て叱起すること羊を叱するが如し。
鳴弦霹靂越^(八)幽阻。絃を鳴らす霹靂幽阻を越ゆれば、
往往依林猶^(九)旅拒。往往^(九)依林に依つて猶ほ旅拒す。

格律詩 南陽小將張彥硤口鎮稅人場射虎歌

【字解】【一】南陽 河南省南陽府治。【二】硤口鎮 口は石の誤か。硤石は驛の名。河南省陝縣の東南七十里に在り。古の崢嶸關なり。東は澗池に通じ西は函谷に通ず。【三】横目 目を怒らすこと。埤雅に、熊羆眼直、惡人横目とある。穰穰は物の豐盛なる貌。崢嶸は高峻の貌。【四】關東 函谷關の東。【五】殘暴 殘は傷害の意。【六】霹靂 雷の急擊なるもの。幽阻は嚴阻なり。【七】旅拒 従はざる貌。後漢書に、若大姓侵小民、黠羌欲旅拒、此即太守事耳とある。【八】錦茵 錦の敷物。【九】老蒼 老虎